

関山

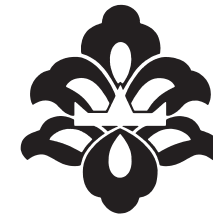
かんざん

第13号

関
山

中尊寺〈寺報〉第十三号

平成十九年(二〇〇七)一月



寺報 中尊寺

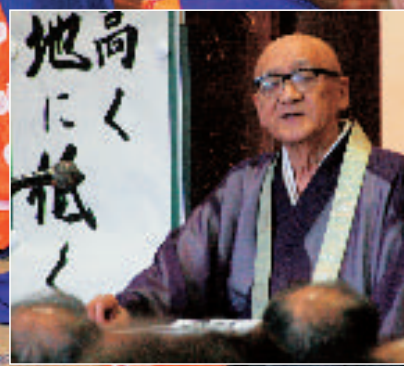
〈発行 中尊寺〉





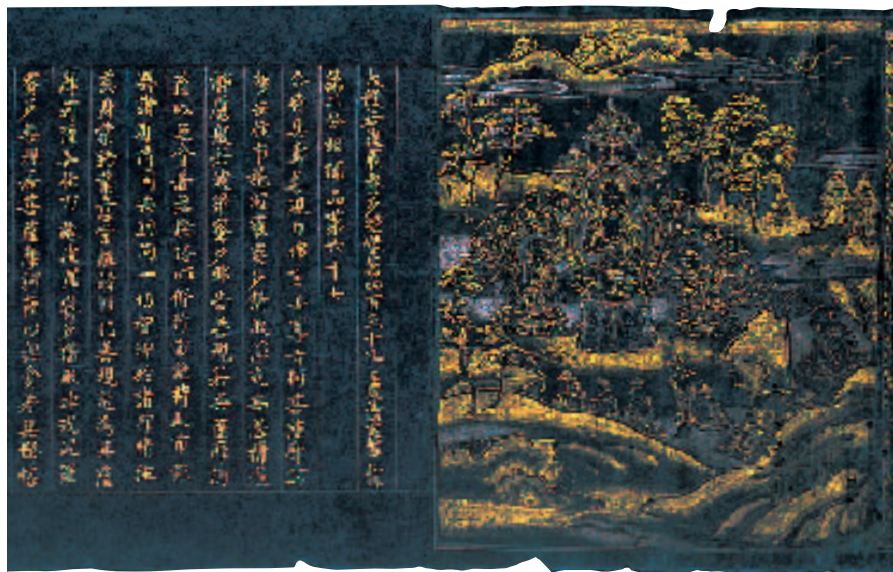
新嘉坡

自洵其意是諸佛教



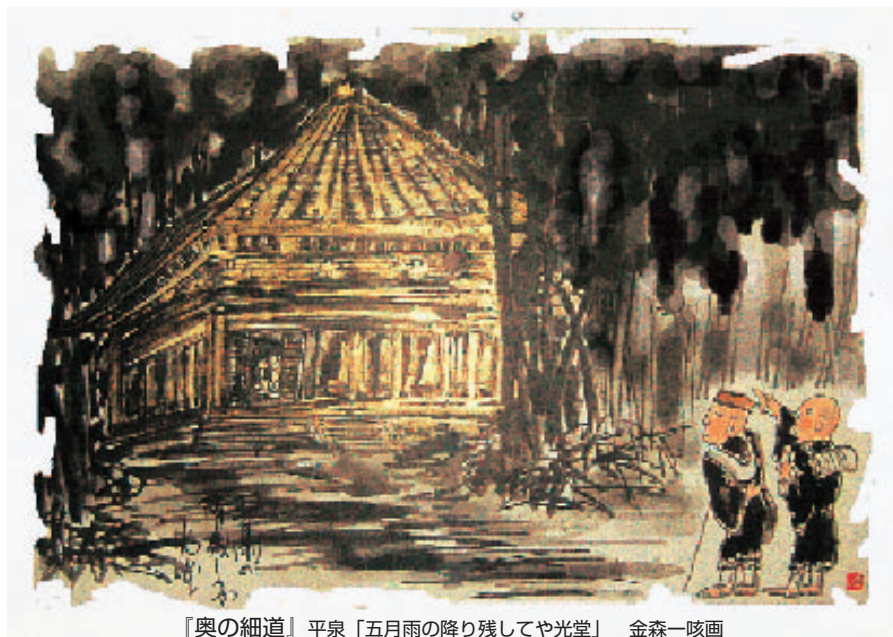
山田貫首晋山式

十月七日、千田孝信貫首の退山式ならびに山田俊和新貫首の晋山式が厳修された。天台座主 猊下御名代三千院御門主小堀光詮探題大僧正より辞令を賜り、開山慈覚大師相伝の「如意」が千田貫首より引き継がれた。



高村哲郎氏御奉納の金字経(9月16日)

奥州市江刺区の高村哲郎氏より紺紙金字「大般若経」一巻を御奉納いただいた。
(記事82ページ)



『奥の細道』平泉「五月雨の降り残してや光堂」 金森一咳画
「金の雫の光堂」(記事22ページ)



藤原基衡公八百五十年
御遠忌大法要
基衡公のご命日(旧暦の三月十九日)にあたる四月十六日、中尊寺・毛越寺合同で御遠忌法要が執り行われた。法要後、金色堂の霊前に。

大正大学博物館実習
ワールドワーク「骨寺村」

「骨寺村荘園遺跡」山王石屋の聖なる山頂に。
(記事91ページ)



「骨寺村絵図」の世界を一望



四寺法要

——立石寺——

六月十三日、恒例となった四寺法要が立石寺で勤修された。



明石康氏来山

五月二十八日、元国連事務次長の明石康氏が来山された。



「平泉の文化遺産」国際専門家会議

(6月9日)

六月八〜十一日までの四日間。「平泉の文化遺産」の価値や課題を検討する、国際専門家会議が開催された。九日には中尊寺を視察。千田貫首が金色堂、経蔵、讚衡蔵、能舞台を案内された。



大池ハス(中尊寺大池跡出土)の開花

(8月6日)

一昨年、栽培依頼先の栃木県内で開花した大池ハス。昨年四月に株分けされ、八百数十年ぶりに中尊寺大池跡で開花した。

(記事90ページ)

ドナルド・キーン氏来山(7月7日)

「岩手日報」主催平泉文化シンポジウムの途次、ドナルド・キーン氏が来山。



天台宗ニューヨーク別院落慶一周年

米国ニューヨークに天台宗の別院が完成して一年、十月二十一日に「落慶一周年記念法要」が行われた。写真は山田貫首が導師をお勤めになった「声明公演」。

(記事69ページ)

中尊寺新能



能「小鍛冶」(8月14日) 佐々木多門師

中尊寺能

能「紅葉狩」(11月3日)

奉納された「般若」の面で。

(記事14ページ)



狂言「附子」(5月5日)

山内の子弟 菅野兄弟
が立派に太郎冠者と次
郎冠者の役を勤めた。



年輪年代法調査結果を発表(3月3日、同日付の「岩手日報」夕刊より転載)

「清衡建立」裏付け

平泉・中尊寺金色堂

平泉の「清衡建立」の裏付けとして、中尊寺金色堂の建立年代を調査した結果、1124年(保元元年)に建立されたことが確認された。

年輪年代法で確認

文化研 棟木の「1124年」正しい

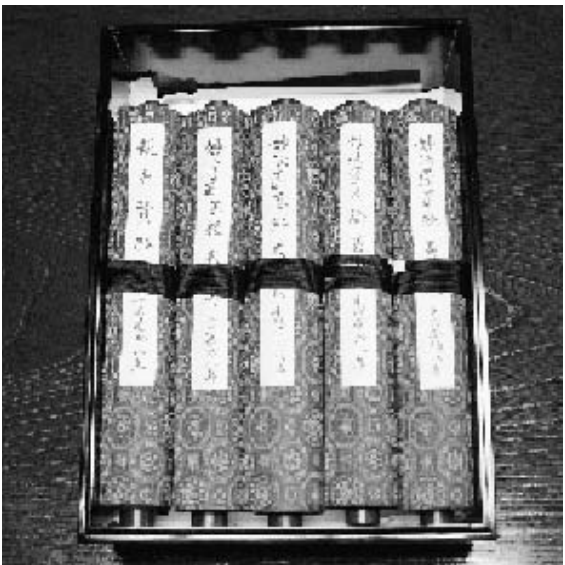
本報記者が、平泉の中尊寺金色堂を訪れ、建立年代を調査した結果、1124年(保元元年)に建立されたことが確認された。調査は、文化研が採取した棟木の年輪年代法によるもので、調査結果は、3月3日(土)の「岩手日報」夕刊に掲載された。

調査は、文化研が採取した棟木の年輪年代法によるもので、調査結果は、3月3日(土)の「岩手日報」夕刊に掲載された。

調査は、文化研が採取した棟木の年輪年代法によるもので、調査結果は、3月3日(土)の「岩手日報」夕刊に掲載された。

法華経一部十巻（開結共）を奉納（11月10日）

一関市在住の堀内ツエ子、佐藤トモ子、中村いせ子の三氏は、平成十三年八月に法華経八巻（開結共一部十巻）の写経、中尊寺へ奉納されることを発願。毎月、一度は本堂にて写経を続けること五年。昨年九月十五日に書写を完了。卷子装に表具された十巻は、写経奉納式で寺に納められた。



かんざん亭で「菅江真澄のブレ講演会」（9月21日）

天明六年（一七八六）に平泉を訪れた旅行家、「民俗学の祖」と称される、菅江真澄についての講演会が開催された。

本年五月二十六日に「一関文化センター」で開催される「第二十回全国菅江真澄研究会岩手大会」のプレイベントとして開催されたもので、県内外から真澄研究者が多数参加された。



もっと知りたい平泉

世界遺産塾

六月二十四日に開講した「世界遺産塾」が境内で研修。平泉町・奥州市・一関市の小学生約三十人が参加した。



恒例・大節分会

二月三日、関取朝赤龍を迎えて元気よく。



雨過天晴

貫首 山田俊和

平成十八年十月七日、関山中尊寺伝灯相承式が厳修され、本堂ご宝前に於いて、中尊寺中興第二十七世千田孝信大僧正様より、第二十八世の法灯を継承させて頂きました。今後ともよろしくご法助の程お願い致します。

さて、「雨過天晴」（うかてんせい）の言葉についてです。

伝灯相承式当日は、折り悪しく台風が二つ同時に来襲し、めったに無いという荒天でした。本堂前庭は豪雨のため雨水が溜り歩けない程になりました。また参道は落葉で埋め尽されました。ご本堂は激しい風にギシギシと悲鳴をあげ続ける、そういう中での相承式となりました。

台風一過、翌日は晴天になりました。相承式にご臨席下さった中国大使館の公使参事官趙宝智氏をご案内して金色堂を参拝した折に、趙氏は中国で古くから言われている「雨過天晴」という言葉があ

ると言われ、その言葉をメモされ、私に贈ると言われたのです。そして次のように話されました。

中国では、大きな行事の時、何か新しい事を始めようとする時、雨が降るのは吉兆とされ喜ばしい。即ち、雨がそれまでの過ち、悩み、苦しみ、悲しみ等々、悪い事を全て洗い流して、雨後に晴天が来るように、佳い事が沢山舞い込んで来る。とのことで激励いただきました。

私は晴男と自慢をして居りましたが、そういえば、宗門の役職に就任していた時、宗門、総本山の重要な大行事の時、荒天候の中で執行したことを思い出しました。

考えてみますと、良いこと、悪いこと、どちらも吾身に起きます。悪いことがあっても、じっと耐えて、乗り越えて行かなければなりません。また、私達の心の中には、善心と悪心が同居しています。常に善心を保つためには、神仏の御加護を願い、自分もできるだけの精進努力を忘れてはならないでしょう。

振り返ってみますと、私達はそれなりに苦労や障害をすでに乗り越えてきていることに気がつくはずでず。

“だいじょうぶ”必ずいいことがある。

「雨過天晴」忘れられない言葉になりました。



平泉は

“浄土”を実現できるか

西村 幸夫

平泉国際会議での議論

去る二〇〇六年六月八日から十一日にかけて平泉の地で開催された『平泉の文化遺産』の顕著な普遍的価値と保存管理に関する国際専門家会議」において、海外の専門家から指摘された興味深い視点として次のふたつがあげられる。

ひとつは、平泉は「都市遺跡」ということができるかという点である。

たしかに平泉には支配統治機構としての政庁があり、聖地としての寺院群があるが、都市というには庶民の生活が見られないではないかという指摘である。このことは、平泉の遺跡をどうとらえるかという視点の問題であり、必ずしも世界遺産

の顕著で普遍的な価値と直接結びつく議論ではないが、たしかにいわれようと生活者のいない都市はないはずである。支配者だけの拠点であるとしたら、それは政治拠点ではあっても都市とはいえないだろう。

一方で日本側には平泉を都市といたい雰囲気が一貫してあった。それはここが京都や奈良とは異なった構成原理から成り立っているということ、が独自性の議論の根拠にあるので、これを都市ではないといってしまうと、京都や奈良との比較が意味をなさなくなってしまうからだという意識があったからだと思う。

そのうえ、平泉がいかに政治体制を壊滅させられたにしても、信仰の拠点としては存続し、聖地はその後の居住者にもそのようにあがめられ、あるいはおそれられ、現在も都市として生き続けているという事実を置きたいという意識が背景にあったからだともいえる。

もうひとつ、海外の識者から指摘された点は、平泉の集落建設にあたって、浄土信仰の実体化と

いう観点が重要だということである。たとえば、無量光院と背後の金鶏山、手前の浄土庭園、さらにこちら側の政庁との位置関係こそが浄土思想の具現化であるという考え方である。

いずれの指摘もたしかに私たちも考えてこなかったわけではないが、あらためて指摘されてみると、両指摘が重なってさらに重みを増す問題もあることに気づかされる。

それは何か。

それは、平泉の都市生活者の居住の問題である。

平泉が都市として機能してきたということを示すためにも、都市生活者の息吹をなんらかのかたちで示したいものであるし、都市居住者の住居が浄土思想の都市の縄張りの中でどのように配置されていたのかを知ることが、都市そのものの計画性の本質を問うことにつながるからである。

さらにいうと、平泉のことを、その後も生き続けて今日に至る都市であるといいたいのであるならば、現在の都市や集落が平泉の理念をどのよう

な形で受け継いでいるといえるのか、明示すべきではないかということである。それは可能なのか。昨年六月に開催された国際会議は、これらのことに直接言及したわけではないが、ひとりの参加者として、当日の議論を敷衍ふえんするとこうした問いかけが私たちの側にふりかかってくるは避けられないという印象を持ったのは事実である。

今日の問題としての「都市」

以上の議論から帰結することは何か。端的に言うて、いま何が問題で、何をどうすればいいのか。

問題は寺院跡の発掘や整備、柳之御所の史跡整備などに止まらないことは明らかである。現にある集落をどのように考えるのか、が主要な問題のひとつとして浮上してきた。たとえば、先の例を再び引用すると、無量光院跡の背後を縦貫する旧国道沿いに広がる住宅群の現在の姿は金鶏山から政庁に至る軸線や地割りとまったく無関係に見えるがそれでいいのか、という問いである。また、中尊寺門前の国道四号線沿いの商店の姿や看板は

極楽浄土とどのような関係があるのか、という問いである。

現時点での答えは、「残念ながらまったく無関係」というものだろう。なぜなら両者を結びつける意図がまったく欠落しているからである。

しかし、それでいいのだろうか。

たしかに、国道やJRの路線は近代のものであるから、これらが平泉の古来の都市形成の理念を体現するというのも難しい。しかし、それにしても近代の都市計画がそれなりにこれまでの都市の理解と尊崇のうえに立案されているとしたら、平泉の一般的な道路景観や駅前景観は、現代的な視点からいかにこれまでの都市の価値観に沿って、さらによりよいものを付け加えるかというスタンスで計画されてしかるべきであろう。そしてそのように計画立案されているとしたら、立ち上がる現実の都市風景も、それなりに風格を持ったものであるはずだ。しかし、現実はそうなっているか。悲しいかな、どこにでもある当たり前の集落風景ではないか。

さらに問題なのは門前町の部分である。観光客相手の施設やその看板の姿形がいったいこの都市を形作ってきた浄土思想とどのような関係にあるというのだろうか。おおきな問題である。この点は次節でもう一度議論したい。

平泉は本当の門前町を持ち得るか

———そのための処方箋

門前町らしい門前町というものはどのようなものであるか。全国できっちりとした門前町が今日も機能しているところとして、思いつくところを挙げるとすると、日光・東照宮の門前、長野・善光寺の門前、東京・浅草寺の門前、讃岐・金刀比羅宮の門前、福岡・太宰府の門前などがある。

ただし、これらの門前町では、従来から動線の拠点である鉄道などがやや離れたところに位置し、そこからの参拝客の動線が単一でかつ明確であるという共通した特徴を有している。

これに対して中尊寺の門前の場合は寺域外の動線がそれほど明確ではない。そのことがかっちり

とした門前町が形成されることを阻む物理的な要因だったのだろうか。

では、そのような空間的な特性を持った門前町はないのか――

いや、少なくともひとつある。それは高野山である。金剛峯寺門前のこの集落はじつに雰囲気のある門前町の風情を今日まで保っている。おかしな形や色をした店舗や広告物はない。電線も地中化されている。高野山が欧州の旅行客に人気が高いのはそのことも理由としてあるのだろうか。

どうしてそのようなことが高野山で可能だったのか。

聞くとここでは、高野山の土地はほとんど金剛峯寺の所有地なので、ほとんどの商店は借地だという。つまり、大家であるお寺の了承を得ないと増改築や宣伝ができず、勝手な商業活動ができないらしいのである。借地の制約が美しい門前町景観を保つことに寄与しているのである。

それでは平泉ではどうか。土地所有の詳細を承知していないので、細かな議論は差し控えるが、

一般論として、土地建物が私有であると財産権の制約から厳しい規制はなかなか難しいことになる。

しかし、方法が無いわけではない。

以下、どのような規制が可能かを検討してみよう。

もっとも現実的な方法は、景観法に基づく景観条例を制定し、対象地区の建造物の形態や意匠、色彩等を厳しく規制することである。これは世界遺産のバッファゾーンの要件としても必須である。

現在、平泉町には二〇〇四年三月に制定された「平泉の自然と歴史を生かしたまちづくり景観条例」(以下、景観条例)があり、これは二〇〇五年一月より施行されている。この条例はバッファゾーンの要件を満たすことを目的として策定されたもので、その意味では最低限のルールは景観条例において明記されている。

すなわち、コアゾーン及びバッファゾーンにあたる地域は、景観条例において歴史景観地区として線引きされ、種々の景観育成基準が定められ

ている。

たとえば、建造物の高さは10 m以下、屋根勾配は $3/10$ 以上、 $5/10$ 以下を標準とする、自動販売機は設置しない、木竹の伐採は避ける、建築物は和風木造建築を基本とする、屋根は鉄板又は和瓦を基本とする、付属屋は下屋を活用し、和風（ポリカーボネート不可）を基本とする、建築設備等は外部から見えないようにするなどの基準である。

景観変更行為をおこなおうとするものは行政と事前協議をしなければならず、その後届出をおこない、さらに景観育成基準に適合することが求められる。

たしかにこれだけを見ると、十分に景観規制がおこなわれるように見える。

しかし、この景観条例には問題点がある。

それは、掲げられた景観育成基準への適合が町民や事業者にとって努力義務でしかない点である。基準に適合しないとしても、町長は指導及び

助言をおこなうばかりであって、それ以上の行政処分をおこなうことは明記されていない。助言に従わないものに対する勧告とその事実の公表が定められているだけで、罰則規定はないのである。

この景観条例は任意の条例であり、景観法にもとづいた委任条例ではない。景観法の制定が二〇〇四年六月なので、この直前に公布された平泉町の景観条例は、おそらくは世界遺産登録準備の日程の都合上、景観法の制定を待たずに公布する必要があったのだろう。たしかに、つい数年前までであれば、この景観条例はかなり手の込んだ部類に入るといえるが、景観法制定後の現時点から見ると、景観法のツール（手段）をまったく利用していないわけであるから、そうとう微温的な条例だと見られてもやむを得ないだろう。

この景観条例は善意の第三者に対しては効力を発揮するかも知れないが、商売に直接の影響があるような事業者に対してはそれほどの効果は期待できないと考えられる。さらに、これらのコントロールは現状変更がおこなわれる時点をとらえて

実施される仕組みになっているので、既存の不適格な状態を改善するつもりがない場合は、景観変更行為が発生しないので、この景観条例はまったく適用できないという問題がある。

なるべく早期に景観法に準拠した景観条例へと改正されることが望ましい。その際、できれば景観地区などの、より強制力の強い規制を導入することを模索すべきである。世界遺産を目指そうというのであるから、日本でも有数の厳しい規制を受け入れなければ、今後暫定リスト入りを目指すさらなる後輩の都市の人々に示しがつかないのではないだろうか。

少なくとも詳細な景観計画の中でさきの景観育成基準を位置づけ、望ましくない現状変更の計画に対しては、変更命令を出せるようにしておくことは必要である。

もうひとつ、現行の景観条例の限界を指摘すると、この条例は屋外広告物は適用外となっているという点である。たしかに景観法以前では県の屋

外広告物条例との仕切りは必要だったわけであるが、平泉町は景観法による景観行政団体にすでになつたのであるから、積極的に屋外広告物規制を取り込んだ制度を構築すべきである。

当面は県の屋外広告物条例を厳格に適用し、違法な掲出状況を早急に改善することが現実的だろう。新聞報道によると、県一関総合支局土木部の調べでは、県の屋外広告物条例に違反している広告物は世界遺産区域内において二三四件三五七個確認され、うち七十七件一一一個は是正されたが、一五七件二四六個は放置されたままで、このうち三十六件八十一個は県などの公共広告物という。このような状況は世界文化遺産を目指す地域としては、けっして許されないとわねばならない。

将来的には、平泉町屋外広告物条例といったものを導入することになる。これによって、県条例よりも踏み込んだかつ詳細な規制をおこなうこととすべきだろう。たとえば色彩の規制や自家用広告物の詳細にわたる規制は独自条例でなければ不可能である。また、世界遺産のコアゾーンから

半径500m以内の屋外広告物は原則禁止とし、
自家用広告物もたとえば面積 2m^2 までに限るとす
るなどの上乗せ規制も考慮すべきだろう。明らか
に維持管理の不十分な広告物も一定の告示期間を
経過したものは行政代執行により撤去すること
ができるようにすべきである。もしくは行政側が予
算を用意して撤去を進めることもあっても良いだ
ろう。

以上のような提案は、たしかにかなり高いハー
ドルである。通常では住民の方々はアレルギーを
おこしてしまうかもしれない。それがこの世界遺
産登録準備という千載一遇の機会だからこそ可能
となりえるのである。

平泉が極楽浄土を体現した都市計画のまちであ
るということをうたい文句にするのであれば、今
の時代においても平泉は浄土を感じさせるもので
なければならぬだろう。そのためにはこうした
コントロールが必要なのである。

〔平泉の文化遺産〕世界遺産登録推薦書作成委員、
東京大学大学院教授・工博



金の雪の光堂

金 森 敦 子

芭蕉が中尊寺を訪れたのは元禄二（一六八九）年。山内に建てられた金色堂は中尊寺創建当時から建物で、大治元（一一二四）年に建立されている。芭蕉が見たのは、建立されてから五六五年を経た建物であった。

建立当初は、仏像はもちろん、上下四面の内部はすべて金で飾られ、須弥壇や柱・長押は、外国産の夜光貝や象牙で七宝莊嚴の限りが尽くされていた。まさに金色堂と呼ぶにふさわしい偉容である。しかも驚くことに、この堂は自然の風雨にさらされて建てられていた。金を雨ざらしにするほど、この地は黄金を豊富に産出したのだ。この金色堂を芭蕉が敬愛した西行も見ている。文治二（一一八六）年のことで、西行六十七歳。

「寺塔四十余、禅坊三百余」といわれた中尊寺

はその後の野火により焼失。わずかに金色堂と経堂が残るだけになった。荒廃した地はすぐに掠奪の舞台になってしまふ。盗賊がやってきて金箔を剥ぎ、螺鈿部分を掻き取っていく。近くの村人もこっそり忍び込んで破片を持っていったようだ。しかし一番の大敵は自然の浸食だった。

雨ざらしになっていた金色堂に覆屋がかげられたのは正応元（一一八八）年という。藤原氏が亡ぼした鎌倉幕府の処置である。これによって建てられてから一六四年を経て、金色堂ははじめて風雨から逃れることができた。とはいっても、落剥を止めることができたわけではない。相変わらず不埒な輩がやってきては、残った金箔を掻き取っていく。金色堂は覆屋の中で荒廃していった。芭蕉が見たのは「七宝散りうせて、玉の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて」（『おくのほそ道』）いた金色堂だった。金色堂という実態はすでに過去のものになっている。時の流れはどんな美しいものでも無惨に変えていく。黄金も同じことであった。

中尊寺を訪れた日は、曾良の旅日記によれば、晴れ。陰暦五月十三日のことで、陽暦に直すと六月二十九日。昨日の大雨で、山内の初夏の木々は輝いていたことだろう。その緑したたる光の中を歩き、芭蕉は案内の別当が開けてくれた覆屋の扉を覗き込んだのだ。そのとき、堂内にはどれほどの光がさしこんだのだろうか。七宝で飾られた柱は「霜雪に朽ちて」いた。阿弥陀三尊と藤原三代の棺を納めた須弥壇の様子は記されていないが、推して知るべしである。そのほの暗さの中には五〇〇年の時が堆積していた。この長い時間をかいくぐってよくぞ残ったという感慨を、芭蕉は抱いたにちがいない。

決定稿以前の『おくのほそ道』を曾良が筆写したものとされる曾良本には、

五月雨や年々降るも五百たび
螢火の昼は消えつつ柱かな

の二句が記され、それが消されているという。建立されてからの五〇〇年間という時間を詠み、七宝荘蔽だった巻柱の夜光貝の青い輝きも螢火のよ

うに消えてしまったことを詠んだ句である。曾良の「俳諧書留」に見当たらないから、『おくのほそ道』の旅が終わってから作ったものらしい。しかし芭蕉はこの二句を『おくのほそ道』からはずしてしまった。

そして新たに作って加えたのが、

五月雨の降り残してや光堂

前の二句に比べると、この金色堂は現実を超越してしまっている。覆屋の存在がかき消され、金色堂は五月雨があがった空にむき出しになって、明るく輝いている。光堂、そうとしか言えない時空を超えた建物が芭蕉の眼に見えていたのだ。

当日は晴れていたが、前日は大雨だったことは前に書いた。だとすると、金色堂の周囲の木々の梢からは、太陽の光を反射した雫が絶え間なく落ちていたかもしれない。それは金色の光の粒に見えたかもしれない。その光をくぐって覆屋の扉を開けてもらったとき、芭蕉は金の雫の残像を通して、ほの暗い内部を覗いたのではなかったか。装飾を掻き取られた柱は再び七宝荘蔽を取り戻し、

ほの暗い中に浮き上がる内陣の仏像も、そしてその堂自体も、金色に輝いて見えたことだろう。

時間を遡さかのぼって反復しているうちに、詩人の頭の中にはこうした新しい金色堂が構築されたとしても不思議ではない。芭蕉はこんなふうにしてこの句を作ったのではなからうか。こんな想像をしてしまうのは、私が金色堂を訪れたのが雨あがりの日だったせいかもしれない。そのときに木々の葉からしたたる雫が、なんとまぶしく光っていたとか。

今、金色堂は新しい覆屋の中にある。拝観券を買おうとしていた観光客が、「金色だと聞いたけど、金色じゃないわね」と言っているのを耳にした。金色堂は木々の中に金色を放って建っていると思っっているのだ。この人を笑ってはいられない。私も覆屋があることを知っていたながら、どうしても雨ざらしになっている金色堂を思い浮かべてしまう。覆屋を消してしまった芭蕉の句のせいだ。『おくのほそ道』には、「四面新たに囲みて、葺いづかを覆いて風雨を凌しのぎ」とちゃんと書いてあるのに、

それを忘れてしまっている。こういった勘違いをしている人は意外に多いらしい。

金色堂を訪れた江戸時代の旅人も、様々のことを記している。

芭蕉より二〇年ほど前に中尊寺を訪れた旅人は、「昔の判官殿の御自害の刀、七寸五分のこんねんとう、また秀衡の脇指しは一尺八寸の平造り、身もくたり中少々こぼれたり。入道常に読経し給う法華経一部八巻、金軸なるが紙魚入り破れたり。また杖の石突きは印子いんすといへるが黒く見ゆ。さて弁慶の長刀は今の人の手業には思ひもよらぬ重きなり」と、様々な宝物を手にとって見せてもらっている（『海陸世話日記』）。

名古屋のある武士は「元禄十二年、奥州平和泉万法寺御造営につき、九月二日御館権太郎入道清衡の棺掘り出す」と日記に記していた（『鸚鵡籠中記』）。遠くにあっても金色堂は興味ある対象であったらしい。

芭蕉より八八年後に訪れた旅人は、「当寺へ旅人と号していろいろのあぶれ者来る」時代だった

が、中尊寺に泊めてもらって歓待されている（『奥州紀行』）。

一〇一年後に訪れた高山彦九郎は「中尊寺村案内者源藏所に乞ふて宿す」と、すでにガイドがいたらしいことを記し、金色堂の拝観料が十三文だったことも書いている（『北行日記』）。彦九郎より三十八年後になると、「三十九文、右御堂の開帳料」と記され、拝観料も三十九文になっていた（『筆満可勢』）。

一一八年後に訪れた画家の谷文晁は「瓦は木にて堅瓦木口丸し。今は白木の如し。元黒漆にて金色なりしが雨露に晒されて白木となりしよし也」と、昔は屋根にも金箔が貼られていたことを聞いている（『婦登古路日記』）。

金色堂を訪れた旅人によって、その時代の様子がかがわれるのだが、時空を超えて鮮烈に描き出したのは芭蕉一人だけだった。

（ノンフィクション作家）



画・金森一咳

「浄土」の風

——仏教語の理解と実感

佐々木邦世

平泉の「世界文化遺産」本登録に向け、昨年六月、イコモスの委員による下見があった。そして七月、文化庁文化審議会で、国からユネスコへ提出する正式申請書の標題が「平泉——浄土思想を基調とする文化的景観」と決定した。それ以来、当地方における講演やフォーラムでの発言、新聞の紙面にも「浄土」の文字が目につくようになった。「浄土って、亡くなった人が往生できるようにと拝むんだから、あの世の、極楽のことですよね」といったような会話も聞く。問い合わせも何度かあった。

そこで思ったのは、どうも日本人の癖だろうか、ことばの意味をあまり厳密に捉えていないで、浄土を語っている向きが多いということである。ことにも、「浄土思想」というと、概念が広くなって、だからなおのこと曖昧などころがある。

しかし、「浄土」の観念が通用していることが前提でなければ、世界に向けて発信もなにも、混乱をきたすだけになってしまうだろう。そしてすぐに、「世界遺産」になれば大勢の人が来て、といった経済効果の方に関心が移ってしまう。

そこで、一般のひとが「浄土」という観念を実感として、捉えられるようにと、先学の論考を踏まえながらも、ことばの辞書的な意味だけでなく、詩や俳句や新聞記事なども援用して、読者の感性に訴えるように述べてみたい。

行ったこともない「浄土」を実感などできるわけがない、そう言っても、思いめぐらすのを放棄してしまっただけでもない、始まらないだろう。「実感」とは、「実際に経験しているかのような生き生きとした感じ」（広辞苑）に捉え、汲むことができるかどうか、なのである。

□

浄土といえば、阿弥陀如来の「西方極楽浄土」と思っているひとが多い、というか、そう解するのが一般的である。そして即、宇治の平等院鳳凰堂とか平泉中尊寺の金色堂が

想起されるわけである。そうした堂は、たとえばあの藤原道長が建立した法成寺（京都上京区にあった通称御堂）の金堂は、『栄華物語』に「浄土はかくこそ、と見えたり」と書いているように、あたかもそこが浄土であるかのよう
に思われ、祈る空間を造形したわけである。

阿弥陀仏は、無量寿・無量光仏と訳される。金色堂が、「光堂」とも称され、内外四壁金箔で荘厳されているのは、まさにその無量光仏の御堂だからである。金箔だけではない。七宝莊嚴の巻き柱や須弥壇、柱の上の組物から長押まで、白く光る夜光貝の細工は浄土に咲く宝相華の文様をあらわしている。耽美と極楽浄土への憧れを具現した珠玉の遺構である。

ところが、浄土教の基調となる『無量寿経』や『観無量寿経』『阿弥陀経』のなかに「西方浄土」「阿弥陀浄土」などといった語は見えない。いや、『無量寿経』のなかにただ一カ所、あることはあるが、そこは「諸仏如来の浄土の行を敷衍したまえ」とあり、これは「土を浄める」、行を修するという意味である。もともと、原典の梵本（サンス

クリット語）やチベット訳の『阿弥陀経』にも「浄土」に相当する語はないらしい。鳩摩羅什（5C）より以前の訳経には、「浄土」という語は見当たらないから、どうも羅什が創作したものらしい。

ちなみに、「宗教」という日本語は、明治になってから、初代文部大臣の森有礼の造語であることは知られるとおりであり、また、「浄土庭園」ということばは今では多くの書物やパンフレットにも使われているが、これもせいぜい昭和十年代以降になってから使われだしたのだという。

誤解をおそれずにいえば、日本に入ってきた仏教語といわれるものには、この「浄土」のように、実は中国文化の伝統から創作、あるいは別な意味が添加され、通用してきたものが思いのほか多いのである。

さて、『阿弥陀経』には、西方十万億の仏土を過ぎた、無限の彼方に阿弥陀仏の世界があり、そこではなにも苦が無くして諸々の業を受けられるので「極楽」という。しかも、一切の諸仏に護念される、形ある世界として説かれている。

『観無量寿経』（略して『観経』）には、一見、矛盾する

ようだが、阿弥陀仏の住所は「ここを去ること遠からず」とある。そして「彼の国」をあきらかに観想すべきことが説かれている。

その、「彼の国」「極楽」を、中国で「安樂浄土」とか「清浄仏土」というように説かれてきたのである。

もとより、浄土はなにも阿弥陀仏の世界だけではない。

『華嚴経』には、観世音菩薩の住所を補陀落山ふたらくといつて、わが国でも、補陀落渡海、観音浄土へ船出する説話があり、『薬師経』には東方浄瑠璃世界が説かれ、『弥勒経』には弥勒菩薩の兜率浄土とさうがあるといったふうに、諸仏それぞれが浄土が説かれているわけである。

それでも、平安の昔からわが国で浄土といえ、まずは阿弥陀如来の西方極楽浄土、と理解されてきた。

それは、遠い彼方にある無苦常楽の土、死によって現世とは明確に区別される異なる世界である。「厭離穢土おんりそど」この娑婆世界にかかわる心を棄てて、「欣求浄土しんぐ」往いつて生れたいとひたすら願い憧れる来世の浄土である。

浄土より還りし人も踊りけり

渡邊 ひろし（『寒雷』11月号）

迎え火を焚いてあの世から祖霊を迎え供養する盂蘭盆うらんぼん会。この句は、盆踊りの輪に、ふと、亡きひとの面影を見た、夏の夜の心象である。

□

浄土にはまた、「浄仏国土」（仏国土を浄める）という意味がある。国土といっても、国土交通省の国土でない。

『維摩経』の第一章「仏国品」に、現代文に意識するとこんなふうに説かれている。

・ 仏国土を浄めるということは、どういうことですか。
衆生（命のあるもの）という国土、その衆生によって菩薩の仏土がある。衆生の、素直な心（直心）、発心とか、深く道を求める心（深心）、ひとの傷みを分かちあえる心（大悲心）というもの、それが浄土である。もし、仏国土を浄めようとするには、その心（自分の心）を浄くすることである、と。

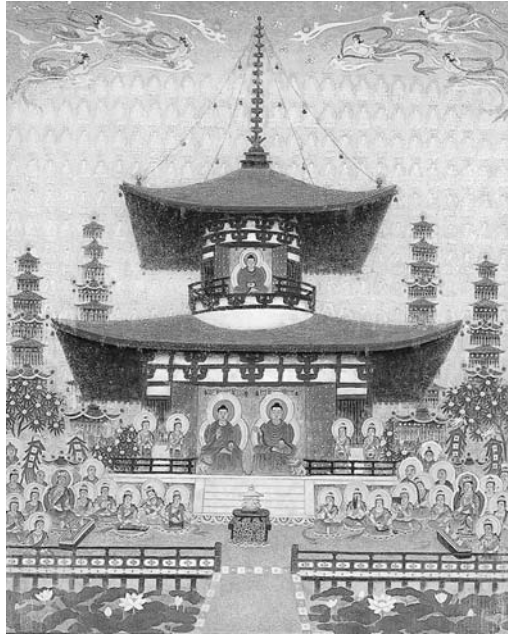
つまり、死後、あの世に行つてからの浄土ではなくて、



紺紙金銀字交書「維摩詰經」(支謙訳)

現世において成る浄土、現実世界の浄土化の意味である。そのために、常に努めている人を菩薩というわけである。浄土、浄仏国土とは、そこに生きている人間が済むこと、だれもがもっている仏性に気づき、自らこころを浄く保つ、そういうことなのである。

『法華経』の「如来寿命品」に説かれるのは、靈山浄土である。久遠実成の本仏・釈迦が永遠に法華経を説き続けている靈鷲山。そして「見宝塔品」では、宝塔が地中から湧き出てきて、その中から多宝仏が「釈尊の説くことはみな真実なり」と、大音声をあげて証明する。そうしてから、座を半分空けて、「釈迦牟尼仏よ、ここにお座りください」と言って、釈迦と多宝の二仏が並んで座についた。塔が、地より湧き出たということは、意味が深い。それは、いま自分たちが現に在る、生きている大地、現実世界の中から真の理想が生れることを示唆している。この人の世は、「娑婆」といわれる。汚辱と苦しみが絶えない忍土であるが、しかし、経にはその悩みの果てない現実に立つた仏国土が説かれる。



法華説相圖 入江正巳 画

実は、多宝仏と釈迦と二仏が並座した多宝塔が、中尊寺の中央にあったと、これは『吾妻鏡』の「寺塔以下の注文」に記してある。このことから、藤原清衡によって建立された中尊寺の堂塔造営が、『法華経』に関わっていたことがわかるわけで、そこであわせて考えられるのが、『中尊寺供養願文』のなかに「界内の仏土と謂つべし」と、清衡が敬白していることである。この界内とは、境界の内側とか

内地といった意味ではない。かつて、多田厚隆師から

この界内と言いますのは、三界の中の浄土という意味です。凡夫の、我々現実世界における仏国土です。

と講説していただいた。三界とは迷い苦しみの境域をいう。「三界に家なし」というのは、この境域が安住の地でないことをいうわけだが、そうした、苦悩の尽きることはない現実、自分たち凡夫そのままの仏国土である。娑婆の辺土即の浄土を実現したい、それが中尊寺建立を意図した清衡の素願であった。

娑婆において感得される浄土。此岸とか彼岸とか、善とか悪とか、東西といった相対の名辞を超えた、ただ今、そこに在る浄土。それは、生死を超えた、混じりつけない、眞実の世界であり、「常寂光土」とか「寂光浄土」といわれる究極の浄土である。

そのように深く思いを致して「浄土」という観念を英語に訳すと、パラダイス（楽園）でも、ユートピア（理想郷）でもない。ピュア・ランド（眞実の世界）である。

かつて女優・岡田嘉子がサハリン国境を越えて、演出家

と共にソ連に亡命したけれども、ここで見たものはなんてあつたらうか。「ユートピアというものはなかった」と、先月、新聞で読んだ探索者の結論である。

そう、現実にはないから理想郷なのである。

□

では、真実の世界、究極の浄土がどこにあるというのか。釈迦仏は、この娑婆の一切処において法を説くと教え、「その仏の住所をば常寂光土と名付く」というのであるから、今みなさんがいる其処そこも浄土、ということになる。

三年ほど前から、「千の風になって」という詩が書店に出て（作者不明／日本語詩 新井満／講談社）、多くの人に読まれ、感動を与えている。

千の風になって

私のお墓の前で 泣かないでください

そこに私はいません 眠ってなんかいません

千の風に 千の風になって

あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ

冬はダイヤのように きらめく雪になる

朝は鳥になって あなたを目覚めさせる

夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください

そこに私はいません 死んでなんかいません

千の風に (略)

「いつ、どこで生れたのかわからない、風のような詩」
（天声人語）である。本の帯に「死者からのメッセージ」とあるけれども、そう解釈をつけてもらわなくていい。

この詩が生れたとき、だれかわからないが、むしろ作者は生きていたわけで、自分があの世に逝ってから、こちらに遺してきた親しい人にそう言いたいだろうという気持ちになって、「死んでなんかいません」っていつているのだから。

「俳句は、彼岸と此岸の淵を自在に行き来できる小舟で



あるともいえる」(渡辺誠一郎)。むろん、それは詩についても同じことである。

千の風が吹きわたっているこの世が、浄土になる。そう見えるように心を浄くたもつ、それが浄土だと――。

雪浄土雀も仏なりしかな

照井 翠 『俳句研究』11月号

この句は、加藤楸邨の「笹鳴や浄土追はれし磨崖仏」の句を平泉の俳枕として紹介し、それを承けて掲げている。これにつづけて、「浄土に身を置き、ほろびゆくものへの思いを深めたい」という。本人が意識しているかどうかは知らないが、今いる、現前に浄土を見ているわけである。こうなると、すばらしい。

そして、磯貝碧蹄館のつぎの一句を読んでそのままうけとめ、実感していただきたいと思う。

あるがままある妙観の木の葉雨

『同誌』12月号

(中尊寺仏教文化研究所長)

教育と仏教

——人間学の視点から

多 田 孝 文

近ごろ日本のすがた

現代の日本人は、二十世紀初頭の文明開化につき戦後の急速な物質至上主義・合理主義の追求に加えて、偏った自由・平等などの流れの中に浸り続けてきた。たしかに、ここ六十有余年の日本の発展は、世界の人々がおどろくほど目覚しいものである。しかし、豊かさや引き換えに、個人主義的・享楽主義的な風潮になびき、よき日本の伝統も失われ、家庭の絆も地域社会の連帯感も希薄なものとなってしまったのである。日本人は、向かうべき目標を失い、日本のこころや文化を放棄してきたのも事実である。

いま、日本の社会に蔓延しているモラルの低下

をはじめ、諸事件・諸問題には、耳目を覆いたくなるようなことばかりである。家庭と親子関係、さらに、教育の現場では学級崩壊・授業不成立など、そしていじめによる自殺と、より深刻な事態は枚挙にいとまがないほどである。いま人々は、えも言われぬ不安とこころの寂しさをひしひしと感じている。

このような深刻な事態になると、あわてて、先ず、国が政治が、官僚が教師が親が問題であると罪人探しをはじめまる。次に法や制度や組織の改編をぶちあげて、その場を繕うのがいつもの傾向である。近時また、御多分にもれずそのような風潮であるが、私には、まったく危機感と心意気が感じられないのである。

最近の事件、問題のすべてに共通しているのは、人間一人一人の自己中心的な言動から生じているということである。さらに、事後の責任ある立場の識者の言動も同様であるのには、あきれるばかりである。

日本人は、いつから社会に対して無責任で義務

を果たさなくなったのであろうか。戦後数十年、日本人のこのころの教育を怠った結果であらうか。

振り返って思い起こされることがある。十数年前、米国人がある雑誌の中で次のように記していた。戦後直ちに日本人の不可思議な精神力や力量を削ぐために種々検討したそうである。その一つには、日本の教育の場から宗教的教育、すなわち、日本の精神文化の教育を禁止しておいたことについてである。しかし、忍耐力と勤勉さで邁進する状況を見て、まだ効果が表われな**い**と思っていたが、「ようやく利きだした。これからは、我々の思うようになる」と。

日本の教育の場では、宗教だけではない、日本の歴史も文化もそして、日本の財産ともいうべき「このころ」も扱わなくなっていたのである。この教育制度は、外国から作爲的に仕向けられたことが発端であるが、世界のどの国や地域を見ても考えられないものである。確かに教育基本法（第15

条）は「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育、その他の宗教的活動をしてはならない」と規定している。

しかし、これは特定の宗教の宣伝や布教、または活動をしてはならないということであって、宗教に関する寛容の態度、教えに関する教養は、これを尊重されなければならないとも制定されているのである。宗教は、現実の生活の中で大きな力を持つものであり、大きな比重を占めているものである。

これらのことにすみやかに気付き対応しなければならなかったのであるが、対処が遅れ、「このころの教育」が提起されはじめた時には、すでに、国際化とかグローバル化などの波が押しよせてきた時であった。

日本人が、日本人としての歴史も文化もこのころも体得していれば、他文化とのより有意義な国際化やグローバル化も有り得るであろう。しかし、日本人としての持ちものないままであるならば、それはただ他文化に染まるだけのことになっ

てしまう。

皮肉にもそのような意味では、戦後の米国の日本に対する政策は成功したといえるだろう。

いま遅ればせながら、私たち一人一人が、日本のすばらしい精神文化の伝統を再生するための努力をする時である。

教育の再生

教育の現場にあっても、経済や合理主義を優先する煽りを受けて、学生たちに知識の詰め込みと受験のためのテクニックを修得させることが急であつた。

たとえ広く学問をし、どれだけ物を知ったとしても、自分を知らなければ、ものを知ったことにはならない。自分をまったく知らない人は、その愚かな自分の心を根本として、他人を誹謗し、自分の気に入った人だけと親しみ、自分に従わない人を憎み、腹を立て、自分で自分を苦しめて心を悩ますのである。単に自分の心得違いからくるものである。(禪者・鈴木正三、一五七九～一六五五)

現状の人間性や主体性の欠如、モラルの乱れ、学力低下の原因といったものは、複雑であって一概に言うことは難しいが、その一つは、精神文化の教育をおろそかにしてきたことが大きくかかわっている、といって過言ではないであろう。

いままた、教育の再生がさわがれている。制度の改革だけに終わらないで、日本の四季と共に育んできた日本人特有の勤勉でやさしく、繊細でまじめな心呼びさますよう、一人一人に行きわたる教育と環境づくりをめざしてほしいものである。

「それ道は孤り運ばず これを弘むるは人による」
(天台大師・智顛五三八～五九七。人の徳性を導き出し、育て社会に貢献できる人材を送り出すこと。

「道心ある人を国の宝となす」(最澄七六七～八二二)
自己の徳性を発揮しながら、社会のために貢献できるものは、かならずや国の宝となる。私はそう確信している。

教育の目的とは何か

教育基本法には、「豊かな人間性と創造性を備

えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」とある。その第一条、教育の目的に「教育は人格の完成を目指し、心身とともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」とある。教育の目的は、日本人としての誇るべき「人格の完成」にある。

このことは、仏教のめざす目的と同様である。

仏教は、一人一人が正しい人生観を得るため「人格の完成」に導くことにある。広い意味での人間学である。仏教は、約二千五百年も前から、この総合的人間学の教導の道を歩んできたのである。

そして、釈迦が生涯をかけて、我々に教えようとした内容を象徴するのが次の一文である。

「天上天下唯我独尊」(天にも地にも我一人である。)

この真意は、一人一人の存在は、この社会にとって他とは比べようがないほど重要であり、その尊い生命の内にある聖なる徳性を育み活動すべきである、ということにほかならない。

互いに照らし合って、ともに活動している自分、

すべてのもののために輝いている真の自分のあり方を自覚したいものである。自分の徳性を生かした、素直でやわらかい心の輝きが、この社会には是非とも必要なのである。

人間とは何か

「人間とは考える輩である」(パスカル一六三三〜一六六三)といわれる。よく考えることに努めよう、それが道徳の本源である。そしてまた、「人間は羽根がなく、二本の足の生きものである」(ラッソン B. C. 四二七〜三四七)という。一步一步確実に進むべきことを述べている。

仏教では、「一人の人は人間にあらず」といい、人と人との間で人間になる。あらゆる存在とともに、生き、生かされていることを自覚することを教えている。ただし、人生は、意の如くにはならない。現実と思いたいところとは違い、苦と楽はいつも共にやってくる。(源信九四二〜一〇一七)

私たちは、いつも自分を中心にして大事に生きよう、思い通りになりたいと思ひ込んでいる。そ

の度にいきなり、愚痴り、欲のこころを起こして悩み苦しむのである。思い通りにならない現実を認めたととき、他を知り自分を知り、真の自分の成すべき道が開けてくる、そう教えている。

その際に忘れてはならないことがある。

「恵みは全てのものに平等にゆきわたっていて、人々は、それを毎日使って生きているのに、そのことに気付くことがない」(智顯)

眼には見えないが、常に自分の回りにあるものが、私たちを照らし、一層輝きを増すように仕向けているのである。

「世間の人に交わらず、おのれが家ばかりにいて成長した人は、心のままにふるまい、おのれが心を先にして、人目を知らず、人の心をかねざる人、かならず悪しきなり」(道元二〇〇〇〜二五三)

高ぶらず、謙虚であわてずに、ゆっくりおそれずに自在な活動にでるべきである。

仏教の世界観

仏教では、世界を羅網らもうにたとえている。羅網と

は、網の結び目ごとに色とりどりの宝珠ほうじゆが連なっている。その大羅網がこの世界を覆っているといふのである。青黄赤白黒などの色々の宝珠とは、私たちのこころである。網とは縁である。宝珠はたがいに他を照らし合い、妙たえなる光明世界を展開している。ただし、その内の一珠でも輝くことを怠ると、網の全体にその影響が伝わる。そこには支配者があるわけではない。互いにこだわらず平等の縁によって結ばれ照らし、照らされている光明の世界なのである。

どこか一つが自己中心的になると全体にひびく。一つは全体を照らし、全体は一つを輝かせている。このたとえは、私たちに平等の縁による調和の世界を提唱しているのである。

仏教ではよくこのあり方を蘇東坡そとうはの作とされる詩の一節をもって説くことがある。

「柳は緑 花は紅」という一節である。

花の紅が添えられているからこそ柳の緑が一層美しく、柳の緑が添えられているからこそ、花の紅も本来の美を一層美しくしている。すべてのも

のが、調和の上にあることをこの詩に見なければならぬ。

敬いの心

最近学校では、食事の時に手を合わせ「いただきます」をするのを拒否するPTAがいるという噂を聞いて驚いた。私たちは、人間だけではない、あらゆる存在に照らされて生かされているわけである。給食をいただけるのは、自然の恵み、耕作者の汗、調理者の苦心などすべての心運びのおかげである。これを忘れて、手を合わせるのは宗教的行為だからといった親の偏見から、児童、生徒の大事な感性まで奪ってしまうのは暴挙とていえない。敬いの心を忘れた未来を担う若者は、家族や社会に対して責任ある行動がとれるであろうか、実に心配である。

敬いの心は、一人一人の内にある聖なるものを開発し育てるための、教育の場になくってはならない重要な精神文化の要素なのである。

隣の文化を認める ものの見方

教育基本法 教育の目標3には、

「正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」とある。

運動会でも物議をかもしているという。運動会の徒競走で順位を決めるのは、差別であるというのである。自己中心的な視点からものを見ると、全てのものが、ともに生きていることをわすれがちになる。この視点から差別感を固定してとらえてしまつては、人間社会は成り立たない。

世界自然遺産の森林を観察していただきたい。そこには、大樹、小樹、大草、中草、小草があり、恵みの雨が平等に注がれて、それぞれ生き生きとして、私たち人間の生命のための大切な環境を創っている。差別観固定の視点から見れば、大樹は誇らしげに見える。小草は、陰の存在のように見えるであろう。しかし、あの森林は、大樹だけでは、生きしえないのである。雨水を蓄えるのは小

樹や小草であるからである。小樹や小草は、大樹によって蔽しい自然の猛威から守られているのである。そこになんのこだわりもなく相互の関係を認めあって、互いに違いながら、平等の縁の位置にあり、大自然が成り立っているのである。

現実の違いに目をつむってしまったって、平等、平等と主張することを悪平等という。また、平等であることを見ずして、差別観を強調してとらえてしまうことを悪差別というのである。(最澄)

一一の存在は、違いながら、その場面を担っている重要なものであることを認める心を育てたいものである。

「己を忘れて 他を利する」(最澄)ことに喜びを感じて生きてほしいものである。

喜びの心を育てる教育

教育基本法には、「個人の能力に応じた」とか「自主性を尊重する」とか述べられている。現実の受験重視のなかでは、置き去り、切捨てが生まれ、それがいじめや学級崩壊の一因になっている

といわれるものである。

仏教の經典における教導には、必ず一句一文に四つの課程が組み込まれて成立しているとされている。(智題)これは仏教の教育法である。

一つは、相手を教育するときには、相手にあった言葉でわかりやすく事項を説き教えることである。世間的な常識、道徳、倫理といったものである。わかりやすければ興味がわき、理解できれば喜びもわく。

二つは、人それぞれの性格、素質、理解力などによって指導する方法である。人それぞれの徳性にあつた行動に出ることができるようになる。

三つは、人の心には、もともと善悪はないのであって、善悪は、とりまく状況によって起こってくるものである。条件によって自分とこだわる時、いかり、貪り、愚痴のところが動き出す。自分の心の内の動きに耐え忍ぶことを、相手に応じた適切な方法で教える。時には厳しく、時には優しくである。

四つは、教えの目的、目標である人格の完成のための智慧と慈悲について説くことである。前の三つの教導は、この智慧と慈悲に裏付けられたものである。

教導の場にあるものは、常に相手の心の求める思い、行動のとり方、善悪の心の用い方を知って、相手に応じて教え、興味と喜びを起こさせることが重要である。また、教導は、教える側の心を無理に押し付けて人を変えてはならない。人を変えずして相手の自在な徳性を生かすように心掛けたものである。

徳性を生かす

仏教では、すべての人間やその他の全ての存在に、それぞれ特徴や徳性を内に秘めていると説く。それを「仏性」として重んじているのである。この内に秘めている聖なるものを、導き出し開発して全うさせ、永遠の生命に生きることが、仏教の人間学の真髄である。

家庭の教育

最近ヘリコプター・ペアレントという現象が話題になってきている。常にヘリコプターのように子供の近くを周回していて、何か有事の気配が察知されると、さっと子供を守るというのである。親が子供に密着して、進む方向、考え方、学び方などすべてに決定権を持つことだそうである。これでは、子供たちの自主性、主体性が欠如するのも無理からぬことであろう。

また、子供を大事に育てることと、放任することを取り違えている親もいるようである。もし、大事にされるならば子供が社会で貢献するために、人格の完成に向けて常識や躰を厳しく教えることである。子供の自主性を重んじながらも、失敗や成功の度に笑ったり、怒ったり、叱ったり、話し合ったり、表面は異なっても、親の心がつねに慈悲に定まっているように願いたい、そう思うこと頻りである。

(大正大学教授)

中尊寺貫首 晋山・退山式

〈記録〉

晋山式次第

平成十八年十月七日
午前十一時より 於 中尊寺本堂

退山式次第

- 先入 堂 下座入口上座
- 次 開式の辞 会行事役之
- 次 退任辞令伝達 天台座主猊下代理
- 次 任命辞令伝達 三千院御門主小堀光詮探題大僧正猊下
- 次 導師登礼盤 天台座主猊下代理
- 次 三礼如來唄 三千院御門主小堀光詮探題大僧正猊下
- 次 表 白 千田貫首登壇
- 次 開 經 偈 導師発音
- 次 誦 經 世尊偈 導師発音
- 次 本尊真言 ヲンアミリタテイゼイカラウン
- 次 後 唄 畢磬六下
- 次 導師降礼盤

- 先 導師登礼盤 山田新貫首登壇
- 次 鳴 磬 二下
- 次 始 段 唄 唄師跌座発音
- 次 散 華 散華師起立発音
- 次 略 對 揚
- 次 表 白 導師発音
- 次 開 經 偈 導師発音
- 次 誦 經 般若心経 導師発音
- 次 本尊真言 ヲンアミリタテイゼイカラウン
- 次 宗祖大師宝号 南無宗祖根本伝教大師
- 次 開山大師宝号 南無開山慈覚大師
- 次 一字金輪真言 ボロン
- 次 総 回 向 畢磬六下
- 次 導師降礼盤
- 次 退 堂

以上

差定

導師 中尊寺貫首

中尊寺新貫首

大僧正 千田孝信
僧正 山田俊和

唄 匿地藏院

權大僧正 佐々木秀圓

円乘院

僧正 佐々木邦世

興福寺

僧正 嶽内真弘

西光寺

權僧正 太田義明

散華

大乘院

權僧正 藤里明久

賢聖院

權僧正 四竈亮澄

篁峯寺

大僧都 佐々木了章

千手院

大僧都 矢沢亮康

達谷西光寺

大僧都 達谷窟敬祐

黒石寺

權大僧都 藤波洋香

金剛院

權大僧都 破石澄元

永泉寺

權大僧都 中臣亮啓

報恩寺

僧都 小林裕道

会行事 觀音院

承仕

僧都

清水

廣元

自性院

中律師

千葉亮信

法泉寺

權少僧都

鎌田宏毅

觀音寺

少僧都

千葉亮賢

妙法山歆喜院

少僧都

高橋瑞海

律秀厚 秀紹

中尊寺退山式 法則

抑も 法灯伝承の庭 相伝法衆の砌 法味を養受し
功德を証明せんが為に上天下界の神祇冥道
必ず來臨降下し給うらん

然れば則ち 梵天帝釈 四大天王

別しては 円宗擁護 日吉大権 赤山明神

当所鎮護の白山権現等 併ら 威權自在にして
仏事を顕揚せんが為に 一切神分に

般若心經 丁

大般若經名 丁

謹み敬って 大恩教主釈迦牟尼世尊 十二上願

薬師如来 本尊界会弥陀種覚 超八醍醐一乘妙典

八万十二権実聖教 観音勢至 普賢文殊等 諸賢聖衆

総じては 尽空法界 一切三宝に 白して言く

正に今

南浮日域 陸奥国 関山中尊寺本堂 此の道場に
於いて 法灯相伝の法筵を展べ 恭しく 本尊界会

満山諸尊の尊聴を乞い奉ることあり

其旨趣如何となれば夫れ

仏性開發の大願は 宗祖大師 法灯不滅の遺訓にして

淨仏国土の大業は 開山大師 東北巡錫の行願なり

是を以て

浅学薄徳の身を顧みず 仏子孝信

忝なくも 天台座主猊下の鴻命を拜し

素志の存するところは 只管

宗祖伝教大師 法華一乗の円教を紹隆し

開山慈覚大願 円密双修の宗風を伝承し 以て

藤原四衡公 歴代作善の浄行を顕彰せんとするに在り

幸いなる哉

仏天の加護 深厚なるを賜り

一山大衆 苦楽を共にして 大和一致

古実伝来の法儀 転た懈怠なく

諸仏摩頂の場 関山の法灯 揺らぐことなし

然りと雖も

籠山十二年の春秋 忽ち移いぬ

誓願 限りなくとも 有漏 限りあり

法命 限りなけれども 身命 限りあり

伝灯相伝の機縁 正に熟したり

是の故に

恭しく 本尊界会の宝前に 有縁の真俗を請じ

法灯伝承の典儀を刷い 報恩謝徳の筵を展ぶ

正に今

宝前に読誦し奉る 普門品 渾身の一巻

至心敬礼 合掌低頭して 法界中尊の円座を降る

満山諸尊

悉知洞鑑し給え

東北大本山

中尊寺中興第二十七世貫首

大僧正 孝信 敬白

中尊寺晋山式 表白

抑も 伝灯相承の庭は 晋山奉告法楽の砌 善根を随喜し
勝業を證明せんが為に

上天下界の神祇冥道必ず来臨影向し給うらん

然れば即ち 梵天帝釈 四大天王

総じては 日本国中三千余座の大小の神祇

別しては 円宗守護 日吉大権 赤山明神

殊には 當山守護白山権現等 各々法楽莊嚴威光倍增の

奉為に 一切神分に

般若心經 丁

大般若經名 丁

謹み敬つて 當山本尊阿弥陀如来 大恩教主釈迦牟尼如来

浄瑠璃世界薬師如来をはじめとする十方一切諸善逝

大小権実一切聖教 観音勢至等の諸大菩薩 舍利弗目蓮

等の諸賢聖衆 乃至尽空法界の一切の三宝に白して言く

方に今

南閻浮提日本国 陸奥国平泉 関山中尊寺本尊 宝前に於

いて 台門の淨侶を屈請し 宗門内外の諸大徳 當山檀信徒はじめ關係各位の臨席を忝し 伝灯相承の式典を嚴修す爰に第二十七世大僧正より 小納俊和 當山第二十八世の法灯を継紹し奉り 晋山奉告を行い大誓願を發して 仏恩報謝の淨業を修せしめ給うこと有り

その旨趣如何となれば夫れ

當山は嘉祥三年 慈覚大師に依つて開創せられ 長治二年より文治五年に至るおよそ百年間には 藤原氏四代により 堂塔伽藍を整え榮華を極む 藤原氏は篤く三宝に帰依して 平泉に淨仏国土建設を發願し 天下に冠たる仏都を築く 金色堂 諸仏ご尊像 中尊寺経等 栄枯盛衰有りと雖も 尚今日に伝承され 豊かに万民を潤す 時恰も天台宗門は 開宗一千二百年の嘉辰を迎え 総授戒運動を展開し 一隅を照らす運動を推進して宗祖の法華一乘の精神を弘め

鴻恩に報いんとす
重ねて中尊寺に於いては

平泉——淨土思想を基調とする文化的景観として世界遺産推薦の中心にありて 愈々万民豊樂の大願を成就せんとす

然りと雖も

国内外は混迷し耐え難き苦しみ多し 我等今こそ時空を超えて宗祖の教えを弘め 開山の祖意顕揚を計りて 人類の幸福と世界の平和に寄与せんとす

それいれば

小納俊和

六道の中に得難き人身を受け 淨縁を以つて 出家得度し 三宝の導きを賜りて天台の法門を修学す 未だこの身 至らずと言えども 諸々の法助を賜りて 歴代先徳の室に入り 法灯護持に一心を捧げんとす 秋色深まり草木盛んに華実を結び 関山に新しき種子が植りて盛榮を宿す

伏して願くば

参詣の諸人は関山淨境に入りて菩提心を發し 安穩を得られんことを

満山の諸仏諸菩薩 歴代先徳 志願を悉知し

仏道を成就せしめ給え

三宝證明し 諸天照覽し給え

維時平成十八年十月吉祥日

関山中尊寺 第二十八世 俊和 敬白

御来賓抄録（順不同、敬称略）

大正大学学生部長 木母寺

龍泉寺

波母山 繁信
源田 俊昭

天台座主 猊下代理 三千院御門主

小堀 光詮

延曆寺一山 泰門庵

堀澤 祖門

妙法院御門主

菅原 信海

大聖院

多田 孝文

日光山輪王寺御門主

菅原 栄光

延曆寺一山 勝華寺

小森 秀恵

輪王寺御門主

神田 秀順

常住寺

蘭 實丞

比叡山延曆寺執行

清原 恵光

本壽院

氏家 榮脩

岩手県知事

増田 寛也

中国大使館公使参事官

趙 宝智

毛越寺貫主

南洞 頼教

夫人（中国大使館一等書記官）

張 学智

天台宗総務部長

谷 晃昭

大正大学理事・日中友好宗教者懇話会会長

小野塚幾澄・亭

天台宗議会議長 櫻本院

小暮 道樹

日中友好宗教者懇話会理事長

持田日勇・耀子

天台宗議會新成会長 城興寺

福武 安文

日中友好宗教者懇話会常任理事

吉田文莞・智恵子

立石寺 貫主

清原 浄田

陸奥教区宗議會議員 東雲寺

増田 寶泉

東京教区宗務所長 大泉寺

杜 多道雄

山形教区宗議會議員 寶光院

山田 亮清

東京教区宗議會議員 法蔵院

杜 多徳雄

最勝寺法類 西光寺

工藤 秀和

福島教区宗議會議員 金禮寺

林 光俊

最勝寺法類 泉養寺

京戸慈孝・富栄

寛永寺執事長 現龍院

浦井 正明

最勝寺組寺 成就寺

海老原廣伸・敬子

天台宗ハワイ別院

荒 了寛

最勝寺法類 東漸寺副任職

板倉 慈慎

莊厳寺

宇南山 照信

最勝寺法類 東漸寺副任職

寺田 真浄

立正佼正会釜石教会長
 立正佼正会花巻教会長
 立正佼正会奥羽教会長
 命徳寺副住職
 栃木教区宗務所長代行 大聖寺
 山形教区宗務所長 立石寺副住職
 毛越寺執事長 大乘院
 龍玉寺
 見性寺
 東松寺
 天祐寺
 観音寺
 最勝寺
 唯心院
 華蔵院
 光樹院
 医王院
 實教院
 護光院

河野公利
 綾部高士
 大島宏之
 多田孝元
 小堀貞聖
 清原正田
 藤里明久
 本間真滉
 渡辺弘文
 千田康道
 山口道雄・満子
 千田孝明
 山田俊尚
 福井文雅
 関口和宏
 柴田立史
 菅原照光
 鈴木常元
 宮田謙光

浄土院
 日増院
 照尊院
 禅智院
 龍蔵寺
 興雲律院
 月蔵寺
 圓光寺
 清滝寺
 明静寺
 龍蔵寺
 大通寺
 観音寺
 薬王院
 白王院
 興福寺
 満福寺
 観福寺
 篁峯寺

今井昌英
 中里卓雄
 菅原道信
 貴船慈浩
 若水昌人
 中川光熹
 斎藤宏明
 雑賀重行
 関純裕
 栗原和人
 植木徳念
 藤沢克悦
 鮎貝真清
 千葉秀海
 千葉真弘
 嶽内真弘
 志羅山慈順
 千葉亮光
 多門堯真
 佐々木了章

西光寺	太田 義明	最勝寺親類	山田 璋英・孝子
千手院	矢 沢 亮康	平泉町教育委員長	南 館 廣太郎
観音寺	千 葉 亮賢	喜多流職分	佐々木 宗 生
報恩寺	小 林 裕道	前貫首友人	青 木 茂・操
永泉寺	中 臣 亮啓	前貫首主治医	松 岡 昭 治
賢聖院	四 竈 亮澄	共立医院長	小 野 寺 弘 之
法泉寺	鎌 田 宏毅	平泉文化会議所理事長	鈴 木 男
黒石寺	藤 波 洋香	喜桜会会長	岩 淵 勝次郎
自性院	千 葉 亮信	三秋会施設長	富 田 幸 男
妙法山歓喜院副住職	高 橋 瑞海	平泉町議會議員	山 田 順 作
達谷西光寺	達谷窟 敬 祐	最勝寺檀家総代	松尾誠哲・弘美
観音寺親類	町沢慎一・照子	最勝寺檀家総代	久 田 和 子
観音寺檀徒総代	小 西 喜雄	最勝寺檀家	曾我部 京 子
観音寺檀徒総代	吉 田 豊	最勝寺檀家	鈴木春朝・淳子
観音寺檀徒総代	安 西 武	最勝寺檀家	西春貞男・晶子
観音寺檀徒総代	斎 藤 清一郎	最勝寺檀家	大澤雄治・邦枝
観音寺檀徒総代	森 敏 一	最勝寺檀家	中村吾郎・レイコ
實光院寺庭婦人	天 納 喜美子	最勝寺檀家	中村之栄・節子
最勝寺親類	中島健二・久美子	最勝寺檀家	藤原孝雄・千恵子

最勝寺檀家

鶴川一彦・君江

一関信用金庫平泉支店代理

小野寺 宏

平泉町長

高橋 一男

一関信用金庫平泉支店次長

佐藤 正彦

岩手県議会議員

佐藤 正春

岩手県南広域振興局一関総合支局長

松川 求

岩手県議会議員

佐々木 一榮

一関市消防本部消防長

佐藤 志行

一関信用金庫理事長

八重樫 次男

平泉郷土館館長

大矢 邦宣

岩手県南広域振興局長

酒井 俊巳

東日本旅客鉄道(株)仙台支社営業部長

太田 稔

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所長

下田 五郎

東日本旅客鉄道(株)仙台支社

佐藤 孝

岩手県商工労働観光部観光経済交流課総括課長

橋本 良隆

白山神社宮司

関宮 千代丸

平泉町議会議長

千葉 勝男

平泉町助役

千葉 茂

(株)平泉観光協会会長

小野寺 邦夫

平泉町議会議員

佐藤 孝悟

平泉町教育委員会教育長

佐藤 敏雄

(株)コイワチケン 取締役社長

関口 一雄

岩手南農業協同組合会長理事

鈴木 哲郎

一関西消防署平泉分署長

千葉 利英

岩手南農業協同組合専務理事

今野 忠夫

平泉消防団副団長

岩 洵 照美

一関信用金庫平泉支店長

石川 淳

酒田三十六人衆代表

鑑谷 誠一

岩手銀行平泉支店長

高橋 弘成

JTB東北一関支店長

佐藤 純

平泉郵便局長

皆川 章二郎

花巻温泉(株)代表取締役社長

今井 洋一

東北銀行平泉支店長

菊池 京子

(株)いつくし園 代表取締役社長

菅原 清彦

岩手南農業協同組合平泉支店長

岩淵 章

(株)斎藤松月堂 代表取締役社長

齋藤 哲子

北日本銀行一関支店次長

久保田 康則

(株)三衡設計舎 代表取締役

勝部 民男

両磐酒造(株)代表取締役社長

松岡俊太郎

川嶋印刷(株)代表取締役社長

菊地慶矩

世嬉の一酒造(株)代表取締役社長

佐藤眺信

(株)精茶百年本舗 代表取締役

清水恒輝

(株)岩手日日新聞社代表取締役社長

山岸学

みちのくコカ・コーラボトリング(株)取締役社長

谷村邦久

平泉町長・高橋一男氏はじめ平泉町、平泉商工会、

中尊寺門前会の皆様方、岩手県内報道各社代表各位

参列

中尊寺一山住職・後任、寺庭婦人

檀徒総代・世話人一同

*当日は荒天の中、御遠方より大勢の方に御臨席た

まわりまして誠に有難うございました。

厚く御礼を申し上げます。

執事長 菅野澄順

〔座談会〕

松岡 昭治（元岩手県立中央病院副院長）

藤波 洋香（黒石寺住職）

菅原 光中（中尊寺参務）

司会・菅野澄円（事務局総務部次長）

「ころとことば」

〈前貫首の逸話あれこれ〉

司会 松岡先生と藤波さんはたぶん初対面だと思

うので、ご紹介します。松岡先生は盛岡の県立中央病院の副院長をなさった方で、健康管理の面で貫首さんの主治医のような存在としてお世話になっておりました。プライベートな面でもお話がいただけるかと――。

松岡 前執事長の佐々木邦世さんに、「先生、貫首の主治医としてひとつよろしく頼みます」と言われまして、重責で、その当時は大変緊張しました。

藤波 千田貫首さんのお人柄なら、お迎えした当時の執事長・光中さんが一人語りしてもいいようなものですけどね。

菅原 私がしゃべることをみな活字にすると、何かとまずいんですよね。（笑）

司会 藤波さんは、貫首さんとは……。

藤波 なぜでしょうね。どこか気があったとか、可愛かってもらったというか。（笑）

松岡 私は直接こうして藤波さんとはお話しするのは初めてですが、実は、しょっちゅうお目にかかっています。作曲家の船村徹さんを迎えたときなど、何か中尊寺で催しがあるとお目にかかっています。長年の知己きみたいな気がしております。

藤波 ありがとうございます。

司会 それでは、平成五年の晋山のことから……。

菅原 中尊寺貫首にご就任していただきたく、お願いに日光の観音寺さんに中尊寺から三名で伺いまして、ようやく五月に仮入山となったわけですから、一山との懇親会のときに、冒頭で貫首が「なぜ私

が中尊寺に呼ばれたのか全く思い当たる節がない」とおっしゃった。私は「仏縁でございます」と申し上げたら「あ、そうか」とわかったような、わからないような表情をされていらした。後で、お聞きしたら、貫首の御尊父は現在の奥州市江刺のご出身で、ご自身は小学校一年生で日光の観音寺に弟子入りされた。貫首就任をお願いに伺った平成五年は、御尊父のちょうど五十回忌だったんですね。そういう縁で呼ばれたんだな、と。我々はそのようなことは全くわからなかったから。そのように、自問自答されて納得して、川を上る魚、鮭みたいな、俺も一匹の鮭だったんだな、と。それで中尊寺に来ることになったんです。そこからドラマが始まっていくわけですよ。でもサケは魚の鮭かな。(笑い)

松岡先生とは二年か三年経ってからですか。金盃披きでしたね。

松岡 貫首さんの呑みっぷりが豪快でしたね。皆さんに見本を示していた。私はとても貫首さんの真似はできませんでした。

菅原 中尊寺に来られるに先立って、向う(中尊寺)の人は皆酒が強いから気をつけろ、と日光の皆さんに言われていたらしいです。それで覚悟してきて、なるほど、聞きしに勝る酒豪揃いだ、と言いながら、我々よりも貫首のほうが強かったですよ。

松岡 強いですよ。三ツ重ねの一番大きな盃(三合五勺入る)をイッキに飲み干されましたからね。

藤波 体に悪いですよ。(笑い)

菅原 それでも、酒を飲むのではなくて、いつも、人と付き合うコミュニケーションなんですよ。

藤波 楽しいお酒でした。

松岡 説教じみたことも言わないしね。医師会などいろいろな団体がありますが、私が平泉に通っているので「貫首に講演をお願いしてくれないか」と頼まれました、岩手県立病院医学会や、全国の自治体病院の総会も盛岡であって、貫首さんに講演を依頼に伺ったことがあります。快く引き受けてくれました。その度に私は会場で貫首さんのお話を聞く機会がございました。

最初は仏教の話でございまして、人には二本の



手があるが、一本は自分のために使うけれども、もう一本は他人のために使うのだといったお話。

それから全国自治体病院協議会のときは小林一茶を取り上げ、あれも大変感銘深いお話でした。

小林一茶というのは大変不幸な方だったんですね。それで、かんで含めるように言いますから説得力があるんですね。話し方がすばらしいですね。話術じゃない。千田貫首は高校の教諭もおやりになつていたそうですが、あくいう先生に教えられたら、私ももっといい医者になつていた、と思います。間の取り方といい、実に印象に残るような、あの話はすばらしい。もっと早く、二十〜三十年

前に知り合つたらよかつたな、と私はいつも思っています。

それで、一茶の「露の世は露の世ながらさりながら」という俳句がありますね。たぶんあのお話をお聞きになつた人は皆あの俳句を覚えていていると思います。一茶が、子供が亡くなつたときにこの句をつくつたそうですが、それが今では葬式のと

きの喪主の挨拶などになりに引用されています。今の心境はこういう心境だと。私もその後、小林一茶の本を買って読んだりしましたが、貫首さんの話に勝るような文はなかつたですね。大変感銘深いお話でしたね。今でも心に残っています。

菅原 貫首はそういうところをうまく伝えますよね。

松岡 この句は本に書けばたつた一行なんだ。それを印象に残るようにお話をする。

そして、いつも「先生をやっていると、できない子のほうがかわいいんだよ」って、おっしゃいます。

藤波 そうでしたね。いつも教育者でしたね貫首

さんって。人をけなすことがないですね。常に褒めて、褒めて引き上げるような。

松岡 保護司もなさっていたんですね。

とにかくできない子がかわいい、そして情が深い。できる子はほったらかしていてもいい、と。

菅原 ちょっと遡るのだけれども、ご晋山なさって、それで歩いて歩いて京都のほうの総本山や大寺を回って歩いたんですね。そのときに山田恵諦お座主様のところに伺ったんです。ちょうど「炎立つ」という大河ドラマをやっていたときにぶつかったんです。炎という字は火を二つ重ねて書きますが、NHK会長の海老沢さんに頼まれてテレビのタイトルを書いたんですね。ところが山田座主は「お経の中に火が二つ重なっている字なんかないんだ」というわけです。火が二つの字を書くのになんと苦労したそうです。何枚も書き直して書いたと。そして「千田さん、今度は寒い中尊寺に行つて大変でしょう。この火二つだけども、体に気を付けてご任務を果たしてくれるように」と。話を私は側で聞いていたんですね。そしたら

貫首が「いや、中尊寺はまだ大したことないです。うちの日光のほうももっと寒いです」と。確かに日光のほうが寒いんです。でも、それは寒さのことではなくて、「東北の中尊寺の人は心が温かい」と、そう言われたんです。よくぞ言ってくれたと思いますでしたね。そういう思いやりね。

藤波 とても、お優しいかった。

松岡 単身赴任で中尊寺にいらっしゃるといのは、お年を召されるとやはり大変だったのではないかと思います。

藤波 それは大変ですよ。私はいつも思うのですが、中尊寺に貫首になってお出でになる方は、先が多田厚隆貫首もそうでしたけれども、使命感みたいなものがあるのではないのでしょうか。単身赴任は大変だけれども、それが自分の使命だというのがあって、清衡公が浄仏国土の建設をしようとしたその寺の貫首として来ているんだ、というものがどの貫首にも感じられますね。男の方が年をとってから一人で、全然知らない人の中で暮らすというのは大変だと思いますよ。

松岡 そうでしよう。何年か前から「いやあ、十年過ぎたらぼつぼつ」と千田貫首さん言っていました。

藤波 十年は勤めないと山に迷惑がかかる、とおっしゃっていましたね。

松岡 私は主治医をと言われていたけれども、私の専門は限られていますから、中央病院やら磐井病院、藤沢町民病院、中央クリニックのそれぞれのエキスパートの医師にご助力を頂きました。私は総元締め役をさせてもらって、血圧のチェックなど看護師を派遣して、診させて頂きました。**藤波** 元気でお帰りになってよかったですね。たよ。余力を残して、元気でお帰りになったのは本当によかったですね。

菅原 確かに中尊寺に入ると使命感というのほもちろんおありで、ずっとそれで通したんですよ。けれども、いろいろな方からいろいろな機会にお誘いがあったようで、それを嫌だということを一言も言わずに喜んで、皆と付き合うことが大好きで、それが何よりでしたね。千田貫首から言えば、

人とお付き合いするのがいいんだけど、付き合っている人も貫首さんと付き合っているのが何となく快くて、女性にも優しいしね。(笑)

藤波 やはり年の取り方が上手でしたよね。なかなかあのようになを取れないですよ。

松岡 お年は八十を過ぎていますが、考え方が若いですよ。カラオケなんか、めったに歌われないうすけれども、琵琶湖周航の歌とか、京都大学の青春時代の歌とか旧制高等学校の寮歌とか、ああいうのがお好きなようでしたね。若い頃、自転車で北海道まで行ったことがあるという話をちらちらと聞きました。そういう青年時代を過ごされたんだな、と思つてね。体格もいいですね。軍隊にも終戦間近にちよつと入隊したらいいですね。

菅原 学徒出陣ですね。今おっしゃった琵琶湖周航の歌は確かに歌うんだけど、お帰りになる頃、「俺はそれよりもっと好きな歌があるんだ」と「椰子の実」という歌を歌われました。

藤波 私が一番感動したというか、影響を受けたのは、貫首十年目に書かれた『花咲けみちのく

地に実れ^{みの}』でしたか。あの本を読んで人生観がかわるくらいの影響を受けました。



仏の二大条件は智慧と慈悲なのですが、私は、かたよりのない曇りのない智慧というのが仏教の特徴だと思ってきました。キリスト教は愛の宗教で仏教は智慧の宗教だという風に思い込んでいたんですね。ところが、貫首はあの中で「智慧と慈悲のどちらをとるか、といたら迷うことなく慈悲を取る」とおっしゃっていました。あれで仏教観がひっくり返りました。さらに「慈と悲の中でどっちを取るかと思ったら、共に悲しむ悲を取る」と。そういう生き方をしてきたのだろうか――、

と。思っています。あれは衝撃でしたね。

菅原 単に歴史とか文化ではなくて、平泉の心みたいなのをどんどん吸収していくんです。

藤波 供養願文に込められた願いが貫首の手にかかる……。

菅原 慈悲の悲から始まるのだと。

とにかく貫首がいらした平成五年から十三年間にいろいろなことがありましたから。それをずっと年表にしてみると次から次です。柳之御所はあるし、蓮の花は開くしね。山は慈覚大師の開山一五〇年祭。西暦の八五〇年に中尊寺が開山したでしょ。あの辺りへの貫首の思い入れがすごかったですね。要するに栃木県だから。円仁という人に貫首は思い入れがあったんですね。

藤波 そうでした。円仁さんの話になると熱を帯びて。

松岡 私ね、貫首さんに「天台というのは、大学で言えば東大みたいなものなんだそうですね」と言いましたら、そのとき貫首さん、あまりおもしろい顔をしないんですね。なんとなく嫌な顔を

するんです。そうしたら、何日か経ってから貫首さんが「私は東大は大嫌いなんですよ」って。笑
り「私は東大でないところに入りたかったんですよ」と。それでわざわざ京大に行ったんだそうです。旧制の浦和高校ですから、東大にもほとんど入れたわけでしょうが、役人の教育みたいなことをやっているから嫌だったと。

藤波 やはり在野の反骨精神があっただけですね。

松岡 それで、京都に西田幾多郎先生がいたところですよ。あこがれますよね。いつか、「私は西洋から仏教を見たいんだ」というようなことを直接ご本人から聞いたことがあります。確かに東大的じゃなかったですね。全然、官僚的じゃなかった。東大出はどうしても論破するというか、自己主張が激しくて、なんとしても自分を通すという感じですけど、貫首は——。

松岡 我々も死を迎えた患者さんを診ていると、いろいろなことに悩むわけですよ。最近では告知が常識ということになって、慣れていきますけれども、ただ、私は今でも、会って何日も経たないうちに

「あなたの命は何ヶ月しかないですよ」と言うのは行き過ぎじゃないかなと思います。医者と患者の心が通じ合って、そこで初めてそういうことが言えるのではないかと思っているんです。病院に来て、血液検査とか画像診断で、すぐ「あなたはこうだ」と言うものではないかと。要するに、心が通い合いながらタイミングを吟味して告知すべきではないかなと、今でも思っています。

藤波 そうかもかもしれませんね。

松岡 若い先生だと、すぐにばっばと様子も見ないですぐにしゃべるのですが、それが当たり前だと思っっていますけれども、それはやはりうまくないな、という気はします。

藤波 言った後のサポートをしなければならぬ。
松岡 心のケアをしなければならぬから大変なんですよね。そういうことで貫首さんに何か示唆をいただきたいと思ったら、おわかりになっただけでしようけれども、「いやあ、坊主はね、みんな解決した後ですから、精神的には楽なもんですよ」なんて冗談よく言われて、本当はもっと根据

り葉掘り聞きたかったんです。まあ、これからお会いする機会があるから、お聞きしたいと思っています。

医療関係者は貫首さんのお話を聞きたいんですよ。だから、ずいぶん貫首さんは講演で病院をお歩きになったと思いますよ。

菅原 「最後は私のほうに來なさい」みたいなジョークを言うものだからね。(笑)

藤波 駄洒落がね。マリリン・モンローと同じ誕生日は常套句でしたね。「ローマは一日にして成らず」ならぬ「ローバ(老婆)は一日にして成らず」とかね。

松岡 貫首さんは最初にそういうことをおっしゃって皆の心を和ませてから本題に入っていくんですね。

菅原 私も、それを真似してやったら、しらけてしまった。(笑)

藤波 そう、だめなんですよ。同じネタを使っても必ずうけるとは限らないですよね。ですから、我々にも『三分法話集』とか『五分法話集』とか

があるのですが、あれはあまり使い物にならないんですよ。しゃべる人によって全く違ってくるし、心がこもらないからだめなんですよね。貫首の真似をしてもだめですよ。貫首には長い間生きてきた人間の役得じゃなくて、徳みたいなものがありました。

菅原 寂聴さんもないし、千田孝信さんもないから、今度は藤波さんにかんばってもらわないと。

松岡 医者や医学界はそういうものを渴望しているんですよ。やはり患者さんと接するのは心が大変なんです。私なんかの頃は医の倫理なんていう講座はなかったですから。

藤波 今でこそ、例えば患者の話聞く方法みたいなものがあるんですか。

松岡 テレビもそういうものはよく取り上げるでしょ。今日も、お母さんが受精卵を預かったという話で政治討論会をやっていましたね。

藤波 孫を産んだという。

松岡 大変な時代ですよ。

藤波 考えられないですね。なぜそこまでして、と思えますよね。育ててしまえば皆いなくなるし、育てる苦勞もあるし。医学が発達すればするほど宗教の分野がかかわることが多くなりますよ。それこそケアの部分もそうですし、倫理の部分もそうですよ。そこまでして子供を産むのか、そこまですて産まなければいけないのか。欲と倫理のせめぎ合いみたいなものがありますよね。

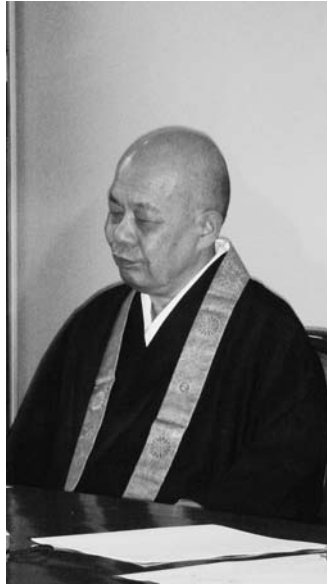
松岡 医師という職業だと、仏教界の方々とか、あるいはどんな宗教でもいいんですが、そういうお話を聞くことは大変ためになると思っています。そういう問題とは別でも、とにかく人間の老い方とか、死に方とか、そういうものをお話いただかないとなかなかね。私はもう高齢になって、病氣してあとが死が残っているだけですから、だいぶ諦観といいますか、覚悟はできていると思いますが。

菅原 貫首に書いていただいた立派な墓石をご準備なされて、もう、いつでも旅立つ準備はできているんですね。

藤波 誰がですか。松岡先生ですか（笑）

松岡 私はあまり何々家の墓とか、そんなのはありきたりでおもしろくないと。心に残るものが欲しいと。いっそのこと貫首さんにお願ひして、「貫首さん、お任せしますから、いい字を書いてください」ってお願いしたら、一回も催促申し上げたことはございませんでしたが、二年ぐらい経って、「書き初めの日があつて書いてみたんだけど」という話で伺いましたら、優しいの「優」に、さんずいへんの、遊ぶの「游」を「優游」と横に書いて頂いたんです。それは良寛の漢詩の中に二回や三回出てくるんです。大らかに生きるとか、そういう意味らしいんです。それで、「だいたい毛越寺の墓地に入るのに、私も憚りあるから千田孝信という署名だけは勘弁してくれよ」と言われたんですよ。中尊寺の貫首さんに書いてもらったもんだからね。毛越寺の執事長さんなんかは「よかったね」と喜んでくれていますけれども、そういうことで大変光栄の至りだと思えますし、これはこのように生きる、という貫首さんの教えだと

私は理解して、大らかに生きるようにと、この字を見るたびに思います。あと、この原本は掛け軸にしています。それで、いつでも行く所ができました。



菅原 世界遺産の話が出たのは平成九年です。金色堂が国宝指定になって一〇〇年ということ、そのころからぼちぼち、世界遺産の話が出てきました。こちらがあまり積極的にどうのこうののではなく、周りがどんどん盛り上がってきたんです。是か非でも世界遺産ということではなくて、皆さんがそう盛り上がってくれば、清衡公も嬉しいことだと。

松岡 一般の人は、正直言って世界遺産というのは巨大な建物などがたくさんあるとか、そういうものが文化遺産だと思っているわけですよ。しかし、建物はなくなってしまうと、清衡や秀衡がこういう理念でやったんだ、ということが大変大きな遺産だと、貫首さんはいつもそうおっしゃいますね。

菅原 心の問題だ、とね。

司会 藤波さん、印象に残るエピソードを……。

藤波 この前、仙台の菅原英空（光禪寺住職）さんと貫首にお別れのご挨拶に行ったときのことですが、英空さんというのは私と同じ年代の仙台の尼僧さんで、私と違って生臭ではなくて、きちっとしたまじめな方なんです。彼女は普通の家から仙台のお寺にお嫁さんに入った人なんです。それで、義理のお父さんの住職さんが亡くなってから、息子ではなくてお嫁さんの英空さんが後を継いだという不思議なお人なんですけどね。その英空さんが昔貫首にお会いしたときに、貫首が英空さんに

なんと言ったかという、「あなたがお義父さんとっ自慢のお嫁さんなんですわね」と言ったというんですよ。貫首さんは全然覚えていなかったんですけれども、英空さんはそれを聞いて、義父は私を面と向かって褒めたことは一度もなかった、どっちかと言えば非常に厳しい義父で怒られてばかりいたんだけれども、貫首のあの一言が今日の自分の支えになった、というようなことをおっしゃったんですよ。あれが貫首の真髄というか、さりげなく常に無意識にそうやって人を育てていくというか。このようにして貫首は周りの人を感化して真っ直ぐ歩むように勇気付けてきたんじゃないかと、あのときつくづく痛感しました。

菅原 貫首が、「私は中尊寺にだけ迎えられたのではなかった。平泉の町の人から、『平泉の貫首だ』と言われたことが私の勲章だ」と言っています。そうすると、平泉の人たちは喜ぶわけですよ。そのへんがなかなかできないことです。

藤波 気配りですよ。誰もが心を惹き付けられましたよ。

松岡 私も本当に千田貫首との出会いに感謝しております。



司会 貫首は「清衡公の願い」や「清衡公の思い」

について、多くの場でお話されていますが。

菅原 清衡公は最後に恩讐しゅうというか恨みを乗り越えたんですよ。どうやって乗り越えたのか、その過程を藤波さんだったらどう思うか。

藤波 ああ、私はだめですね。乗り越えられませぬね。恨みを残して死にますね。(笑い)恨みつらみを抱えながら、表面的には穏やかな死を装おうと思っけていますけれども。まして清衡公みたいな不幸な青春時代を過ごしたら、私はとても乗り越えられないです。

菅原 ただ、貫首もきれいに乗り越えたとは思っけていないですね。やはり人間だからなかなかそこまでいかないと思うのだけれども。

藤波 その前の段階の、「人間の数だけ不本意な死がある」という辺りがぐっときますね。大抵の人間はそういう重い思いを残して、恨みつらみ、こんなはずではなかった、なぜ私だけが、というようなものを残して不本意な死を迎えるのでしょうけれども、最後の締め括くりのときにそれを乗り

越えられるというのは何なのでしょうね。やはり平和に対する思いというか……。

菅原 よほど強いものがないとね。

藤波 殺しあいたくないとか、平和な世界を、という思いでしようね。自分自身の心の内へ内へともるのではなく、外に向かってそういうのを築きたいという熱烈な思いでしようね。それが勝ったということじゃないでしょうか。大抵は内へ内へともっていくのだと思います。

菅原 その辺はもう一度貫首に来てもらって説明してもらいたいという気があるんだけどね。今、世界がこういう状況だから尚更ね。家庭だって乗り越えられない。

藤波 そうですよ。足元の問題だって乗り越えられないのに世界平和なんて。(笑い)意外とそうなんですよね。世界の平和は祈念するけれども、家庭の平和はなかなか築くことができませぬね。

松岡 年を取るとまた違いますよ。お互いに家族が歩み寄ってきますよ。私は病氣きずなしてから家族の絆きずながかなり深まったような気がしますね。

藤波 それはやはりいいご家族だったんですよ。そこからバラバラになることもあるし。

最近思うのですが、高齢者の介護ですが、それまでずっと割りとうまくいっていた関係だと、最後までうまく介護ができるような気がするんですけど、途中で、いじめられたとか、ひどい目に遭ったとか、私だけ阻害された、という感覚があつて相手を介護するとなつたら、これはやっぱり最後の恨みはなかなか乗り越えられないものがあるよ。うな気がするんですね。

松岡 私も『花咲け みちのくに地に実れ』、あれは大変感銘しました。私は何十冊か皆に配りましたよ。感銘して「これ読め」って。

藤波 私も大好きでしたね。内容的にはかなり難解なところもありましたけれど読みましたね。

松岡 最初は和尚さんが書いたものは面倒くさいだろうと思って読まなかったようですが、でも、読んだ方は感激してくれました。私も、それは最初から最後まで読みました。

藤波 あの厚さだと大体最後までたどり着かない

んだけれども、読みましたね。

司会 貫首さんには、また平泉に来ていただいて、いろいろと親しくご教授も受けたいとみなさん願っていると思います。

菅原 お二方も、私もそうだけれども、これで時間が経てば経つほど心が遠くなると困るから、適宜、お体が許すときに遊びに来て、お酒を飲んでください。(笑)

松岡 貫首さんは律儀な方で、新しい貫首さんがお見えになつたら、あまり出たり入ったりはご遠慮したい、というようなことを私はお聞きしました。でも、決して平泉は忘れないということも聞きました。そういうけじめはちゃんとつけられる方ですね。後輩に、世界遺産の花束をあげるんだ、とおっしゃっていました。

菅原 まあ、順調に進むように今やっていますけれども、その暁にはお呼びびたいですね。

司会 お三方には長時間にわたり、誠にありがとうございました。

ネットワークいわて

—わが心の中の千田前貫首—

橋 本 良 隆

千田孝信中尊寺貫首が退任され、後任として東京都江戸川区の最勝寺の山田俊和住職が就任し、十月七日に晋山式、との報道を七月十八日付けの「岩手日報」で知った。

私は、七月十六日から十九日まで、岩手県への観光客誘致促進のため、台湾の航空会社や旅行エージェントを訪問していたため、一日遅れでその情報を知ることとなった。現在私は、岩手県商工労働観光部観光経済交流課に勤務しており、観光客誘致が主要な任務のひとつとなっている。昨年、岩手県を訪れた外国人観光客数は約八万九千九百人回（延べ人数）であり、実にその約六割は台湾からの観光客が占めている。岩手県として台湾から

の観光客誘致活動に力を入れるゆえんである。

その日、帰宅したとたん家内から真っ先にその新聞記事を見せられたが、にわかには信じられない気持ちであった。驚きというよりも「なぜ」というのが率直なところであり、出張疲れも忘れて何度もその記事を食い入るように読み返した。

思えば、私と平泉町、そして中尊寺とは思いがけないことからお付き合いさせていただくこととなった。平成十年六月、当時、私は岩手県企画振興部情報科学課に勤務していた。全く晴天の霹靂であったが、平泉町議会において町助役として県から派遣されることが承認され、七月一日から平泉町にお世話になることとなった。私は、県北沿岸の漁村普代村の出身であり、県南のしかも歴史文化の誉れ高い平泉町に赴任することになろうとは今もってどういう因縁があつてのことだったのか不思議でならない。

助役就任の挨拶に中尊寺にお伺いし、はじめて千田貫首にお会いしたとき、柔和な眼差しと優しさに溢れた語り口に、ただただ畏敬の念を抱いた

ことが思い出される。と同時に、この町にお世話になることの重みを千田貫首を通じて実感したものである。

さすがに歴史文化の町だけあって、中尊寺や毛越寺を中心に様々な行事が目白押しであった。七月以降を振り返ってみると、平泉水かけ神輿、薪能、平泉大文字まつり、大施餓鬼会・放生会、秋の藤原まつり、中尊寺菊まつり、金盃披き、大節分会、春の藤原まつり等々の年間の諸行事を通じて千田貫首とは何度となくお会いする機会をいただいた。そして、お酒をともしながら千田貫首より、人としての生き方を教わったような気がしている。お酒に酔うと同時に、それ以上に千田貫首に対して正に心酔していった。そういうご厚誼をいただいたことは、ありがたいことだったと、今でも感謝をしている。

この間、平成十二年十一月に「平泉の文化遺産」が世界文化遺産暫定リストに登録されることが内定した。内定に至る経緯の中では、県教育委員会や文化庁の方々のご尽力に負うところが大きかつ

たが、地元平泉町、中尊寺、毛越寺の関係者のご理解とご協力無くしては困難であったことは忘れてはならない。

そんな得がたいご縁をいただいた平泉町と中尊寺ではあるが、平成十三年三月をもって県に復帰することとなり、私の第二の故郷となった平泉町ともお別れをすることになった。

県では、平成十三年四月から商工労働観光部企業立地推進課に勤務することになった。今にして思えば、平成十一年に平泉町の瀬原工業団地に、愛知県岡崎市に本社があるフタバ産業株式会社に立地を決定していただいたことと少なからぬ因縁を感じさせる人事異動だったように思う。

企業立地推進課の主要事業の一つに「企業ネットワークいわて」というものがある。東京、大阪、名古屋において、岩手県の企業立地環境について知事を先頭にプレゼンテーションを行う。とともに、著名な方を講師にお迎えして基調講演をお願いし、岩手ファンになっていただき、ゆくゆくは

岩手に工場を建設し操業を促すのが主旨で、現在も継続的に実施している事業である。

平成十三年の名古屋における「企業ネットワークいわて」の講師をどなたにお願いしようかと課内で検討することになった。私は、これまでの大学教授を中心とする講師よりも、自動車産業が集積する名古屋だからこそ、岩手の持つオリジナルでしかも精神性の高いお話をしていただける方が、望ましいのではないかと考えた。そして頭に浮かんだ千田貫首こそ、最もふさわしいと直感的に思った。むろん、それが上司に支持されるどうかは率直に言って自信は無かった。

それがどうだろう、一致して千田貫首に是非お願いたいということになったのである。当時、すでに企業の海外シフトが顕著になっており、企業誘致環境は非常に厳しい時期であった。

早速、中尊寺に電話で内々検討をお願いしたところ、前向きに検討してくださいとのこと、九月中旬に中尊寺に伺って、十二月に名古屋で開催する計画案をご説明申し上げ、快く承諾をいただ

いた。これで名古屋での「企業ネットワークいわて」は成功する、そう確信したのはいうまでもない。

当時の、私のメモによれば、一ノ関駅で千田貫首とやまびこ4号で合流し、東京駅発ひかり121号に乗り換え、名古屋に十二時五十六分に到着した。この間ずっと新幹線で色々なお話を聞きしながら話は尽きなかった。途中で駅弁をともにいただきながらの道中は、今では懐かしい思い出となっている。車中とはいえ、こんなに身近で二人きりの時間を共にできたことは、その後一層親しくしていただく切っ掛けとなった。

中日パレスで開催された「企業ネットワークいわて」では、「希望と勇気を生む天地へいわて」と題して、千田貫首がやや抑制的に物静かに語り始めた。

清衡公のめざしたものの、五三〇〇巻の写経の発願、最高級を目指して最高の価値を創り出そうという情熱、これを実現するための最高級の努力こ

そが清衡公の生きざまであると、話が次第に熱を帯びてきた頃には、名古屋を中心とする東海地区の企業の社長さん方が一同に水を打ったように静謐な空気になっていくのを実感した。

そして「サン・ライズ・アゲイン。苦しい暗い夜の後には、明るい朝が必ず訪れる。どうぞ岩手に向かって手を挙げ、乗り遅れないように、お誘い申し上げます。清衡公に代わって『希望と勇気を生む天地いわて』を高らかに訴えて、話を終わります。」と結ばれた。しばらく拍手が鳴り止まなかったことを覚えている。

その後のパーティーにもご出席をいただき、東海地区の企業の幹部の方々と親しく懇談をしていただいたのが昨日のことのように思い出される。あれから五年、岩手県は自動車産業集積が着実に高まって、基幹産業として岩手の産業の牽引役となつていることを思うと、千田貫首のご講演のお力も確かにあった、と私は思っている。

こうした、平泉や中尊寺とのご縁に感謝の気持ち

ちを持って今も仕事をしている。特に、平成二十年に予定されている「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」の世界遺産登録が本格化している今日、地元平泉町を始めとする関係市町はもとより、これを観光面においてどのように全果的に波及させるかが、当面の課題となっている。

そんな折、今朝（平成十八年十二月十六日）の「岩手日報」朝刊によれば、

文化庁は十五日、世界遺産登録を目指す「平泉の文化遺産」の推薦書を外務省に提出した。外務省は十九日に、国連教育科学文化機関（ユネスコ）世界遺産センターへ発送する。（中略）来年秋ごろに国際記念物遺跡会議（イコモス）による現地調査を経て、二〇〇八年六月ごろに世界遺産委員会で可否が審査される。登録されれば島根県の石見銀山遺跡に続き、国内一五ヶ所目の世界遺産になる。

と報じていた。

折しも、同じ日の同紙「人」の欄には中尊寺の新貫首山田俊和僧正が紹介されていた。山田貫首

とは、十月七日に行われた晋山式・退山式そして中尊寺菊まつり表彰式においてお会いしている。重責を担われることになり大変な時期の就任であると思われるが、明るく淡々として気さくに声をかけていただき、さすがに中尊寺貫首をお務めになられる方は何か違うものを持ち合わせておられる、と感心した次第である。

あの晋山・退山式が行われた十月七日は、前日から発達した低気圧の影響で暴風と記録的な大雨の天候となった。午前十一時、全国から集まった天台宗の僧侶や総代ら来賓約三〇〇人が見守る中、千田前貫首の退山式と山田新貫首の晋山式は始まった。天台座主の任命辞令と、仏法の伝承の証「如意」が手渡される。厳粛な雰囲気の中、単に貫首の交代の儀式というよりも伝統や精神の継承という意味合いを強く感じた。このようにして連綿と多くの方々によって中尊寺が守られてきたことを目の当たりにし、千田前貫首は「籠山十二年」を全うされ、私はひたすら感謝の念を抱かざるを得なかった。

その退任式の中であって、私は九月二十三日に中尊寺本堂で行われた千田貫首退任前最後の法話を思い出していた。あの日は家内と二人で参加したが、貫首さんのお話は相変わらずユーモア溢れる中にも、一段と強いメッセージを発しておられるように感じた。「空高く 地に低く」と題するお話で、いつにも増して心に染み入るものがあった。「寄る時ねぐら はずこ一途に 鳥渡る」との句を披露されたが、深い想いが込められた句であり、私なりに解釈しながら、これからの私自身の心の指針にさせていただきたいと思った。

中尊寺貫首晋山・退山式を終え、一関ベリノホテルでの披露宴もお披露となる頃には、強かった風雨も止み、青空も少し顔を出していた。盛岡に向かう新幹線の中で、参列者に配られた色紙を開けてみた。退山された千田前貫首は「感謝」と、晋山された山田新貫首は「和顔愛語」と揮毫されていた。お二方のお気持ちを表現するにふさわしい文字がそこにしっかりと刻まれていた。

（岩手県商工労働観光部観光経済交流課総括課長）

声明と護摩 そしてニューヨーク

菅野康純

平成十八年十月二十日夜八時、ニューヨークの教会に中尊寺貫首山田俊和僧正の祈りと声明の聲が静かに響きました。

山田貫首は、「天台宗海外伝道事業団」主催の「天台宗開宗一二〇〇年慶讃天台宗ニューヨーク別院本堂落慶一周年記念法要&ニューヨーク平和祈願法要」に、昨年十月十九日〜二十五日迄の日程で出仕された。

随行として同行させていただいた私の覚書の抜粋である。

十月十九日(木) 晴

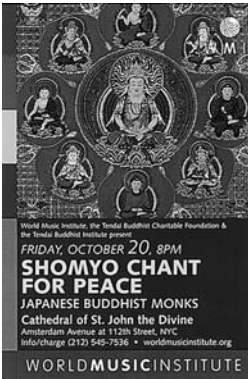
十時 成田空港に集合。

団長として天台宗海外伝道事業団副会長 菅原信海京都妙法院門主、天台宗を代表して総本山延暦寺特使 小森秀恵大僧正、天台宗海外伝道事業団副理事長 山田俊和中尊寺貫首、そのほか全国からこの事業に進んで参加され二十四名の方々と、総勢二十七名。

日本からのメンバーの初顔合わせとなり、事業団事務局の蘭実丞師・菅原門主・山田貫首から御挨拶をいただく。

出発 日本航空JAL006便。

十二時 (日本時間) ニューヨークまでの所要時間十二時間三十分。



声明公演ポスター



聖ヨハネ大聖堂正面



十一時三十分 ニューヨークJFK空港到着。

(現地時間) 専用バスで翌二十日声明公演を行う聖ヨハネ大聖堂の下見に出発。

十二時四十分 聖ヨハネ大聖堂に到着。

同大聖堂(セント・ジョン・ディバイン大聖堂)は、セントラルパーク北に位置。天井の高さ五十メートル世界最大のゴシック様式建造物。これまで宗教宗派を越えて数多くの行事が行われ、一九八二年五月三十日には比叡山の故葉上照澄大僧正が世界平和の法話を行った。大きな、まさに大きな礼拝堂に山田貫首共々、感動と驚嘆を感じながら下見。舞台の様子を確認。

十四時二十分 国連本部見学。

十八時三十分 フロントに集合 徒歩で結団式会場のシェリーズNYに移動。

十九時 ニューヨーク別院の住職 聞真・ポール・ネイモン師、奥様の珠聞師

等、ニューヨーク別院のメンバーも参加し、結団式及び自己紹介。

——十月二十日(金) 雨

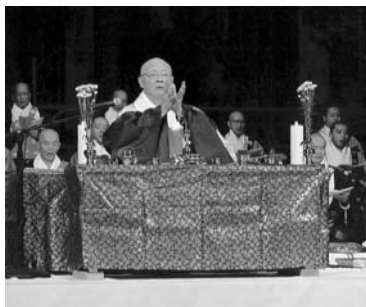
十三時三十分 聖ヨハネ大聖堂到着 舞台設置、準備、リハーサル。

十九時 最終打合せ。

まるで公演に合わせたように雨も止み、聴衆の人々が集まって来る。

二十時 平和祈願声明公演。

「天台声明ニューヨーク平和祈願法要公演」と題して、「大法百光明供」を大導師に山田中尊寺貫首、他二十二名の出仕にて修す。公演に先立ち、ニューヨーク別院の聞真住職が英語で声明の解説を行



修法中の貫首



い、杉谷義純事業団理事長による「天台声明ニューヨーク平和祈願法要公演開催メッセージ ―天台声明と世界平和―」は、九・一一同時多発テロから丸五年を迎えるこの地で、仏教の愛と慈悲そして祈りによる平和を祈願する旨のメッセージが読み上げられた。

聴衆は五百名を越し、六百席用意された席もほぼ満席。公演時間の約一時間三十分間は観客と僧侶の一体感となった祈りが感じられた。

公演が終わって出仕者同士の挨拶の際、大導師の大役を勤められた山田貫首は感極まり、喜びの涙を滲ませた様子で

「ありがとう（出仕者を含めたスタッフ）皆さんと私、そしてこの場が集まった聴衆の人々と共に、私の中を通して心底から世界平和・愛と慈悲の祈りを捧げることが実感できた。ここまで感じられたことは私にとって至福のことです。ありがとうございますございました。」（要約）

と喜びと感激のお言葉を頂戴しました。

後日、共同通信社経由でこの公演の様子は日本の各地方新聞でも報じられた。

また、インターネットにも同様の記事が掲載され、ニューヨークの日系新聞では左記のように取り上げられた。

〔週刊NY生活二〇〇六年十月二八日号〕

声明 ハーレムから世界へ響く

ニューヨーク・ハーレムの教会、聖ヨハネ大聖堂で、仏教の儀式



記念写真

音楽である声明の公演が十月二十日に行われた。最澄が比叡山に天台宗を開宗して一二〇〇年。それを記念し平和の祈りを音楽に託して、日本在住の僧侶二十人によって演奏された。三〇〇〇曲以上ある曲の中から、今回は七曲が演じられた。

中尊寺の僧侶である山田俊和さんは「九・一一で亡くなった人の菩提を弔い、平和のために歌いました。人種や宗教を越えて、魂の音楽は世界中で受け入れられます」と話す。

神秘的な音楽が静かに、時に力強く石作りの教会内に響き渡った。ニューヨークもその静粛さに打たれ、聴き入っていた。

観客の一人マブセーワさんは「癒されました。目を閉じて聞いていたら、深遠な魂を感じた。シンブルな美がここにありました」と話した。魂の伝統音楽は、ハーレムの教会から世界に発信された。(文 太田康男) (資料提供 ニューヨーク在住大須賀慈真師)

十月二十一日(土) 晴

六時

ホテル出発

米国ニューヨーク州イースト・チャタム(ニューイングランド地方ケイナン) ニューヨークマンハッタンから約二百キロ離れたアメリカの田舎町にある「天台宗ニューヨーク別院」に向けて、約三時間半のバスの旅に多少薄暗い中に出発した。日本での距離間隔を考えると、成田から東京経由で福島のお寺に行くような感じである。徐々に車窓も明るくなり、非常に良い天気にも恵まれて、山々の紅葉を



本堂脇伝教大師像前法衆



本堂にて法要

九時三十分

見つつ進んで行くと、なんと薄水を見かけた。

大自然に囲まれた別院周辺では冬季マイナス三〇度にもなるという。

別院到着・法要準備

ニューヨーク別院は慈雲山天台寺といい、住職である聞真・ポール・ネエモン師は一九九五年に「カルナ・天台・ダルマセンター」を設立以来、家畜飼料小屋を改造した仮本堂で、仏教に関してのディスカッションや、坐禅止観を毎週欠かさず行なってきた。二〇〇五年六月に本堂が完成、天台宗では初めてのアメリカ本土でアメリカ人による本格的な布教をスタートした寺院である。

まず訪問者全員で本堂（本尊薬師如来）にお参り。各々法要準備に取り掛かった。

山田貫首は数年ぶりの訪問となり、メンバーとの再会に旧交を暖められた。

十四時

本堂落慶一周年記念法要（護摩供）

菅原御門主を大導師として護摩供を厳修。副導師に任職の聞真・ポール・ネエモン師、来賓として小森秀恵大僧正・山田俊和中尊寺貫首、式衆に日本からの十九名の僧侶、そして別院信徒を含めて八十名の参加である。特にサンガメンバー（堂衆）と言われる住職の弟子の方々は英語に翻訳された經典での参加となり、日米合同法要となった。初めて現地で修される護摩供は米国の人々には興味を感じたらしく真剣な面持ちで参加していた。



記念写真

十月二十二日(日) 晴

十時三十分

グレートバリーントンにあるサイモンズ・ロック大学に到着。
大学構内のダニエル・アート・センターのマコーネル劇場が最終公演の舞台。

十二時

最終打合せ

この公演では最初に別院の聞真住職が声明の解説を英語で行い、その後日本の僧侶数名と別院のアメリカ人メンバーが舞台上上がり同じ声明を日本語と英訳されたものを唱えて比較するという試みも行われた。

声明公演

十三時

ニューヨークと同様に、山田貫首を大導師に執り行われた。

こじんまりとした会場で、観客は二五〇名程、別院のメンバー・学生・大学関係者が多かったが、関心も高く、地元紙では第一面に掲載され、ラジオでも大々的に放送された。

後日、サンガメンバーや一般の観客等から「感動とスピリチャルな体験をした」との多くの感想が別院に送られて来たと聞いている。

十五時

後片付け

公演終了後、別院で中心となって世話をしていた東サンガのリーダーから菅原妙法院御門主に花束が贈呈された。

十九時三十分

ニューヨーク市内到着。

十月二十三日(月) 晴

今日は自由行動日で、オプションのニューヨーク市内観光に参加した。



自由の女神



花束贈呈



声明公演

サイモンズロック大学での

十一時

フェリーにてスタテン島行き。

山田貫首は船内で窓から自由の女神を見学。

十二時

ワールドトレードセンター跡地（グラウンド・ゼロ）到着。

九・一一米国同時多発テロによって悲惨な犠牲となった地である。現在は地下に駅も開通し、再建計画が立てられ工事車両が出入りしており、工事現場といった印象を受けた。

惨事の後は窺われなかったが、メモリアルとして、地下コンコースおよび駅周辺には当時の惨状がパネルで紹介されていた。各々思い思いの形で祈りを捧げた。

十八時

ハドソン川81番棧橋に到着、ダッチィス（公女）号に乗船。

乗船してまもなく夕食。この夕食は解団式も兼ねており、山田貫首が各テーブルを回られて労いの言葉を掛けられる。

十月二十四日（火） 晴

十時

ホテル出発—JFK空港到着。

十三時三十分

日本航空JAL1005便にてニューヨークを後に一路日本へ。十三時三十分。往路より一時間ほど長い空の旅。

十月二十五日（水）

十五時三十分

成田空港着

（日本時間）

入国手続き等を済ませ、菅原妙法院御門主からご挨拶。解散。

山田貫首にはお元気に、ご子息の奥様とお孫さんの出迎えを受け、ご自坊に向かわれた。

（瑠璃光院住職）



解団式風景



グラウンドゼロ

陸奥仏青 第二回 教義研修

「光明供錫杖法要の修得」

菅野宏 紹

去る十一月二十五日・二十六日の両日、天台陸奥仏教青年会主催による「光明供の教義」研修会が実施され、山内より会員及び賛助会員十三名（全受講三十四名）が受講した。

この研修は、天台宗開宗千二百年慶讃大法会を記念して、大法会厳修期間にあわせて、陸奥仏青の研修事業として企画した。前回（平成十六年）は、「光明供の音用」について第二部積善院住職・佐々木仁秀師を講師に研修した。今年は、「光明供の教義」をテーマに大正大学教授で山家学会会長でもある一島正真先生をお迎えし講義を聴講した。

講義の中で胎藏界曼荼羅・金剛界曼荼羅の諸仏構成など台密の基礎的内容の解説から、一島先生ご自身がインドに渡航されたときの写真等を用いて、密教思想とインド文化にも触れられた。

また、先生が著された『光明真言の現代的意味』（関信越布教師会講義録）にて真言の意味を解説いただいた。

われわれは日常、一々真言の意味を理解しないまま、『行記』の通り修法して済ましてしまっているが、今回の研修を通じて、「十八道」や「光明供」真言の意味を分りやすくご指導いただいたので、今後の修法に活かしてゆきたい。

お聴きするところによれば、この日は大学の入学試験日であった由、ご多用を枉げてお出でいただいたことに深く感謝申し上げます。

なお、今回のこの研修について、明年度は「光明供修法の実践」をテーマに、陸奥教区真珠院住職・菅野澄順師について研修を実施し、同年度内に一心、「光明供錫杖法要の修得」研修仕上げの結願法要を厳修する予定である。

（利生院後住・陸奥仏青事務局長）

日本印度学仏教学会 学術大会に参加して 報告

三浦章興

さる九月十二・十三の両日、大正大学を会場に第五七回日本印度学仏教学会学術大会が開催された。中尊寺仏教文化研究所では参加者を募り、佐々木邦世（所長）、菅野成寛（同主任）、清水広元、菅野澄円、三浦章興の五名が参加聴講した。

『維摩経』の思想と文化」と題し、パネルディスカッションが行われた。パネリストは木村清孝（印度学仏教学会理事長）・斉藤明（東京大学教授）・下田正弘（同）・吉津宜英（駒澤大学教授）・佐久間秀範（筑波大学教授）・渡部章悟（東洋大学教授）・平井宥慶（大正大学教授）・高橋尚夫（同）の八氏。司会は多田孝正大正大学教授が務められ、特別報告者として、多田孝文同大教授が調査実施に至

る経過を話された。

『維摩経』は、古来より、数ある経典の内でも重要なものとして、またその内容から僧俗問わず広く読まれてきた経典である。日本においても、『維摩経義疏』は聖徳太子の撰と伝えられる三経義疏の一つとして、日本の仏教文化史上にも「維摩の一黙雷の如し」とうたわれるように、その存在は大きい。

しかし、これだけ有名な経典であるにもかかわらず、サンスクリット語で書かれた原典（梵本）についてはこれまで見つかっておらず、散逸してしまったものと考えられていた。

平成十一年、チベットのポタラ宮において大正大学総合仏教研究所のプロジェクトチームが、所蔵されているサンスクリット写本の調査を行った際、その中から『維摩経』が発見された。これは国内外を問わず、学会に衝撃をもたらす世紀の大発見であった。この写本は大正大学の研究会の手によって、サンスクリット語・チベット語・漢語の対象テキストとして現在出版されている。

今回はこの発見を契機として、『維摩経』がもたらした

思想と文化について議論を深めようという目的で開催されたものである。

会場は大教室であったが、立ち見が出るほどの盛況ぶりであった。

はじめに多田孝文氏より、今回の発見に至るまでの相手側との交渉過程を中心に説明があった。その中で、中国との関係構築を一から始める下地づくりをした上で、チベット側との交渉に入ることができたことや、計画を先へ進めるため、様々な関係者から許可を得る必要があるのだが、そのやりとりの難しさなどについて具体的に語ってくれた。

また、「この話しをすると、交渉の際に多額の金銭が必要ではなかったかとよく訊かれるが、それほど額ははない。ただ、そのためにはお互いが仏教者であるということが理解しあった上で、巧く交渉を行っていくことが大切であり、結局、今回の成果をもたらしてくれたのは、相手との信頼関係を丁寧に構築していった努力の結果に他ならない」と、締めくくられた。

次に、高橋尚夫氏より、発見に至るまでの過程と内容について発表があった。高橋氏は、平成十一年の調査の際、

現場で梵本を発見し取り上げた当事者である。そのため、実に興味深くその時の状況を詳細に発表された。

その後は、サンスクリット語研究、仏教学、仏教文化論など、様々な分野から、各々の先生方による発表が行われ、盛んに質疑応答が行われた。

当初設けられていた時間は二時間半であったが、議論が白熱したため、少し時間をオーバーしたところで何とか閉会となった。そのため、消化不良気味の方もおられたように見受けられたが、大学卒業以来、学会という場からずっと足が遠のいていた私にとっては、『維摩経』の内容もさることながら、学究への意欲をあらためて思い起こさせていただく良い機会であった。

(管財部次長)

讚衡蔵〔館藏品展〕 報告

「中尊寺と骨寺村」
ほねでらむら

菅原光聴

はじめに

平成十八年十一月一日から二十日まで讚衡蔵企画展示室において館藏品展「中尊寺と骨寺村」絵図と古文書からみる寺領」が開催され、普段非公開の「陸奥国骨寺村絵図」や「中尊寺文書」等が展観された。

九月十四日には「平泉く浄土思想を基調とする文化的景観」がユネスコの世界文化遺産に推薦されることが政府決定された。そして、そのコアゾーンの一つに岩手県一関市敵美町本寺地区の「骨寺村荘園遺跡」があげられ、この地区の歴史や景観に対する関心が高まりつつある。

今回の館藏品展では、この骨寺村を中心に、中尊寺が寺領とよばれる土地・屋敷から納められる収益によって長く支えられ存続してきた歴史を、次のような三章構成で紹介した。

I 寺領骨寺村の成立

藤原清衡公は「紺紙金銀字交書一切経」およそ五千三百巻の書写を発願し、完成した経巻を中尊寺経蔵に奉納した。天治三年（一一二六）三月二十四日、中尊寺落慶の際には五百三十人の僧侶がこの一切経を捧げ持ち、一人十巻ずつ、それぞれの経巻を紐解いて経題を唱えたと「中尊寺建立供養願文」は伝えている。その翌日、この一切経書写の責任者だった自在房蓮光じざいぼうれんこうは清衡公より中尊寺経蔵別当に補任ふにんされている。そしてこのとき蓮光の私領、骨寺村は中尊寺経蔵別当の寺領（荘園）として認められ、以後経蔵別当領として伝えられてゆくことになる。

この章では「紺紙金銀字交書一切経」、「中尊寺建立供養願文」、「中尊寺経蔵別当職補任状案」等を展観して骨寺村が中尊寺の寺領（荘園）となったいきさつについて紹介した。

II 描かれた骨寺村

中尊寺には一四世紀頃（鎌倉―室町時代）に描かれたといわれる骨寺村の絵図が二枚伝えられている。これらの絵

図からは中世農村の景観や生業なりわい、神仏への信仰など多くの情報を読みとることができる。そして、この村の所在地である一関市の本寺地区には絵図に描かれた中世荘園の景観が今もよく残されており、絵図と現景とを対比することができる数少ない事例となっている。

「陸奥国骨寺村絵図」と現在の一関市本寺地区の航空写真をならべて展示し、中世農村のすがたに思いを馳せていただいた。また、絵図（詳細図）の紙背に描かれ、今では裏打紙の下になって見ることのできない「中尊寺と骨寺村差図」とよばれる図面の模写や、源頼朝が中尊寺経蔵別当領としての骨寺村の存続を保証したことを示す古文書なども展示した。

Ⅲ 中尊寺を支えた寺領

中尊寺領は今では古文書などによって断片的にししか知ることができないが、それらによると伊沢いさわ（胆沢）郡（岩手県奥州市・胆沢郡金ヶ崎町）が最も多く、江刺郡えさき（岩手県奥州市）や斯波しわ（紫波）郡（盛岡市乙部地区）、秋田郡（秋田県）、羽州狩川かりがわ（山形県東田川郡）などの地名もみ

られる。

この章では、中尊寺に残される古文書から中尊寺を支えた寺領について紹介した。

会期をふりかえって

現讃衡蔵が開館して六年、通算四回目となる今回の館藏品展だったが、会期中は紅葉のシーズンとも相俟あいまって、参拝客や地元の方々など八万人近くに観覧していただいた。このうち十一月十一日と十八日には、地元一関市本寺地区の方々が見学を訪れ、地域と寺との歴史的つながりや絵図に描かれた地域の様子について興味深げに展示に見いつていた。

今回の展示にあたっては、絵図や古文書といった担当者にとっても難解な内容の資料を、いかに分かりやすく展示してゆくかで頭を悩ますことも多かった。資料にはできる限り解説を施すことに留意したが、準備にとりかかったのが遅く、資料解説に十分な先学のご指導を仰げなかったことは今後の反省点としたい。

劣化しやすい紙資料の展示ということもあり、二十日間

という短い期間の展示ではあったが、平泉の世界文化遺産本登録にむけて、遺産をはぐくみ、支えてきた一つの側面を紹介できたのではないかと思う。また、「骨寺村」の名が全国から訪れる参拝客や地元の方々への印象に刻まれ、世界文化遺産に対する理解を深めていただくための一助となることができただけであればさいわいである。

（管財部次長）

展示資料リスト

- 中尊寺建立供養願文（輔方本）〔重文〕
- 紺紙金銀字交書一切経（維摩詰経巻下・楞伽経巻二）〔国宝〕
- 伝自在房蓮光墨画像（模写）
- 中尊寺経蔵別当職補任状案（中尊寺文書）〔重文〕
- 中尊寺経蔵別当蓮光讓状案（中尊寺文書）〔重文〕
- 中原親能奉書案（中尊寺文書）〔重文〕
- 陸奥国骨寺村絵図（詳細図・簡略図）〔重文〕
- 骨寺村絵図紙背中尊寺と骨寺村差図（模写）
- 骨寺村所出物日記（中尊寺文書）〔重文〕
- 骨寺村在家日記（中尊寺文書）〔重文〕
- 金色堂別当頼賢讓状（中尊寺文書）〔重文〕
- 中尊寺金色堂領打渡状（中尊寺文書）〔重文〕
- 中尊寺字頭職補任状（中尊寺文書）〔重文〕
- 中尊寺別当領打渡状（中尊寺文書）〔重文〕



寺僧より展示説明をうける一関市本寺地区の方々（11月11日）

〔グラフィア解説〕

江刺 高村哲郎氏

紺紙金字経 奉納

中尊寺では昨年九月十六日に、奥州市江刺区在住の高村哲郎氏から紺紙金字経「大般若波羅蜜多経卷第四百五十九」一卷を御奉納いただいた。

高村氏は、前貫首の千田孝信大僧正の御親戚筋にあたる方で、自家に伝来していた紺紙金字経一卷を「お預かりしていたものを中尊寺にお返ししたい」とのお気持ちから、今回の御奉納に至ったとのこと。

これを受けて中尊寺では同月二十三日の秋彼岸法要の際に高村氏をお招きし、感謝状・受納證・記念品を贈呈した。

中尊寺大長寿院所蔵の国宝「紺紙金字一切経」二千七百三十九巻の中で当該の「大般若波羅蜜多経卷第四百五十九」は欠本となっており、すでに亡失、山外へ流失したものと考えられる。

今回御奉納いただいた紺紙金字経について、詳細な調査は、後日、あらためて実施するとして、現段階での当山における見解は次のようである。

一、全体の作風から見て平安後期の紺紙金字経と見て間違いはない。

二、大長寿院所蔵中に当該巻が欠本となっている。

三、表紙・見返絵の筆致が「中尊寺経」の「紺紙金字一切経」のものと同趣である。

四、料紙も「中尊寺経」のものと同じとみられる。

これらのことから、この紺紙金字経「大般若波羅蜜多経卷第四百五十九」は「中尊寺経」の一卷であるとみて問題はないものと思われる。

中尊寺にとって、一昨年の金銀字経一卷に続いて、今回さらに中尊寺経一卷が「還蔵」されたわけである。寺観「経山」といわれる当山にとって、高村氏の御奉納は誠に「檀主清衡公」の意に叶ったものである。

平成十四年発行の〈寺報〉『関山』第八号に「近年還蔵された金字経・金銀字経について」が掲載され、翌十五年

の九号に「植村和堂氏御奉納の金銀字経」、さらに、昨年
の第十三号には「還蔵された金銀字経」が掲載されている。
これらに倣って、今回もデータを左記のように掲げること
にした。尚、見返絵及び巻頭部分のカラー写真については
「寺報ぐらびあ」の頁に掲げたので参考にしていただき
い。

經典名 大般若波羅蜜多經

尾 題 大般若波羅蜜多經 卷第四百五十九

見返絵 樹下説法図

(二脇侍、九僧形、四供養者、遠山、飛行

樂器、散華)

入蔵年月 平成十八年九月

文字色 金字

本紙縦 二五・八〇

全 長 八五七二・〇〇

見返横 二一・一〇

紙 数 一七

界 高 一九・五〇

界 幅 一・七〇

〔大正新修大蔵経 第二二〇〕

注 1

經典名は、便宜、大正新修大蔵経の経題とした。

注 2

「中尊寺金銀字経に関する研究」報告書（研究代表
者・京都国立博物館長藤澤令夫）に準じ、本紙縦・
全長・見返横・界高・界幅の単位はセンチメートル
とし、見返絵の「比丘」は光背のある比丘形、「僧形」
は光背のない比丘形とした。紙数は見返しを除く本
文（制作当初分）のみの紙数を示す。

（中尊寺仏教文化研究所主査 北嶺澄照）



秋彼岸法要の際に感謝状を贈呈

風信 / 語録 文化を受け継ぎ、伝えていくこと

平泉町・表具工房 ことがさか楓林堂 小賀坂勝美

『東北開発研究所』'06秋季号〈リレーサロン〉より

「表具」という言葉をご存知でしょうか？

中尊寺の下で小さな表具屋を営んでおりますが、時おり

「それって何？ 表具師ってどんな仕事をするの？」と質問されることがあります。

表具とは、画仙紙や絵絹（えぎぬ）に書かれた書や画を鑑賞に適したかたちに整えることを言います。掛け軸、和額、ふすま、障子などの仕立てや修理は、みな表具師の手によるものです。また最近では一般家庭の中よりも美術館や博物館で見る機会のほうが多くなつた屏風や巻物もそうです。

掛け軸や額として完成した書画作品は、表具されたことで破れや汚れから守られ、よりよい条件で

長く保存されることにもつながります。口はばつたい言い方をすれば、紙や絹という、もろくはかな素材にしるされた文化を前の時代から受け継ぎ、後の時代へと渡していくための「器作り」が表具であると確信して、日々、作業を続けています。

古い文化を受け継ぎ、それを次世代へ伝えていく——と言えば、表具よりはるかにスケールの大きいものが文化遺産です。私の町では「平泉の文化遺産を世界遺産へ」と、二〇〇八年のユネスコ世界文化遺産登録の実現へ向けて、さまざまな運動を展開しています。遺跡ばかりで現存する建造物の少ない平泉が世界遺産だなんてお

こがましい、と私は当初、とても冷やかでした。けれども講演会や現地説明会に参加して、土の中に埋もれている歴史を知るようになると、不思議なことに見えない建物が見え、聞こえないはずのざわめきが聞こえてくるようになりました。

平泉町は今でこそ人口九千人足らずの小さな町ですが、平安時代末期の約百年間、仏教を基本理念とする文化都市国家の拠点でした。当時の平泉は、僧坊八百を数え、人口は十万人とも推定されて、京都に次ぐ大都会だったとか。奥州藤原氏の治めた地は「蝦夷」と蔑視された福島県白河関以北一円でした。「地方の時代」と謳われ、道州制が提案されている昨今

ですが、今の東北地方がそっくりそのまま十二世紀に、すでにひとつにまとまっていたことに驚かされています。そして戦いのない理想郷を建設するという高い精神性を持った国造りをしていたことに思いをはせると、私の心は躍ります。

都の人たちが「道の奥」とも呼んでさげすんだ北の大地は、実は黄金と駿馬を豊かに産するまほろばでした。ここをなんとしても手中に収めたかった朝廷や源氏・平家にもねず屈せず逆らわず、表面上は淡々とみちのくを率いてきた平泉の主たち。しかし胸中はずねに「都びと、何するものぞ！」という気概に満ちていたはずです。その姿勢は現代の東北に暮ら

す私たちにも通じ、大きな示唆を与えているものだと思えます。

初代清衡は白河関から青森県陸奥湾（外ヶ浜）まで、南北を縦断する奥大道（おくのおおみち）を作りました。一町（約一〇九m）

ごとに傘卒塔婆を立て、全行程は徒歩二十日余りの道のりです。その中間点が政庁のある平泉でした。奥大道は国道四号の働きをする大動脈であり、並行して走る北上川の水運はきっと高速道の役目をしたでしょう。

道が文化を運んでくると言いますが、水陸のラインを人や物資が行き交い、日本各地や海外からおびただしい量の文物が入ってきました。それらを取り入れながら一

段と上質なものに変容させて独自の文化をかたち作っていったことが、平泉の町と周辺を丹念に歩くと見えてきます。

文化遺産とは言うものの、今回の登録審査には自然景観の保全が重要視されています。北上川右岸の遺跡群から周囲の山々、里山の風景、人々の暮らしなど、全体として「浄土思想に基づき自然と一体となって完成された都市と文化的景観」が保たれているかが評価の対象となっています。

住民生活には規制がかかり、そこかしこに不便なことが出てくるかもしれません。それに「世界遺産を観光のよりどころとしてはならない」という自戒もあって、努力のわりに史跡観光地としての実

入り(?)は少ないかもしれませ
ん。けれども平泉に生まれ合わせ
住み合わせた私たちには、東北人
のプライドであり、バック・ボ
ンでもある藤原氏の遺した精神と
文化を、世界と未来に伝えていく
責任があると考えています。

東北に暮らす皆さま、十二世紀
からの贈り物である平泉の文化遺
産に、どうか注目と応援をお願い
いたします。



毛越寺浄土庭園

風信 / 語録 〈「写経の寺」中尊寺を訪れて〉

(10月の郵便受から)

実りの秋となりました。みちのくの黄金色に輝いた稲穂の収穫も終わり、山々も紅葉が始まった頃だと思います。先日(十四日)写経でお世話になったNと申します。中尊寺本堂で、一人での申し込みにもかかわらず、受け付けて下さりありがとうございます。

自宅近くの「善光寺」で六年前より写経を始めましたが、身も心も「洗われ」、また、自己と向き合う修行として今も続けております。中尊寺ではとても丁寧な段取りで写経が始まり、驚きました。おごそかで、静かに仏様に見守られながら行えたこと、心より感謝申し上げます。これからも、機会を見付けて中尊寺へ行き、次回は「座禅」もしてみたいと思います。



冬は雪が多いでしょうか…? 本堂は寒いでしょうか…? またお世話になると思います。が、よろしくお願い致します。皆様のご健康を心からお祈りしております。御礼まで

(長野市 N)

菊薫る時節となりました。お元気で御精励の趣、お喜び申し上げます。

先日は、志望大学合格祈願の御札をご送付頂きありがとうございます。また、本日は写経奉納式の案内を頂きありがとうございます。試験当日、御札を持って試験にのぞみました。おかげ様で合格することができ、心より御礼申し上げます。

奉納式に出席することはできませんが、高松より合掌させて頂きたいと存じます。

時節柄何卒ご自愛専一になさって下さい。

御礼申し上げます。

(高松市 A)

風信 / 語録 「わたしが、もっていく～」

〈写真〉

(2月の郵便受から)

立春が過ぎたとはいえまだまだ
寒さの続く本県でございます。

本日は『関山』十二号御恵送
いただきまして誠にありがとうございます
이었습니다。

ある水準を保ってそしてあらゆる
方々に好意をもって読んでもら
う雑誌づくり本当にご苦勞様で
ございます。

この本はいろいろな角度から興
味をそえられるように作られてい
る雑誌のようにお見受けします。
読んでいてつい引き込まれます。

不特定多数の人々の心情をよく
つかんでいると思います。

次号を楽しみにしてお待ちして
おります。落手御礼まで

中尊寺仏教文化研究所御中

(盛岡市 M)

立春を迎えたとはいえ、北国の
春はまだまだです。

中にも今年は例年になく寒さ、
その中の寒行は、さぞかし身の
引き締る毎日であったと思いま
す。夕方の家々に温かい灯がとも
るころ、「鈴の音」が聞こえると
安堵するのは、私だけでしょうか。

昨日は、御札をお届けいただき、
恐縮しております。ありがとうございます。
私青の皆様方の益々
の御活躍をご期待し、お礼を申し
上げます。時節柄御自愛下さい。

中尊寺寒行皆様

(平泉町 T)



〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

もしかしたら
いいえ まさか

佐々木典子

福聚教会東日本大会が、去る十一月七・八日の二日間、群馬県沼田市で行われ、中尊寺支部・毛越寺支部の合同で三十一名が参加しました。

唱詠の部では『天台大師報恩和讃・詠歌』を発表。また舞踊の部は、舞い手九名、他の会員は歌い手となって『平和観音和讃』を披露しました。

東日本大会は隔年ごとに実施されており、前回と前々回の二大会連続して、唱詠の部で最優秀賞をいただいています。

今年も頑張ろう！ 三連覇？ いいえまさかと思いつつ五月から曲目を決め、稽古に取り組んできました。そしていよいよ当日、舞踊の部で見事グランプリをいただくこと

ができました。この曲は扇を二本ずつ持って舞い、全員の扇の面を揃えることが要求される難しいものです。

稽古は、佐々木仁秀師のご指導のもと、中尊寺の庫裏の一室や本堂を借りて行いました。が、舞踊のメンバーはこのほかに、独自に地区の公民館で毎週稽古をしてきました。そして稽古のあとには、自作の漬物や果物をはじめ、持ち寄ったお菓子で、楽しいお茶の時間となります。

また、福島に赴いて矢島八重子先生のご指導も受けました。この結果、熱心さに最優秀賞がもたらされたのだと思います。

東日本大会で優勝すると、次年度の西日本大会に招かれ、披露することになっています。今年の会場は佐賀県とか。また大きな目標ができました。

今回の会場の利根沼田文化会館は、遠くに谷川岳や赤城山を望む小高い所がありました。沼田周辺は温泉にも恵まれています。

群馬本部委員の方々のお骨折りで、大会も円滑に運営されました。また発表が全て終了した後には、群馬天台

青年会によって『天空に響く悠久の調べ』と題する雅楽が披露され、伝統芸能の雅の世界に誘われる心地でした。

私たちの活動が、多方面からのご援助と、会員の皆様のご協力によるものであることを、改めて感謝し、これからも楽しく継続してまいりたいと思っています。

(円乗院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事)



〔グラビア解説〕

中尊寺大池跡で「大池ハス」開花

大池ハス（中尊寺大池跡出土）は、発掘調査で出土したハスの実が発芽生育し、開花しました。出土地層から藤原秀衡時代のものと思なされます。義経や弁慶、西行が見たであろう大池ハスの映像は、歴史のロマンとして明るい話題を世の中に提供してくれました。

八月九日の栽培日誌から―。



一号鉢の三番目に出た花芽（蕾）の開花を確認。二番目のものは開花四日目。四番目は開花二日目と三輪の花が咲きそろうた。

大正大学「博物館実習Ⅱ」

北嶺 澄 照

学校の教諭資格を得るために大学で教職課程を履修すると「教育実習」があるように、博物館学芸員になるためには「博物館実習」がある。学芸員課程最後の科目は「博物館実習Ⅱ」で、大学四年になると、実際に博物館に向いて実習することになる。

ちなみに「博物館実習Ⅰ」は主に三年の時に大学で行なう実習である。中尊寺で平成十七年に行われたのはこの「実習Ⅰ」で、「実習Ⅱ」の事前学習的なもの。大学のスタッフが来ていたのは「実習Ⅰ」は大学側が責任を持って行わなくてはいけないからであった。

平成十八年度に入り、大学から「博物館実習Ⅱ」を受けて入れてほしい旨の要請があった。だが、中尊寺讚衡蔵は博物館法に基づく「博物館」・「博物館相当施設」ではないため一度はおこたわりした。しかし、現在では、学芸員課程を設置している大学が「認定した施設」であれば実習が出

来るそうで「(大学側で) 貴館を認定しますので、是非お願いしたい」と要請された。

大正大学は、天台宗・浄土宗・真言宗智山派・真言宗豊山派の三宗四派が協調して設立している仏教系大学、設立四宗団による仏教連合大学で、当山にも大学のOBが大勢いる。御縁により受入はスムーズに決定した。

実習期間は八月二十七日から九月一日とした。実習の内容は、「世界文化遺産」登録を申請しようとしている「平泉」を意識して企画した。中尊寺だけに限定せず、特別史跡「無量光院跡」での発掘実習や、「骨寺村荘園遺跡」(「一関本寺の農村景観」の名称で重要文化的景観にも選定された)でのフィールドワークも取り入れた。「中尊寺ならではの、平泉ならではの実習となるよう」に留意したつもりである。大学側と連絡をとりながらあれこれ準備をすすめた。

初日の八月二十七日、開講式では実習生に対し、千田貫首からご挨拶を頂戴した。その中で「(ものを) 見る目を養うには、その成り立ちや歴史背景を鵜呑みにせずに疑ってみることを、そして実際に現場に立って調べることを、そし

て学んだことや感じたことを自分のことばであらわし伝えること、この三つが大切」であることを御教示いただいた。十二名の実習生達にとっては印象深かったようで、提出された実習日誌のある一冊には「文化財に触れる際だけではなく、史料を読む場合にもいえること。今回の実習だけでなく、これからずっと忘れずにいたい。」と書かれていた。

実習は予定通り順調にすすんで、五日目の八月三十一日は、午前中に中尊寺仏教文化研究所の佐々木邦世所長から、「陸奥国骨寺村絵図」について実物を見ながら話を聴き、午後には平泉町世界遺産推進室の八重樫忠郎室長補佐に引率していただき奥州市衣川区「衣川遺跡群」と一関市本寺「骨寺村荘園遺跡」のフィールドワークを実施した。本寺では急峻な細い道をひたすらのぼり、山王岩屋を訪れた。屋外の実習では、みなここが一番印象深かったようだ（写真「寺報ぐらびあ」の頁に掲載）。

実習生Kさん（前略）実習のメインともいえる山王岩屋へのぼった。急勾配でたいへんだった。でも、山頂に着いた時の達成感。一気に視界が開け、心地よい風が吹き、きれいな田園風景が見えた時の興奮は、言葉では言い尽く

せない」

同じくIさん（前略）ふもとから見上げた山王岩屋の山頂は、高くはないものの、険しさは充分感じられた。予想に違わぬ山道はいつそ清々しいほどで、目的の岩屋に着いた時は達成感すらあった。先生方がお経をあげた瞬間、そこは史跡から祈りの場へと変わった。訪れる人は少ないものの、祈るために人がつくった場だというのがひしひしと感じられた。私はお経はあげられないが知っている限りの仏を讃える言葉を胸の中でとなえた」

このフィールドワークがなければ、私自身も山王岩屋を訪れるチャンスにはなかなか恵まれなかったことだろう。実習生諸君のおかげで、得がたい機会を得ることができた。実習は終わり、学生達は大学へと戻っていった。「共に学んだ」、「学ばせてもらった」六日間だった。

今回の実習では、平泉町世界遺産推進室・文化財センター、毛越寺の方々たいへんお世話になりました。厚く御礼申し上げます。実習概要は次頁の日程表を参照ください。

（管財部執事）

平成18年度大正大学「博物館実習Ⅱ」日程表

8月29日		8月28日		8月27日		月日										
13 17 00	09 12 00	13 17 00	09 12 00	14 17 00	14 14 40	14 14 20	時間									
文化財保存管理実習		文化財取扱の基礎		古文書解読		中尊寺巡拝		事前学習		事務連絡		開講式		項目		
き掃除)		中尊寺所蔵の文化財を例にとりながら学ぶ		中尊寺文書の解読に挑む		金色堂、経蔵、覆堂、能舞台、讚衡蔵などの歴史文化財の講義		金色堂、経蔵、覆堂、能舞台、讚衡蔵などの歴史文化財の講義		同金色堂解体修理に関する記録映画を鑑賞する		中尊寺を理解するため、中尊寺御遺体学術調査と		実習に関する説明等		内容
菅原光聴		菅原光聴		佐々木邦世		菅原光聴		菅原光聴		菅原光聴		菅原光聴		菅原光聴		担当
中尊寺境内		讚衡蔵		讚衡蔵		中尊寺境内		かんざん亭		中尊寺本堂		中尊寺本堂		中尊寺本堂		場所

		9月1日		8月31日		8月30日	
11 12 30 00	11 11 00 30	09 10 00 30	13 17 00 00	09 12 00 00	13 17 00 00	09 12 00 00	
閉講式	法要随喜	毛越寺参拝	古文書調査実習 (ワールドワーク)	古文書調査実習	発掘実習	文化財の調査作成	
本堂にて法楽 導師 菅原光中師、実習の無事終了 をご本尊に奉告し、感謝	大般若転読法要に随喜する	特別史跡・特別名勝「毛越寺」及び「旧観自在王 院庭園」の見学（毛越寺事務局千葉秀覚氏にご案 内をいただく）	骨寺村絵図に描かれている一関市本寺へ赴き、現 地踏査する（平泉町世界遺産推進室八重樫忠郎氏 にご案内をいただく）さらに、現在、注目されて いる衣川遺跡群の「接待館遺跡」他を見学する	中尊寺文書を読み、骨寺村絵図に描かれている情 報を読みとる	特別史跡「無量光院跡」で発掘の実習（平泉町文 化財センター及川司氏・鈴木江梨子氏のご指導を いただく）↓雨天のため発掘実習取りやめとなり 「無量光院跡」と「柳之御所遺跡」・柳之御所資料 館の見学に変更	宋版一切経唐櫃の調査を取る	
北嶺 澄照	北嶺 澄照	北嶺 澄照	北嶺 澄照	佐々木邦世	菅原光聴	北嶺 澄照	菅原光聴
中尊寺本堂	中尊寺本堂	平泉町内	一関市内 奥州市内	讚衡蔵	平泉町内	讚衡蔵	

研究／出版

平成十八年一月～十二月

〔出版〕

『十和田湖が語る古代北奥の謎』 義江彰夫・入間田宣夫・斎藤利男編著 校倉書房

〔抄出〕

「延久二年北奥合戦と清原真衡」 入間田宣夫

「安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変貌」 斎藤利男

—奥大道・防御性集落と北奥の建都—

『平泉文化研究年報』第六号 岩手県教育委員会

「平泉柳之御所遺跡の建築についての一考察」 富島義幸

「安倍氏の柵から平泉の居館へ—柳之御所遺跡の堀の系譜—」 羽柴直人

「中世都市周縁部の歴史を探る—毛越地区の調査から—その三」 岡陽一郎

「柳之御所遺跡出土瓦の研究」 木本拳周

『宮城歴史科学研究』第六〇号 宮城歴史科学研究会

特集 C G「甦る都市平泉」をめぐって—平泉研究の現在—

「柳之御所における宴会の風景」の舞台裏—人々給絹日記の解読— 大石直正

「中尊寺十界阿弥陀堂の成立—C G「甦る都市平泉」と平泉寺院研究—」 菅野成寛

「平泉建築の復元—考証と課題—」 富島義幸



『歴史評論』六七八号（抄出）

歴史科学協議会編集 校倉書房

特集／平泉・衣川・北奥の遺跡群と北方世界

「北方世界のなかの平泉・衣川―日本史における「北」の可能性―」

斎藤利男

「都市平泉―像の再構築―新発見・衣川遺跡群の視点から―」

菅野成寛

「衣川遺跡群とは何か―前平泉と平泉の接点―」

及川真紀 福島正和

「南北奥羽の居館遺跡と平泉政権」

羽柴直人

『中世の聖地・霊場』東北中世考古学叢書五（抄出） 東北中世考古学会編

高志書院

「霊場・平泉」

八重樫忠郎

「北上川流域に広がる霊場―中尊寺・正法寺・板碑から―」

佐々木 徹

『東北を読み直す』（抄出）

細井 計編 吉川弘文館

「清衡が立てた延暦寺千僧供の保について」

入間田宣夫

「古代蝦夷の諸段階」

工藤雅樹

『『諸家系図纂』所収の「安藤系図」について

―奥六郡安倍氏の祖先系譜に関する一考察―

樋口知志

週刊日本の合戦42『奥州藤原氏と衣川の合戦』

講談社



〔著書〕

『平泉の文化遺産を語る』——わが心の人々——

佐々木邦世著 大正大学出版会

*文化財を景観ともども保存していく大切さ、むずかしさがひしひしと伝わってきました。高著を多くの若い人たちに是非読んで貰いたいと思っっています。

東京 A教授（日本美術史）

*驚きました。いかに平泉を、中尊寺を慈しんでこられたかがこの一冊のなかに満ちあふれていたからです。「述べて作らず」というお心どおり、それは貴重な証言集となりました。よいことだけでなく、ときには「M君のレポート」などをあえて取り上げ、また、名匠たちの貴い言葉を揚げながら問いかけを行っていただける前向きなお姿に感動を覚えております。

東京 Fさん（著述業）

『東北の争乱と奥州合戦——「日本国」の成立——』〔戦争の日本史五〕

関 幸彦著 吉川弘文館

〔論文〕

『奥州藤原氏の奥羽支配』

『鎌倉幕府と東国』 岡田清一 続群書類従完成会

『『吾妻鏡』と平泉』

『中世社会史料論』 五味文彦 校倉書房

『平泉藤原氏と鎮護国家大伽藍一区』

『院政期の王家と御願寺——造営事業と社会変動——』 丸山 仁 高志書院

『俘囚長と藤原氏』『古代を考える 多賀城と古代東北』 新野直吉 吉川弘文館

『東国の仏像——東北大学の科学研究費による研究成果——』

月刊『文化財』 五二二号 特集 最新の彫刻史研究 長岡龍作 第一法規



『僧妙達蘇生記』と十一・二世紀の奥州社会

『東北学院大学東北文化研究所紀要』第37号 大石直正 東北学院大学

『義経と秀衡―いっつかの幕府の可能性をめぐる―』

『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究報告』第39号

入間田宣夫 宮城学院女子大学

『中尊寺国宝金色堂につながる不可思議』

『AROMA RESEARCH』(Vol.7 No.4 2006)

稲森善彦ほか フレグランスジャーナル社

〔報告書〕

『柳之御所遺跡第五九次発掘調査概報』

岩手県文化財調査報告書第二二二集 岩手県教育委員会

『高玉遺跡第三次発掘調査報告書』

―経営体育成基盤整備事業一関第一地区第八号発掘調査―

平泉町文化財調査報告書第一〇〇集 平泉町教育委員会

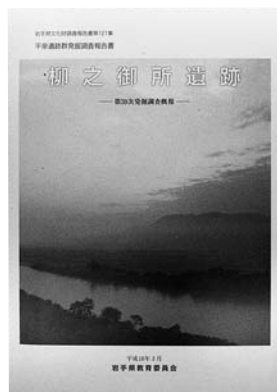
『倉町遺跡第六次・国衡館跡第一三次発掘調査報告書』

―都市計画画街路毛越寺線街路整備事業に伴う調査―

平泉町文化財調査報告書第一〇二集 平泉町教育委員会

『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』第七集

一 関市埋蔵文化財調査報告書第一集 一 関市教育委員会



衣川シンポジウム

「日本史のなかの衣川遺跡群」参加記

菅野 成寛

はじめに

二〇〇五年、岩手県平泉町に隣接する奥州市衣川区（旧衣川村）より、十二世紀平泉の都市遺跡にきわめて類似した衣川遺跡群が発見され、その遺跡保存が急務であることは昨年『関山』十二号の誌上で紹介した。

衣川遺跡群の発見は衣川の堤防建設工事に伴うもので、
勅岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる発掘調査は約七か月間という短いものであったが（二〇〇五年四月十一日より十一月十六日）、平泉・柳之御所遺跡を彷彿とさせる大掛かりな二重堀をもつ十二世紀後期の接待館遺跡、同じ時期の庭園遺構の一部と思われる衣の関道遺跡など重要な発見が相次ぎ、関係者に強い衝撃を与えた。

そこで、この衣川遺跡群の調査内容とその重要性を広く

訴えるべく衣川シンポジウム実行委員会が結成され（実行委員長・入間田宣夫東北芸術工科大学教授）、昨二〇〇六年六月二十四日、衣川シンポジウム「日本史のなかの衣川遺跡群」が地元のサンホテル衣川で開催され、衣川地区の方々や関係者など約二百名が熱心に聴講した。



開会前のアトラクション（衣川地区の大森神楽）

以下は、そのシンポジウムの参加記だが、特に本誌の読者の理解に配慮し、実際の講演と報告の順番を適宜に入れ替え、衣川シンポジウムの簡単な内容紹介とする。



図 衣川遺跡群の位置図

発掘調査のあらまし

中尊寺の関山に隣接した衣川の北岸から発見された衣川遺跡群は、国道4号線に東接した六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡、衣の関道遺跡の四遺跡からなっている(図)。

発掘調査を担当された羽柴直人氏(岩手県埋蔵文化財センター調査員)の報告によると、東端の六日市場遺跡から規模の大きい二条の溝(上幅約2m、深さ約1.3m)と十二世紀の遺物が検出され、これに隣接した細田遺跡では四十一棟の掘立柱建物跡と同世紀の遺物が確認されたという。



さらに接待館遺跡においては、大規模な外堀（上幅約7 m、深さ約2 m）と内堀（上幅約3 m、深さ約1・3 m）が発見され、堀の内部から十二世紀後期のかわらけ群が出土。これら三遺跡からやや離れて立地した衣の関遺跡では庭園状の池遺構、三十棟の掘立柱建物跡や十二世紀の遺物が見つかったという。

また調査地区外ながら、近隣の館遺跡と館城遺跡においても同世紀の国産陶器片が発見されていたことを羽柴氏は紹介し、十二世紀衣川遺跡群のエリアが予想以上に広範囲であることを強調された。

言うまでもなく衣川地区は、十一世紀の『陸奥話記』に登場する安倍氏の「衣川関」が設けられた場所であり、このたびの衣川遺跡群の出現は、続く十二世紀の平泉時代における活用を明らかにした点で大きな意義があるろう。このほか衣川地区には、十世紀末から十一世紀前期の「長者ヶ原廃寺跡」、右の衣川関とも伝承される「並木屋敷跡」などが点在し、今後における同地区の歴史的重要性を浮かび上がらせる報告内容であった。



衣川遺跡群を見学するシンポジウム参加者

都市衣川・平泉と北方世界

これに続く斉藤利男氏（弘前大学教授）は都市平泉研究のパイオニアの一人で、衣川と平泉の都市性の問題と関わる「都市衣川・平泉と北方世界」をテーマとされた。

まず斉藤氏は、従来、衣川地区は都市平泉の周辺部として扱われ、これまで「都市衣川」の成立には否定的であったものが、今回の衣川遺跡群の発見により、決して平泉の周辺、縁辺部と言えなくなってきたことを強調された。

それを語る第一の史料として、鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』には、藤原基成（三代秀衡の岳父・元陸奥守）の「衣河館」が構えられた点、その別邸で源義経がかくまわれた点、またこれに隣接した家臣達の屋敷群も推定できる点を挙げ、特に中央貴族出身の基成の「衣河館」は京都風の景観を備えたもので、庭園を伴った衣の閑道遺跡の一带こそ彼らの邸宅群に相応しいとし、平泉と衣川の二元的な都市構造（首都平泉・副都衣川）を主張された。

さらに斉藤氏は、衣川地区は中尊寺の里坊が立ち並ぶ場所、山上の中尊寺では不都合な経済活動を行う地域であったことを中尊寺文書などから推測し、初代清衡以来の衣

川地区の活用、さらに安倍氏以来の交易地と見なされることも述べられた。

その上で斉藤氏は、衣川地区の地籍図や航空写真などを用い、安倍氏と藤原氏時代の屋敷地割や奥大道などを推定復元し、北方世界における藤原氏の政治権力の問題にも触れ、報告を終了された。

斉藤氏の「都市衣川」論は、同氏の『平泉―よみがえる中世都市―』（岩波新書、一九九二年）以来の主張だけに、



今回の報告内容は積年の思いがこもった熱いものであった。

西の福原と北の衣川・平泉

平氏研究の第一人者、高橋昌明氏（神戸大学教授）の基調講演「西の福原と北の衣川・平泉」は、近年発掘調査が進みつつある西の福原京（現在の神戸市）と北の衣川・平泉を対比し、平氏政権による福原幕府の可能性を述べられたものであった。



高橋氏によれば、計画は頓挫したものの、平清盛による京都から福原への遷都の計画は、幕府的な限界（地域限定的な権力）を打ち破り、自らが国家と国政を担うという意図をもつもので、後の源頼朝の鎌倉幕府は、こうした清盛の発想を、より厳格かつ本格的に追求したものであることを主張された。

この鎌倉幕府の都市建設にあたって参考となったものこそ平泉の都市モデルで、鎌倉の勝長寿院や永福寺（二階堂）などの巨大寺院の建築は、平泉で頼朝が見聞した大長寿院（二階大堂）や無量光院などの強烈な印象なしにはあり得ず、鎌倉こそ、平氏の福原的な成果と藤原氏の平泉的な成果を総合化したものであり、近年の衣川遺跡群の発見は、右の見通しに、さらに豊富で刺激的な知見を加えるものとし、講演を結ばれた。

永年にわたる高橋氏の平氏研究や武士研究を踏まえられた平清盛の福原幕府の議論は、最新の研究成果を分かりやすく提起されたもので、ならば三代秀衡による平泉幕府の構想なども自ずと想起させるものがあった。

義経・基成と衣川遺跡群

最後の講演者である保立道久氏（東京大学史料編さん所長）は平安時代史研究の第一人者で、『義経の登場』（NHKブックス、二〇〇四年）の著者でもある。テーマは「義経・基成と衣川遺跡群」であった。

冒頭で保立氏は、平安時代とは地方の時代であったものが、続く鎌倉時代に入ると、鎌倉幕府が自らの軍事権力をもって地方を押しつぶしていく時代であることをまずもって強調された。

保立氏によれば、源義経の奥州下りは、義父の一条長成（義経の母・常葉御前の再婚者）と三代秀衡の岳父・藤原基成（元陸奥守）との縁戚関係によるもので、実際の奥州下りは、義父である長成の役所の下僚（源頼政の義理の兄弟）に連られてのものとし、通説の金売り吉次の斡旋説を批判された。

さらに保立氏は、藤原基成を介した平泉藤原氏と平氏との関係などにも説きおよび、奥州に下向した義経は当初より衣川地域に居住し、藤原氏の単なる客人としてではなく、最初から平泉のなかで貴族社会の一員として処遇されたこ



とを指摘し、講演を閉じられた。

源義経の平泉下向を通説の金売り吉次同行説とはせず、基成が基盤とした京都の貴族社会における縁戚ネットワークのなかに位置づけ、しかも平泉藤原氏と平氏との接点たる基成その人を浮かび上がらせた点で実に新鮮なものがあつた。

ちなみに、保立・高橋・斉藤三氏とも、平泉・柳之御所遺跡の保存運動にご尽力された方々であり、その縁でお招きしたものであったという。



以上の報告と講演後のシンポジウムには入間田宣夫氏も参加され、衣川遺跡群の性格と発見の意義（二重堀と庭園の問題）、平泉（衣川）幕府の可能性、平氏の福原京に寺院が存在しない意味（逆に平泉に寺院が成立した意義）、三代秀衡の鎮守府將軍就任と平清盛の関係などが活発に議論され、衣川遺跡群の保存と学術調査への進展を一同で強く念願して閉会となった。

この衣川シンポジウム「日本史のなかの衣川遺跡群」の詳細は、本二〇〇七年五月刊行予定の『平泉・衣川と京・福原』（高志書院、二五〇〇円前後）において公表される予定である。なお、昨二〇〇六年十月刊行の『歴史評論』六七八号（校倉書房、七七〇円）では、「平泉・衣川・北奥の遺跡群と北方世界」として衣川遺跡群の特集号が組まれ、遺跡保存を全国的にアピールしたことを併せて紹介しておきたい。



遺跡保存を訴える中尊寺千田前貫首

本シンポジウムの実行委員会と開催団体の構成は次の通りである。

衣川シンポジウム実行委員会

実行委員長…入間田宣夫（東北芸術工科大学教授）

副委員長…佐々木秀康（元衣川村長）

三好京三（作家）

実行委員…伊藤博幸（奥州市埋蔵文化財センター所長）

大矢邦宣（盛岡大学教授）

菅野文夫（岩手大学教授）

工藤雅樹（東北歴史博物館館長）

熊谷常正（盛岡大学教授）

斉藤利男（弘前大学教授）

佐々木邦世（中尊寺仏教文化研究所所長）

千坂崑峰（北上川流域の歴史と文化を考える会会長）

七海雅人（東北学院大学助教授）

樋口知志（岩手大学助教授）

藤里明久（毛越寺執事長）

誉田慶信（岩手県立大学盛岡短期大学部教授）

八木光則（盛岡市教育委員会）

事務局長…柳原敏昭（東北大学助教授）

事務局…菅野成寛（中尊寺仏教文化研究所主任）

八重樫忠郎（平泉町教育委員会）

開催団体

主催…衣川シンポジウム実行委員会

共催…平泉文化研究会・岩手史学会・岩手考古学会・蝦

夷研究会・北上川流域の歴史と文化を考える会

後援…岩手県・岩手県教員委員会・一関市教育委員会・

奥州市教育委員会・平泉町教育委員会・財団法人

文化振興事業団埋蔵文化財センター・中尊寺・毛

越寺・NHK盛岡放送局・IBC岩手放送・テレ

ビ岩手・めんこいテレビ・岩手朝日テレビ・岩手

日報社・岩手日日新聞社・胆江日日新聞社・河北

新報社盛岡総局・朝日新聞盛岡総局・毎日新聞盛

岡支局・読売新聞盛岡支局

（中尊寺仏教文化研究所主任）

故宮博物院と花蓮の旅 報告

破石 澄元

【はじめに】

一 昨年の韓国（昌徳宮・仏国寺他）、昨年のカンボジア（アンコールワット他）につづいて今回は台湾訪問の機会をいただきました。二十五年ほど前、所用があつて二度ほど台湾を訪問しましたが、そのときの印象はまず食事が感動的においしかったように記憶しております。時季のせいもあつたのでしょうか、とにかく暑く、大汗をかいてあるきました。そしてちょっと埃っぽかつたようにも思います。通りを走る車は、みな暴走族かと思うような荒っぽい運転で、タクシーに乗っていても怖い思いをしたものです。その折には観光することは出来ませんでした。が、わずかに故宮博物院を見学しました。青銅器・書・画・陶磁器・玉・象牙細工など、全室をとにかく歩きました。そして緻密な工芸品に圧倒されるとともに、強烈な疲労感を覚えたもの

でした。今回はベテランの添乗員がついた団体旅行でしたので、気楽に楽しむことができました。

さて、四日間の日程ではありませんでしたが、平泉から成田空港まで往復ともバスを利用したこともあり、実質二日間の観光となりました。

【十一月十四日】

故宮博物院

初日は故宮博物院。朝九時過ぎからの見学でしたが、やはり入館者が多く、その中でも日本人観光客が多く見られました。現地ガイドの羅さんの案内で二時間コースのダイジェスト版で見えました。

「翠玉白菜」、清代の玉の工芸品。展示品の中では有名なもの一つで、やはりそのケースのところには人垣ができていました。白菜の青い葉のところに、キリギリスとイナゴが葉にしがみつくように彫り出されているということですが、混雑の中でこの二匹を確認することはできませんでした。羅さんの説明によれば、白菜は純潔を、キリギリスは子孫繁栄を象徴し、嫁入り道具としたものだということ



故宮博物院

とです。

「汝窯蓮花
式溫碗」は
北宋の青磁
で、淡い青
色に十枚の
蓮弁をかた
どった碗

で、細かいヒビがやわらかく美しい模様を作り出しています。平安末期に平泉に舶載された青磁もこのようなものだったでしょう。そのほか精巧な象牙細工の「雕象牙龍舟」など数多くの作品を、羅さんのダジャレ交じりの解説を聞きながら鑑賞させていただきました。

龍山寺

一七三七年に建立されたお寺で、手前から前殿・正殿・後殿という形になっています。前殿のところで長さ四〇センチくらい線の束をいただいて、順次線香を上げながら参拝するものようです。正殿には中国福建省泉州の龍

山寺から贈られたという観音様が祀られています。後殿にまわると何体かの道教の神像が祀られています。以前に聞いた話では、台湾では仏教寺院では正殿に仏像、後殿に道教の神像が祀られ、また道教の寺では正殿に神像、後殿に仏像が祀られているということです。その神像の端の方に、月下老人が祭られています。この神は縁結びの神様ということで、そこには「赤い糸」がおいであり、縁結びのお守りとしていただいくことができます(無料)。確かにいただいてきた人もいたようでした。

それぞれの像の前で線香を両手で捧げて、あるいは投地礼をして多くの地元の人たちが、真剣に祈りをささげていました。私たち観光客は、祈りの邪魔をってしまったのかも知れません。

中正記念堂

青い尖った屋根に白い大理石の外壁を持つ大きな建物。蒋介石の記念館。長い階段を上って二階に行くと大きな蒋介石の銅像があり、その前には二人の衛兵が立っています。一時間毎の正時に衛兵の交代があり、我々も丁度その時間

に立ち会いました。二階から正面の通路を見ると、その両側はきれいに手入れをされた庭が広がって、まさに緑の公園を演出していました。一階は蒋介石にかかわる資料館になっていてということでしたが、今回は見ないで、次ぎの忠烈祠に向かいました。

忠烈祠

台湾の歴史は、革命と戦いの歴史とも紹介されています。それは、日清戦争（一八九四〜一八九五）、辛亥革命（一九一一）を経て、中華民国（一九一一）の成立を起源としているようです。その二つの戦いの様子を描いたレリーフが山門に掲げられています。正面の大殿、左右の文烈士祠・武烈士祠には三十三万人の英霊が祀られています。大門の前と大殿の前にはやはり衛兵が直立していました。中正記念堂の衛兵の交代も見事でしたが、ここの交代は、さらに迫力を感じさせられました。毎正時になると、大門から大殿に向かって五人の儀仗兵が隊列を組んで行進します。百メートル余りもあろうかという石畳を、ガシャン、ガシャンと軍靴を鳴らしながら、そして四肢と言わず睫の先まで



忠 烈 祠

も緊張させながらの行進です。軍靴の音も見事なりズムをきざみ、また平地と階段で明ら

かにそのリズムが変わるのも見事でした。大殿正面で敬礼したあと、それまで任務に当たっていた二人の衛兵との交替の儀式をして、また、五人の隊列を組み大門へ下っていきます。この衛兵の人たちは、陸・海・空軍のエリートたちと言うことで、みな鍛え上げられた精悍な風貌をしていました。

士林夜市

台北最大の夜市、士林夜市に出かけました。夕食後だったため食べ物中心の屋台がならんでいるところを素通りして、衣類中心の店が並んでいる通りを歩きました。人通り

も多く、上野のアメ横に似た雰囲気でした。

【十一月十五日】

太魯閣溪谷

早朝、ホテルを出て空路花蓮へと飛びました。大理石の工場を見学した後、一路太魯閣溪谷へ。奥行き二〇キロメートルの溪谷を基本的には車窓から眺めて上っていきます。両側に高いところでは二百メートルも屹立している大理石の壁、カメラを構えてもとても全体が写せないほどの高さです。多くの犠牲を払って石を切り崩し道を通したと言うことですが、車がやっとすれ違えるほどの道幅です。ガー



タロコ溪谷

ドレールもない細い道ではありませんが、運転手は何の躊躇もなくハンドルをさばっています

した。バスの窓から直ぐ下は路肩も見えず、直に目もくらむ断崖絶壁が見え、恐怖感を感じます。要所ではバスを降り、散策しながら絶景に見とれました。燕子口という景勝地では溪谷の幅が極端に狭まっていて、川の流れも凄さを感じさせます。両側の山は保水力も無さそうで、雨が降ったらこの絶景も悪魔に豹変するのではと心配になります。太魯閣溪谷からの帰りに、アミ文化村というところで民俗舞踊を鑑賞しました。

観光の二日間は小雨交じりでした。しかし同行の皆様のお慮で楽しい台湾旅行ができました。二十五年前も今回も、私が出会った台湾の人は皆親切で、また食事はいつもおいしくて、ぜひまた行きたいと思います。今度是中国の歴史より、台湾の歴史。日本統治時代、とりわけ郷土の偉人後藤新平が活躍した頃の足跡を見たいと思います。

(中尊寺仏教文化研究所主任)

〔関山句囊〕

(平成十八年六月二十九日 於 中尊寺)

〔第四十五回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〕

(席題)

蝶おちる千本杉の奈落かな

(大会長賞)

・廣瀬直人選 特選 北上 菊地 敏子

芭蕉恋ひ来ては茅の輪をくぐりけり

(みちのく発行所賞)

特選 一戸 犬又百合子

竹落葉瑠璃光院は奥の奥

特選 花 卷 八百板順子

みちのくの夏仏心を呼ぶ無心

秀逸 八尾 塩谷 一房

辨慶の墓のあぢさみ手に弾む

秀逸 一関 平野 節子

どの鳥も金堂に寄る梅雨晴間

秀逸 八幡平 佐々木 一夫

大日堂裏の小藪の夏すみれ

秀逸 陸前高田 吉田ミチ子

旅を来てここよりは古都日傘閉づ (中尊寺賞首賞)

・小原啄葉選 特選 奥州 及川 梅子

涼しさに歩の向いてをり能舞台 (みちのく発行所賞)

特選 盛岡 平野 冴子

御佛のひかりを曳きて蟻急ぐ (岩手日報社賞)

特選 大崎 砂金 元子

月見坂よぎり何処へ蟻の道 (毛越寺賞主賞)

・佐治英子選 特選 北上 高橋 義昌

刈り草の匂へる僧とすれ違ふ (平泉観光協会賞)

特選 奥州 菅野 好子

茅葺の能楽堂や暮鳴ける (河北新報社賞)

特選 花巻 後藤 冴子

きつぱりと竹皮を脱ぐ中尊寺 (岩手県知事賞)

・戸塚時不知選 特選 奥州 伊藤弓流紀

芭蕉像前に二巻の落とし文(平泉文化会議所理事長賞)

特選 一戸 犬又百合子

解かずおく弁慶堂の落し文 (河北新報社賞)

特選 一関 鈴木きぬ絵

幾度も列車乗り継ぐ義経忌

秀逸 福島 今野 正昭

長者原跡真四角に麦の秋 (県議会議長賞)

・菅原多つを選 特選 花巻 関 園子

鏡の間とほりぬけたる梅雨の蝶 (平泉文化会議所賞)

特選 一関 砂金青鳥子

北天へ夏蝶放つ義経堂 (岩手日日新聞社賞)

特選 北上 高橋 義昌

滴れり束稲山も関山も

秀逸 一関 鈴木きぬ絵

一穢なき清衡の空沙羅咲けり

秀逸 奥州 梅森 サタ

関山の釣鐘草に余韻かな (平泉観光協会賞)

・小林輝子選 特選 宮城 小野寺涛青

光堂までたつぷりと青葉風 (中尊寺賞)

特選 山梨 廣瀬 町子

三衡の遺徳の森に野かんぞう (岩手日日新聞社賞)

特選 平泉 岩渕 洋子

翅たたみ一切空の梅雨の蝶 佳作 奥州 高橋 洋子

中尊寺僧の羽化してクールビズ (平泉町教育賞)

・小菅白藤選 特選 奥州 岩渕 正力

関山の何処より匂ふ栗の花 (毛越寺賞)

特選 平泉 南館廣太郎

蟻地獄無数経蔵沈みさう (平泉観光協会賞)

特選 花巻 中村 青路

(兼題)

光堂より山越しの紫木蓮

・廣瀬直人選 (天)

平泉 佐々木邦世

香煙を双手がこひに余花の寺

(地)

気仙沼 吉田 貞女

山国の星は大粒青葉木菟

(人)

日立 町井 寂石

鐘の音や西行桜咲くあたり

(秀逸)

花巻 中村 青路

金色堂裏の棚田の初蛙

(秀逸)

平泉 斉藤その女

みちのくの光鋤き込む春田打

(秀逸)

盛岡 小畑 柚流

径あるがままに歩いて花の山

・小原啄葉選 (天)

盛岡 久保田絹子

栄耀の跡かもしれない煙を打つ

(地)

一関 稲玉 宇平

麁枝や山に鴉の巣を残し

(人)

奥州 及川テツ子

秀衡が跡の棚田にさぎす鳴く

(秀逸)

一戸 犬股百合子

読みかけの本の重さよ目借時

・佐治英子選 (天)

陸前高田 吉田ミチ子

蕃持つものより売れて苗木市

(人)

香芝 杉本 艸舟

行春の風の音聴く中尊寺

(秀逸)

盛岡 船越たけし

行く春の大河にそそぐ衣川

・戸塚時不知選 (天)

盛岡 荒木那智子

千年を待ちたる亀の鳴きにけり

(地)

一関 鈴木きぬ絵

花散るや剥落すすむ摩崖佛

(人)

一関 小野寺 亨

義経のその後を知らず草茂る

(秀逸)

石岡 吉田飛龍子

春雪に濡れて草鞋の芭蕉像

(秀逸)

陸前高田 吉田ミチ子

落花急中尊寺馬車鈴鳴らす

・菅原多つを選 (天)

盛岡 三田地白畝

関山の影の昏れゆく代田かな

(人)

一関 小野寺 亨

ものの芽はもののふのこゑ平泉

(秀逸)

奥州 鈴木 利和

遺跡掘る霞の底にひらいづみ

・小林輝子選 (天)

一関 鈴木きぬ絵

関山の花に沈みし十八坊

(地)

平泉 斉藤その女

小淀みへ風の竿さす花筏

(人)

にかほ 須田喜代子

須弥壇の金の玄しや目借時

(秀逸)

横手 森屋 慶基

純白の蝶が来てゐる義経堂

・小菅白藤選 (天)

盛岡 平野 冴子

四阿の卓の焦げあと百千鳥

(地)

盛岡 谷藤 政子

駅弁に仕切りの多し啄木忌

(人)

北九州 松本 隆吉

花種蒔き心そこより離れざり

(秀逸)

仙台 佐藤未登里

児童生徒

平泉小学校

凜と咲けみんなでかざった菊まつり

特選 六年 菅原 菜美

ホタルまう命の光美しい

特選 六年 岩淵 貴法

能楽堂 笛の音色に春かおる

特選 六年 清水智香子

大杉のこだちふきぬくつむじ風

秀逸 六年 達谷窟豪侑

毛つう寺あやめの花にかたつむり

佳作 五年 石神 颯太

義経の最後見とりし大河かな

佳作 六年 三浦亜季穂

満天に炎燃えたつ大文字

佳作 六年 村岡 知江

寒い中延年の舞永遠と

佳作 六年 志羅山徹平

長島小学校

初夏の朝草木に光るしずくかな

特選 六年 岩淵 健児

夕ぐれの大空群れるとんぼかな

特選 六年 今野 友美

秋の夜虫は自然のオルゴール

特選 六年 千葉 悠太

あめのひはいろんないろのかさがさく

秀逸 二年 三浦 隆

せみの声ぞうき林にひびいてる

秀逸 五年 小野寺 陸

平泉中学校

夏の夜背すじがこおるものがたり

特選 一年 鈴木 佑

ふと見れば空満天の天の川

特選 二年 小野寺英里

清らかに流れる川の光る鮎

特選 三年 滝澤 啓介

「奥州路」

いなずまの紫立つや光り堂

高館に登ればすく返るあきつかな

『俳句研究』十一月号 宇都宮 五島 高資

(俳句スクエア)

月のまへ無量光院跡涼し

『俳句研究』十一月号 盛岡 ふじむらまり

(フリー)

〈実作の俳枕〉平泉

夏草や根の先々のされこうべ觸さわ髅むすぶ

雪浄土雀も仏なりしかな

『俳句研究』十二月号 一関 照井 翠

(寒雷)

奥六郡

一望の奥六郡や稲の花

金箔を打ち延ばすと鳥渡る

光堂もまた蝸の薄羽なり

『俳句』十一月号 塩竈 渡辺誠一郎

「小熊座」

祈りの都

ががよ輝へる毒茸あり中尊寺

清衡は今も祈れり露の玉

邯鄲や祈りの都うち建つる

『俳句』十一月号 一関 照井 翠

(寒雷)

哭まつり

哭まつり果つ花吹雪花ふぶき

『寒雷』九月号 一関 鈴木きぬ絵

平泉

冷房のつづきのやうな馭に着く

旧道は芭蕉會良みち濃紫陽花

梅雨寒の旧鞠堂の中にをり

梅雨茸ほこりほこりと毛越寺

窓開けて瀬音を入るる合歡の花

『寒雷』十月号 上越 中村たかし

竹生島奉納五月の能舞台

義経の東下りの麦青し

『みちのく』八月号 名取 後藤 輝子

弁慶堂空蟬力まだ抜かず

『みちのく』九月号 盛岡 草花 一泉

闇に浮く判官館や大文字

岩手白山句会(青児選) 特選 吉田 善子

関山の紅葉奥なる能の笛

笛激し鬼女現はるや夕紅葉

『みちのく』二月号 平泉 斎藤その女

楸邨碑訪ね高きに登りけり

『みちのく』二月号 一関 小野寺 亨

春愁の歩のつき当る衣川

『みちのく』三月号 平泉 斎藤その女

西行の句碑の山越え悟逸忌へ

『みちのく』三月号 一関 村上 達男

鳥帰る小手をかざして芭蕉像

『みちのく』六月号 平泉 斎藤その女

実桜のひとつありけり西行碑

弁慶像竹の秋風渡りけり

『みちのく』八月号 奥州 服部 常子

霜のこゑ

金箔のこぼるるらしき霜のこゑ

金色堂出でしが舞へりあきあかね

『草笛』二月号 盛岡 戸塚時不知

すさまじや黙して語る楸邨碑

『草笛』二月号 一関 佐藤娑千子

雪吊りの松揃ひ立つ中尊寺

『草笛』四月号 一関 平野 節子

雪しまく骨寺跡といふ辺り

『草笛』四月号 一関 佐藤 曲水

三衡をさんづけで呼び春講座

『草笛』 六月号 奥州 高橋 清人

月見坂驟雨は仏の打ち水と

『草笛』 十月号 奥州 小沢 優子

弁慶の討たれしところ草茂る

「読売俳壇」 七月 愛知県 稲垣 長

〔関山歌籠〕

(平成十八年四月二十九日 於 中尊寺)

〈第二十七回西行祭短歌大会〉

歌う顔みんな少女になつてゐる高齢者らの

コーラス教室 (中尊寺賞首賞)

一 関 高橋 英雄

春耕のひたかみ平野雪どけの水豊かななる一万

町歩 (平泉町長賞)

奥州 阿部 ヒサ

ごんごんと入り陽の沈む腰越に義経詫状ひた

すら詫びる

(平泉町観光協会長賞) 鎌倉 加納亜津代

捨てられし雪が水路を塞ぎみて溢るる水の色

かはりゆく (岩手日報社賞)

矢巾 菅原 勝利

戦争で死にたる兄の年金に老後をみられ父身

罷りぬ (IBC岩手放送賞)

陸前高田 金野 要

孤独なる魚飼ふごとき回送車夜半ほの青くと

もしつつゆく (岩手日日新聞社賞)

仙台 水木 彩

佳作

戦なく生きていけぬか闘ふは業果か千草空に

飛び散る 一 関 小岩 三男

漁師らが苗木を植ゑし山よりの水みつるうみ

牡蠣の海なり 盛岡 高嶋カヅ子

しわぶきの一つ聞こえて亡き夫と同じ声して

子の帰り来る 奥州 千田エキ子

わが村にモダンな空家がまた増へぬ都会より
来し人らの逝きて

花巻 高橋 緑花

大寒の朝吊るしたる大根がゆるむ日和にしき
りに匂ふ

北上 斉藤 博彰

徘徊の父の背中や野に山にさくらさくらの十
七回忌

一 関 佐藤 峰子

我が購ひし会津みやげの手鏡は母の形見とな
りて戻り来

奥州 千田 庄子

齢かさね変はりゆく世を見しわれか樹々は芽
吹きて季移りゆく

北上 八重樫和子

「コスモス一関」短歌会より

(平成十八年十二月十日)

関山の茜の空につばくろの群れて渦巻くごと
き夕ぐれ
関山の東なだりに咲き満つる堅香子見むと月
見坂登る

小野寺政賢

雲みぞれふる月見坂行き拝したりろうそく点る弁慶
堂を

斉藤のり子

御仏のいます静けき中尊寺白露の雨もやがて
晴れたり

佐々木健司

東京をしぼし離るる受験子と共に歩みぬ浄土
庭園

庭園

中尊寺に絵馬を買ひたる受験の子胸ポケット
に入れてなでをり

佐藤美恵子

休日は能を觀賞せしと言ひ寡婦のヘルパー明
るく励む

渋谷 信子

経運ぶ人と馬とが憩じえづかひしか慈恵塚の辺にもみ
じ降り積む

高金 啓子

満開の桜の困む釣鐘を撞きてみたかり関山の
夕

千葉 喜恵

〔陸奥教区宗務所報〕 第二部 中尊寺関係

平成十八年一月一日～平成十八年十一月三十日

□ 平成十八年

三月十二日

布教養成所研修会

於毛越寺

「保護司の保護活動について」

講師 千田孝信師

「少年による非行の防止と僧侶として出来ること」

講師 千葉亮賢師

山内より十三名参加

五月十三日

一 布教師会辞令交付式並びに総会・研修会

「こ布教のこころ」

於ホテル武蔵坊

講師 多田孝文師

山内より十二名参加

六月二十日・二十一日

天台宗保護司会民生児童委員会研修会・総会並び

に慶讃法要

於比叡山延暦寺

地藏院 佐々木秀圓出席

六月二十四日

開宗千二百年総登山陸奥教区法要

於比叡山延暦寺

山内より三名・檀信徒二十二名参加

六月二十九日

人權啓発公開講座

於宗務庁

法泉院法嗣

三浦章興出席

十月十五日

陸奥教区法要

於弘前薬王院

山内より四名参加

十月二十一日

天台宗一斉托鉢

於藤田寺(宮城県角田市)

山内より七名参加

☆浄財十七万二千元は角田市社会福祉協議

会に寄託した

(翌二十二日は名取市近辺の寺社を参詣し研修)



全国一斉托鉢 陸奥教区 於 角田市藤田寺 平成18年10月21日



十一月二十五〜二十六日

天台陸奥教区仏教青年会 於中尊寺

開宗二百年記念研修会

「光明供の教義について」

講師 一島正真師 山内より十三名参加

□ 役職任免

天台宗布教師

(平成十八年四月一日)

真珠院副住職 菅野澄円

大長寿院法嗣 菅原光聰

利生院法嗣 菅野宏紹

地藏院法嗣 佐々木秀厚

法泉院法嗣 三浦章興

財団法人天台宗教学財団評議員

(平成十八年六月一日)

陸奥教区宗務所長 菅原光中

中央所得会調査委員

(平成十八年六月一日)

陸奥教区宗務所長 菅原光中

陸奥教区布教師養成所所長

(平成十八年十月一日)

中尊寺貫首 山田俊和

中央教師選考会委員

(平成十八年十月十九日)

陸奥教区宗務所長 菅原光中

□ 住職任命・解任

任命 (平成十八年十月一日)

中尊寺住職 山田俊和

金色院兼務住職 山田俊和

長楽寺兼務住職 佐々木慎有

解任 (同年九月三十日)

中尊寺住職 千田孝信

金色院兼務住職 千田孝信

□ 褒賞 (平成十八年十月二十三日)

住職五十年勤続功労表彰 千葉快恩

住職三十年勤続功労表彰 佐々木邦世

住職三十年勤続功労表彰 破石澄元

住職三十年勤続功労表彰 菅野成寛

住職三十年勤続功労表彰 積尊院

□ 教師補任 (平成十八年四月二十一日)

權大僧都 地蔵院法嗣 佐々木秀厚

(同年七月十八日) 權律師 破石晋照

權律師 金剛院法嗣 破石晋照

(同年九月二十七日) 權律師 大徳院法嗣 佐々木顕延

權律師 大徳院法嗣 佐々木顕延

□ 経歴行階（平成十八年六月二十一日）

四度加行 金剛院法嗣 破石晋照

（同年六月二十三日）

比叡山行院 金剛院法嗣 破石晋照

（平成十八年十月二十七日）

円頓大戒 願成就院法嗣 三浦智信

□ 称号授与（平成十八年十一月十日）

栃木教区 観音寺

名誉住職 千田孝信

☆ パキスタン沖地震復旧支援募金 中尊寺

十万四千八百七十円 一隅を照らす運動総本部へ寄託

☆ ジャワ島地震復旧支援募金 中尊寺

百二万四百五十九円 日本ユニセフ協会へ寄託



6月4日にジャワ島地震復旧支援の托鉢を中尊寺山内で実施

御神事能番組

五月四日

法楽
古式三番

開口 三浦章興
祝詞 千葉快俊
若女 菅野澄円
老女 菅原光聴

大鼓 菅野宏紹
小鼓 佐々木律秀
笛 佐々木秀厚
後見 清水広元

能
竹生島

天女 佐々木五大
ツレ 佐々木律秀
後シテ 北嶺澄照
前シテ 佐々木邦世

ワキ 菅野成寛
ツレ 菅野康純
菅原光聴

間 菅野澄円

太鼓 三浦章興
大鼓 佐々木長生
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元

古式三番

開口 三浦章興

後見 菅野裕康
佐々木秀厚

五月五日

狂言

附子

太郎冠者 菅野靖純
次郎冠者 菅野裕康

主破 石澄元

能

秀衡

義経 佐々木五大
後シテ 佐々木邦世
前シテ 北嶺澄照

ワキ 菅野康純
ツレ 菅野成寛
菅野厚

間 佐々木慎有

太鼓 菅野宏紹
大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
笛 菅野澄円

秋の藤原まつり 中尊寺能 十一月三日

能

紅葉狩

ツレ 佐々木五大
ツレ 佐々木律秀
後シテ 北嶺 澄照
前シテ 佐々木 邦世

ワキ 菅原 光聰
ツレ 菅野 康純
ツレ 佐々木 秀厚
ツレ 菅野 宏紹

太鼓 三浦 章興
大鼓 千葉 快俊
小鼓 佐々木 仁秀
笛 清水 広元

間供 女 菅野 澄円
男 山八幡の末社 佐々木 慎宥



能「秀衡」(平成18年5月5日)

執務日誌抄

平成十七年十二月一日～

十八年十一月三十日

平成十七年

◇十二月

- 一 日 月次大般若(本堂)
町観光協会役員会(総務仁秀)
- 四 日 山内薬樹王院法事(本堂)
- 五 日 総務部澄円、町観光キヤラ
バン出張(七日、大阪・名古屋)。
総務仁秀、仙台へ出張(ゆつ
たり・ぬくもり岩手の旅観光誘致説
明会 於仙台国際H)。
平泉菊花会表彰式・反省会
(管財澄照・章興 於泉そば屋)。

七 日 薬師会(讃衡蔵)

仏教伝道教会高島様来山(千田
貫首応接)。

秋期一山会議(大広間)

八 日 ユニバーサルデザイン(以
下、UDと略)観光地支援プロ
グラム検討会(管財部光聴 町
保健C)。

十 日 京博「最澄と天台の国宝」出
陳宝物還蔵(管財澄照立会)。

十一日 職員研修旅行(十六日、タイ
カンボジア方面、第二班 澄順・邦
世仁秀・宏紹同行 一行十六名)。

十三日 町観光協役員会(総務部快俊)。

千田貫首、インタビュー
(世界遺産 共同通信社)。

初詣警備会議(法務広元・総務
部快俊・管財部章興 於西行苑)。

十四日 弥陀会(本堂)

十六日 参拝慎宥・管財澄照・光聴、
出張(東京 小池櫻井法律事務所)

十七日 白山会(本堂)

十八日 お経を読む会(常住院)

二十日 節分講中総会(執事長、法務他
於泉橋庵)。

二十三日 千田貫首、東京出向(孝道教
団開頭七十周年・岡野正貫統理「傘
寿」慶祝 Hパシフィック東京)。

二十四日 文殊会(経蔵)

千田貫首・執事長、日光へ
出向(五山会 於日光)。

奥福寺様注連縄奉納(本堂)。

二十五日 紺紙金銀字経一巻、寺に還
蔵なる。

二十六日 町観光推進実行委員会(総務
仁秀・快俊 於こまつ寿可)。

二十八日 恒例御供餅つき
三十一日 午後三時 一山総礼

平成十八年

◇一月

一日 ○時 新年祈禱護摩供修行
(本堂)

- 七時 東山町へ若水送りへ着
- 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
- 十時半 総礼
- 修正会** 釈迦供(本堂)
- 結衆、冬堂籠り(5日、開山堂)
- 二 日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
- 修正会** 薬師供(峯薬師、讚衡藏)
- 十六時 謡初め(広間)
- 三 日 九時半 正月祈禱護摩(本堂)
- 修正会** 山王供(山王堂)
- 十一時 元三会 慈恵供(本堂)
- 四 日 **修正会** 熊野供(瑠璃光院薬師堂)
- 五 日 **修正会** 文殊供(経蔵)
- 大般若会(利生院弁財天堂)
- 梵焼供(結衆勤、開山堂)
- 本日より寒修行(行者五名、町内托鉢)。
- 六 日 **修正会** 釈迦供・月山供(釈迦堂)

- 七 日 **修正会** 白山十一面供(本堂)
- 大般若会(本堂)
- 十四時 **修正会** 弥陀供(金色堂)
- 八 日 **修正会** 薬師供(旧開伽堂薬師、讚衡藏) 一字金輪仏・千手観音法楽
- 修正会結願**
- 十三時半 恒例「金盃抜き」
- 十一日 町観光協会臨時役員会(総務部快俊)。
- 十二日 JTB九州エージェント三十名来山(総務対応)。
- 十四日 **慈覚会**(御影供 本堂)
- お経を読む会(千田貫首)
- 二十二日 **文化財防火訓練**



- 二十三日 念法真教総長桶屋師来山(千田貫首応接)。
- 二十四日 町観光協会役員会(総務仁秀・快俊 於平泉レスト)。
- 二十五日 千田貫首、滋賀へ出向(2十六日、開宗千二百年慶讃大法会 祥当法要 於延暦寺)。
- ◇二月
- 一 日 月次大般若(本堂)
- 二 日 毛越寺南洞師来寺(藤原基衡公八百五十年御遠忌大法要について / 以下、御遠忌大法要と略 総務仁秀応接)。
- 三 日 恒例大節分会(関取朝赤龍招く。歳男歳女八十二名、町内園児が豆を撒く)。
- 五 日 **寒修行満行**
- 総務部快俊、盛岡出張(通訳ガイド養成講座成果発表会 エスポワールいわて)。
- 六 日 町文化財センター斎藤邦雄所

長・及川司氏他来寺(史跡管理
計画説明 執事長・管財澄照)。

七日 宗務庁社会課長福島師来山(東
北各教区雪害見舞 宗務 応援)。

八日 一関警察官友の会臨時役員
会(執事長 於一関古戦場)。

九日 宗務慎有・広元、東京出張
(千二百年事務局総登山打合せ会
於東京教区宗務所)。

十日 景觀光協会主催韓国旅行エー
ジエント十四名来山。

平泉芭蕉祭俳句大会幹事会
(参務邦世 於役場)。

十一日 千田貫首、講話(天台陸奥仏教
青年会三十周年記念 於毛越寺)。

十二日 北上川リバーカルチャーアソシ
エーション(以下、北上川RCAと
略)主催「北上川流域の未来
への展望」パネルディスカ
ッション(パネラー千田貫首
於ペリーノH)。

十三日 町観光審議会(執事長 役場)。

平泉郷土館館長大矢氏来山(執
事長応援)。

十四日 東京芸大清水真一教授ほか
三名来山(国宝・重要文化財「建
造物」に係る保存活用計画の策定
視察 管財澄照・光聰案内)。

涅槃会御逮夜(本堂)

十五日 涅槃会(本堂)

佐々木秀康衣川村長ほか来
山(退任挨拶 貫首応援)。

お経を読む会(利生院)

町観光協会役員会(総務仁秀)。

千田貫首、京都へ出向(十七
日、「山田座主を偲ぶ会」於ウ
エステイン都H)。

東北ツアーズエージエント
三十三名来山(総務対応)。

毛越寺南洞師他来寺(御遠忌大
法要打合せ 総務・法務 応援)。

二十二日 西行祭短歌大会実行委員会
(総務仁秀他 於一関威H)。

平泉観光協会主催「もてなしの

心」向上研修会(職員蜂谷勝千
葉淳・高橋郁子・小野悠子 於げい
びレスト)。

二十三日 千田貫首、法話(女川町文化財
保護委員会十七名 広問)。

二十四日 千田貫首、日光へ出向(二
十八日)。

町観光協会定時総会(執事
長総務仁秀・快俊 於商工会館)。

二十五日 能勝方故和泉昭太郎師葬儀
(康純参列 於新宿諦聴寺)。

二十八日 町上下水道事業運営協議会
(管財部章典 於役場)。

UD観光推進会議(管財部光
聰 於町保健C)。

「国際人材活用事業」プロジ
ェクト委員会(総務仁秀 於商
工会館)。

◇三月

一日 月次大般若(本堂)

二日 文化観光施設整備運営委・

芭蕉祭監査(執事長 於役場)。

町キヤラバン打合せ(総務部
快俊・澄円 於役場)。

年輪年代法調査報告会(奈良
文化財研究所光谷拓実氏 広間)。

三 日 年輪年代法調査結果記者発

表(奈文研光谷氏・窪寺茂氏、仏文
研邦世、管財 大広間)。

千田貫首・執事長、京都へ
出向(四日、五山会懇談会 於
京都センチュリーH)。

六 日 東博加島勝氏来山(最澄と天

台の国宝)資料借受け 管財澄照・
光聴立会。

菊まつり協賛会役員会(執事
長・管財 広間)。

七 日 町観光協会役員会(執事長)。

芭蕉祭俳句大会実行委員会
(参務邦世・総務部快俊 於役場)。

十二日 布教師養成講座(於毛越寺)。

十五日 執事長、京都出張(三千院小
堀門主出版記念 於宝ヶ池プリン

スH)。

日光交通安全協会一行来山
(千田貫首案内)。

防災講習会(総務部快俊・澄円・
管財部光聴・章興 於一関両警消防
本部)。

十七日 町観光協会役員会(執事長)。

源義経公東下り行列保存会
総会(総務部快俊 於良栄寿司)。

十八日 山内観音院法事(本堂)

十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂)
お経を読む会(地藏院)

二十一日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
総代・世話人会総会(貫首・執
事長・法務広元他 平泉レスト)。

二十二日 本坊境内施設整備検討委員
会(執事長・内局、委員ノ邦世・成
寛 応援)。

二十三日 御遠忌大法要打合せ(両山総
務法務 応援)。

二十四日 開山会(護摩供 開山堂)。

幼平泉観光協会設立総会執

事長・総務仁秀・快俊 於商工会)

二十八日 通訳・ガイドの会と中尊寺
職員意見交換会(広間)。

二十九日 古都ひらいずみガイドの会
総会(総務部快俊 於商工会)。

平泉東友会総会・講演会(参
拝慎宥 於平泉レスト)。

◇四月 一日 月次大般若(本堂)

参拝慎宥、奥州市出張(丁T
B奥州営業所開設披露会)。

二 日 天台陸奥仏教青年会托鉢
(於境内)。仏青総会(於毛越寺)。

三 日 長島時子氏来山(大池ハスの株
分け 管財澄照・章興)。

北上青年経営者会議事務局
来山(九月四日、北上で薪能上演

の件 参務邦世 応援)。

六 日 藤原まつり「源義経公東下
り行列」主要役者記者発表

(総務部快俊 於役場)。

讚衡藏運宮委員会(委員長秀

圓。管財澄照他 讚衡藏会議室)

八日 仏生会(本堂)

お経を読む会(大長寿院)

九日 陸奥教区寺院婦人会岩手支

部総会(執事長 於毛越寺)。

十日 御遠忌大法要打合(総務仁秀・

快俊・法務広元・秀厚 於毛越寺)。

四寺廻廊会議(執事長・総務仁

秀・澄門・法務広元 於毛越寺)。

十一日 観光協合理事会(執事長)。

千田貫首、日光へ出向。

神事能申合せ(大広間)

十四日 菊まつり協賛会総会(執事

長・管財 大広間)。

十五日 恒例花まつり)

十六日 藤原基衡公八百五十年御遠

忌大法要(於毛越寺・中尊寺)。

十七日 観音講(山内観音院)

十八日 藤原まつり警備会議(管財澄

照・章興・総務部快俊 於西行苑)。

十九日 「最澄と天台の国宝」参観

(高門・長生・康純・澄照 於東京国

立博物館)。

二十一日 世界遺産講演会(千田貫首・執

事長他 於日武蔵坊)。

二十二日 陸奥教区寺院婦人会総会

(執事長 於日武蔵坊)。

二十三日 一山互助会総会(広間)。

二十四日 衣関桜友会清掃奉仕・観桜

会(総務仁秀・管財澄照・章興)。

世界遺産推進協議会総会

(管財澄照 於役場)。



基衡公850年御遠忌大法要

弁慶力餅競技保存会総会

(総務部快俊 於泉そば屋)。

二十五日 県教委生涯学習文化課総括課長齋

藤憲一郎氏他二名来山(執事

長挨拶・管財澄照案内)。

一 関警察官友の会役員会

(執事長 於一関警察署)。

千田貫首インタビュー(朝日

新聞一関支局加賀記者 応接)。

神事能申合せ(能舞台)

二十六日 藤原まつり担当者打合せ会

議(総務部快俊 於役場)。

二十七日 県総務部長川窪俊広氏・総務室

長瀬川純氏他来山(執事長・総

務仁秀 応接)。

陸奥教区議会・一隅理事会

(大広間)。

二十九日 西行法師追善法要(本堂)

第二十七回西行祭短歌大会

(講師三枝昂之氏「今日に生

きる西行の世界」)



西行祭短歌大会

◇五月

- 一 日 春の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要、稚児行列、常の如し。
郷土芸能奉演(平泉赤伏神楽)
- 二 日 開山護摩供(開山堂)
東下り行列レセプション
(総務仁秀・快俊 於H武蔵坊)。
郷土芸能奉演(二関市野々神楽)
- 三 日 源義経公東下り行列(義経公役 俳優賀集利樹)
郷土芸能奉演(衣川川西劍舞)
- 四 日 古美式三番

- 五日 古美式三番
狂言「附子」
神事能「秀衡」
郷土芸能奉演(達谷窟毘沙門子供神楽、江刺行山流角懸鹿舞)
弁慶力餅競技保存会反省会(総務部快俊 於滝沢魚店)。
- 六 日 山王講(山王堂)
- 七 日 故小幡哲氏(西行祭短歌大会実行委員会役員)葬儀(総務仁秀・快俊参列 於祥雲寺)。
- 九 日 総務仁秀、NHK盛岡放送局へ出張。
- 十日 NHK盛岡放送局長安部道氏・NHK仙台放送局広報事業部長・県教委世界遺産担当課長・観光経済交流課総括課長他四名来山(世界遺産展覧会の件 執事長・総務仁秀、

- 管財澄照・光聴 広間)。
郡市仏教会総会(法務部秀厚 於あついで屋)。
- 十二日 法務広元・総務部澄円、立石寺へ出張(四寺廻廊事務局会議)。
- 十三日 布教師研修会(千田貫首・執事長他出席 於H武蔵坊)。
- 十五日 文化財建造物保存技術協会武藤正幸氏来山(経蔵・旧覆堂の屋根の調査 管財部光聴立会)。
- 十七日 照井堰法要打合せ(法務 於毛越寺)。
平泉菊花会総会(管財澄照・章



興 於泉そば屋。

十九日 総務仁秀、仙台へ出張(了R
仙台支社訪問)。

栃木県博千田孝明氏来山(貫
首・執事長・総務仁秀・管財澄照)。

二十日 テレビ岩手「元氣一番生テレ
ビ」中継(千田貫首出演)。

仙台青葉能(貫首 於東北電力
ホール)。

二十一日 川嶋印刷会長 故菊地たけ氏
火葬(執事長参列 於釣山斎苑)。

貫首・参務光中、和賀へ出
向(岩沢地区交流会 於公民館)。

お経を読む会(真珠院)
二十二日 江刺勝軍寺様来山(貫首応接)。

二十三日 総務部澄円、四寺廻廊キャ
ラバン(八戸・盛岡方面)。

東博「天台の国宝」出陳(宝物
還蔵(管財澄照・光聴立会))。

平泉商工会青年部通常総会
(総務部快俊 於商工会館)。

二十四日 町観光推進実行委員会総会

(執事長・総務部快俊・澄円 役場)。

管財部光聴、仙台へ出張(N
HK世界遺産展企画委員会)。

松井建設会長松井角平氏来山
(貫首応接)。

二十五日 群馬遍照寺長谷川廣順師他檀
家四十名団参(貫首法話案内)。

宇都宮アート&スポーツ専
門学校職員三十五名来山
(貫首法話 本堂)。

讚衡蔵運営委員会。
平泉商工会通常総会(執事長
於商工会館)。

二十六日 共同通信社(各地方新聞編集局
長二十名来山(参務光中案内))。

一関警察官友の会総会(執事
長 於豊隆会館)。

二十七日 参務邦世、東京へ出張(佐渡
ヶ嶽襲名披露 於Hイースト21東
京)。

二十八日 元国連事務次長明石康様ほか
五名来山(千田貫首案内)。

二十九日 千田貫首、京都へ出向(三
十一日、三寺院御儀法講)。

三十日 参務邦世・総務部快俊、東京
へ出張(大河ドラマ「義経」放映御
礼他 毛越寺執事長・平泉観光協会
長・町観光課長他同行)。

三十一日 町観光キャラバン打合せ
(総務部快俊 於観光協会)。

◇六月

一日 月次大般若(本堂)
北上川RCA企画委員会
(参務邦世 於あいばーと)。

二日 県観光協会主催教育旅行誘致
宣伝部会総会(総務部快俊 於
いわて県民情報交流センター)。

三日 足利市阿部税氏来山(桜樹奉納
の件 千田貫首・総務仁秀・管財部
章興 応接)。

川嶋印刷会長 故菊地たけ氏
葬儀(執事長・常住院・管財澄照
於一関文化C)。

陸奥教区第二部檀信徒総会
(教区所長光中・広元 於毛越寺)。

四日 伝教会御影供(本堂)

五日 平泉をきれいにする会監
査・総会(管財部章典 於役場)。

八日 東日本宗務所長会(教区所長
光中・副所長澄順・慎有・広元・快俊
於秋保温泉H左廻)。

UD検討会議(管財部光聰 於
保健C)。

九日 「平泉の文化遺産」専門家
国際会議ウエルカムパーテ
ィー(貫首・澄照 於Hペリー)。
際会議一行来山(千田貫首案
内)。

町観光キヤラバン(北海道方
面)打合せ(快俊・澄円 於役場)。
「平泉の文化遺産」専門家
国際会議地元歓迎会(総務仁秀・
管財澄照 於平泉郷土館)。

十日 貫首・執事長、教区所長光中、

仁秀・宏紹、石卷出向(東雲
寺前住海秀師五十回忌法要)。

喜桜会連合発表会(十一日、
能舞台)。

十一日 法華経一日頓写経会(本堂)

十二日 芭蕉俳句大会事務会議(参務
邦世)。

群馬県下仁田民生・児童委員
協議会四十名来山(永寿寺・大
河原康俊様同行 参務光中案内)。

文化財保存計画協会津村泰範氏
他二名来山(国宝重文建造物保
存管理計画策定調査 13日 管
財澄照立念)。

十三日 千田貫首・執事長・邦世・慎
有・広元・章典・澄円・立石
寺出向(四寺廻廊法要)。

十四日 貫首・康純、江刺勝軍寺へ
出向。

十五日 照井堰法要(地藏院・大長寿院・
大徳院・積善院・観音院・秀厚 於毛
越寺)。

十六日 管財部光聰、仙台出張NHK
世界遺産展企画検討委員会。

十七日 文化財愛護少年団結団式・
清掃奉仕。



平泉小学校落成式(総務仁秀
於同体育館)。

十九日 ウエーサ力式典(法務広元秀
厚・章典・律秀 於達合西光寺)。
岩手県防犯協会連合会総会
(管財部章典 於一関警察署)。

二十日 自在房蓮光忌法要(本堂)

芭蕉祭俳句大会打合(法務広
元・総務部快俊 於応接)。

二十一日 観光協会理事会(執事長)。

二十二日 文化庁記念物課長岩本健吾氏

来山（貫首挨拶・管財澄照案内）。

平泉をきれいにする会観光

道路周辺清掃（管財部章興他）。

二十三日 比叡山総登山（二十五日教区

所長光中・法務広元）。

NHK盛岡放送局長仲元正明氏

来山（就任挨拶 貫首応接）。

二十四日 衣川シンポジウム「日本史のな

かの衣川遺跡群」（千田貫首・

執事長他 於サンH衣川荘）。

世界遺産塾講座一行来山

（管財澄照案内 本堂・かんざん亭）。

二十六日 千田貫首インタビュー（岩

手日報）関支社阿部氏）。

町景観まちづくり会議（管財

澄照 於役場）。

北上川RCA理事会・総会

（参務邦世 於Hペリー）。

二十八日 浄土宗京都教区教化団様四

十五名団参（参務光中挨拶 本

堂・阿波之介舍利塚墓参）。

曹洞宗横浜緑区大林寺様九

名団参（参務邦世案内）。

二十九日 第四十五回平泉芭蕉祭全国俳

句大会（講演・廣瀬直人氏・俳句遠

近）大広問



一山協議会（広問）

三十日 東北仏青総会（七月一日、長

生康純・宏紹・秀厚・章興・澄円 於

山形）。

平泉水かけ御輿警備会議

（管財澄照 於平泉商工会）。

◇七月

一日 月次大般若（本堂）

三日 総務部快俊、北海道へ出張

（八日、修学旅行誘客キャラバン

函館・小樽・札幌方面）。

五日 町文化財C齋藤邦雄所長来山

（国宝・重文建造物保存管理計画説

明 執事長・管財澄照）。

七日 讚衡蔵運営委員会。

ドナルド・キーン氏来山千

田貫首挨拶 参務邦世案内 茶室）。

東北新聞五社会長・社長十

名来山千田貫首挨拶・参務邦世

案内 茶室）。

八日 管財部章興、山形へ出張（

九日、消防団第五分団研修旅行

於飛鳥方面）。

九日 如法写経十種供養会（頓写法

華経奉納式）。

故鈴木清紀氏（平泉町長）火葬

（執事長参列 於釣山斎苑）。

群馬富岡甘楽危険物安全協

二十名来山(管財澄照案内)。
臨時一山會議(大広間)

十三日 観光協合理事会(執事長)。

十五日 故鈴木清紀氏(平泉町長葬儀
千田貫首・執事長・地藏院・大長寿
院・内乘院・積善院・葉樹王院参列
於平泉体育館)。

十六日 一山協議会(広間)。

十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)

二十二日 ウォーキングフェスタIN
平泉運営委員会(総務部快俊
於役場)。

貫首、熱海へ出向(新成会懇
親会 於熱海市山木旅館)。

二十二日 関東自動車内田会長・トヨ

タホーム清水会長他十五名
来山(総務仁秀挨拶・宏紹案内)。

二十四日 貯水槽清掃(管財部)。

二十六日 大文字まつり警備会議(管財
部章典 於西行苑)。

二十七日 芭蕉祭反省会(参務邦世)。

三十一日 執事長・地藏院・大長寿院・

円乘院・快俊、東京へ出張
(八月一日、山田俊和師へ中尊寺
貫首就任の正式依頼 於最勝寺)。
セイコーインスツル(株)小野寺氏
他三名来山(総務仁秀 応接)。

◇八月

一日 月次大般若(本堂)

貫首、日光ご自坊へ(十三
日)。

大阪私立学校長合同研修会
四十名来山(参務邦世法話)。

二日 執事長、インタビュー(し
んぶん赤旗)。

三日 AED(自動体外式除細動器)を
用いた救急蘇生法説明会

(消防平泉分署 広間)。

四日 十五時半、**平和の鐘**打鐘。

五日 寿都中学校岡村先生来寺
(坐禅打合せ 法務)。

六日 衣関桜友会清掃奉仕(管財
開山堂付近)。

七日 結衆、夏安居(堂籠り 十一
日、開山堂)

九日 平泉をきれいにする会「ゴ
ミ持ち帰り運動」実施(管財
部章典 於平泉前沢IC前広場)。

十三日 能面「翁」奉納(天津市 佐々木
幸子様 本堂)。

十四日 第三十回中尊寺薪金

半能「難波」(佐々木宗生師)

狂言「貫智」(野村万作師)

能「小鍛冶」(佐々木多門師)

十五日 町成人式(総務仁秀 於郷土館)。

十六日 第四十二回平泉大文字まつり
先祖代々追善法要(町内寺院
於北上川館裏河川敷)。

十八日 貫首、松島へ出向(瑞巖寺五
大堂御開帳法要 於五大堂)。

十九日 瑞巖寺五大堂御開帳参拝
(常住院・法泉院・積善院・釈尊院・瑠
璃光院・宏紹・光聴・章典・快俊)。

二十日 瑞巖寺五大堂御開帳参拝
(地藏院・真珠院・円乘院・長生・観音

院 澄円・律秀)。

二十一日 執事長、本山へ出向(二十
二日、戸津説法随喜)。

長島時子氏来山(中尊寺ハス・
大池ハス状況視察 管財)。

中尊寺坂下遺跡見学(千田貫
首他)。

二十三日 大施餓鬼会御逮夜(本堂)

二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)

二十五日 管財澄照・光聴・仏文研澄二元、
仙台へ出張(NHK世界遺産展
企画検討委員会)。

文化遺産広域連携プロジェクト
クト(仙台市・気仙沼市・松島町・平
泉町)十三名来山(総務部快俊
かんさん亭)。

総務部快俊、紫波へ出向(陣
ヶ岡鎮座蜂神社大祭法要)。

北上川RCA主催講演会(参務邦
世 於あいぼーと)。

大正大学博物館実習(九月
一日、学生十二名、仏文研邦世・管

財澄照・光聴 讃衡蔵・かんさん亭)。

二十九日 加納亨一氏来山(天台宗災害補
償制度 総務仁秀応接)。

三十日 水沢国道維持出張所酒井氏現地
調査(総務部快俊・管財部章興 於
赤堂入口付近(月見坂入口)。

三十一日 龍玉寺施餓鬼会(参務秀圓参
席)。

◇九月

一日 月次大般若(本堂)

日光中川光熹師来山(千田貫首
応接)。

春興・光聴、瀬見亀割観音
祭礼出向。

町上下水道事業運営協議会
(管財部章興 於保健C)。

三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)

平泉総社神輿渡御

四日 瀬戸内寂聴師来山(古寺巡礼
撮影)。

ユニバーサルデザイン理解

講座(管財部光聴 かんさん亭)。

六日 栃木教区布教師会様一行二
十五名来山(貫首挨拶 本堂)。

立正佼成会東北教会長様一
行十六名来山(千田貫首挨拶・
執事長案内)。

総務部快俊、花巻出張(北東北
大型観光キャンペーン促進会議
於花巻紅葉館)。

七日 JR北東北デイストネーシ
ョンキャンペーン参加者一
行三十名来山(総務対応)。

八日 平泉小学校三年生五十二名
来山(本堂にて法話)。



平泉総社神輿渡御

九日 千田貫首、衣川にて講話

(衣川小学校)。

参務秀圓、紫波へ出向(五郎

沼薬師神社祭礼 於薬師神社)。

総代世話人会(千田貫首送別会

貫首・執事長・参務・法務 於泉橋

庵)。

十一日 毛越寺貫主・執事長来山(千

田貫首応接)。

本堂裏駐車場発掘調査の現

地説明会。

十二日 日光光輪会様一行来山(千田

貫首案内)。

十三日 中尊寺職員千田貫首謝恩会

(千田貫首・執事長・総務部快俊 於

平泉レスト)。

十四日 東京向島暖氏来山(納札奉納額

奉納の件 総務・法務応接)。

松井建設会長松井角平様他二

名来山(貫首応接)。

十六日 紺紙金字「大般若経」二卷奉

納(奥州市江刺区 高村哲郎様

本堂)。

盛岡遠山様来山(貫首応接)。

千田貫首、江刺出向(中尊

寺千田貫首に感謝する会) 於えさ

し藤原の郷)。

十七日 千田貫首、江刺出向(藤原経

清公御命日祭 餅田史跡保存会

於岩谷堂五位塚墳丘群墓所)。

白符忌(本堂)

町敬老会(総務仁秀 於平中体

育館)。

福聚教会中尊寺支部千田貫

首謝恩会(貫首 大広間)。

十八日 瑞巖寺老師・執事長来山(千

田貫首・総務仁秀応接)。

千田貫首、インタビュー

(テレビ岩手)。

十九日 赤堂・稻荷例祭(護摩供)

一関・平泉短歌会五名来山

(千田貫首応接)。

二十一日 国土交通省 北東北三県主催海外

旅行エージェンツ招聘事業

一行二十一名来山(総務対応)。

二十二日 ウオーキングフェスタIN

平泉運営委員会(総務部快俊

於役場)。

千田貫首、インタビュー

(岩手日日新聞社)。

平泉町有志千田貫首謝恩会

(貫首・執事長・秀圓・光中・邦世・総

務部快俊 於日武蔵坊)。

二十三日 秋彼岸会法要(本堂)

お経を読む会(千田貫首「空

高く 地に低く」本堂)

二十四日 納札奉納額寄贈・法要(向島

九名様 貫首・法務他 本堂)。

中尊寺貫首晋山式・退山式

習礼(本堂)。

二十六日 千田貫首謝恩会(貫首・一山

於日武蔵坊)。

二十七日 千田貫首、町内へ出向(毛越

寺へ挨拶 執事長同行)。

山寺自衛消防隊十二名来山

(研修旅行 管財澄照案内)。

総務部澄円、東京へ出張（觀光客誘致説明会 於Hメトロポリタンエドモンド）。

宮城長昌院様二名来山（千田貫首応援）。

千田貫首、諸堂参拝（金色堂・秘仏他）。

二十九日 千田貫首、諸堂参拝（金色堂・秘仏他）。

三十日 山内薬樹王院法事（本堂）

◇十月

一日 月次大般若（本堂）

千田前貫首、日光へ。

町社会福祉大会（総務仁秀 於郷土館）。

二日 慈眼会（本堂）

山田俊和貫首帰山

中国国家文物局外事部張忠志夫妻来山（公文研邦世・澄照案内）。

新貫首、諸堂参拝（金色堂他 参務・法務同行）。

岩手広告業協会理事長（日報 広告局長）来山（かんさん亭話話の件 執事長・法務）。

件 執事長・法務）。

貫首歓迎会（貫首・一山 広間）。

三日 山田貫首、東京へ（五日）。

テレビ岩手アナウンサー鈴木直志氏来山（晋山・退山式打合 総務仁秀 応援）。

四日 菊まつり協賛会役員会（管財 広間）。

五日 山田貫首、インタビュー（読売新聞）。

六日 瀬戸内寂聴師・天台寺総代来山（千田前貫首・山田貫首応援）

文化庁美術学芸課長山崎秀保氏来山（執事長挨拶 茶室）。

七日 中尊寺貫首晋山・退山式（本堂）。

八日 中国大使館公使夫妻・貫首奥様来山（執事長案内）。

九日 貫首、毛越寺へ挨拶

十一日 観光協会HP検討会（総務部 澄円 於役場）。

十二日 貫首、就任挨拶回り（十五日、日光・東京・京都方面）。

平泉観光推進実行委員会（総務部澄円 於役場）。

十五日 陸奥教区法要（教区所長光中他 弘前薬王院）。

お経を読む会（願成就院）

十六日 貫首・執事長、京都へ出向（三千院門跡円融蔵の竣工落慶式 於同院宸殿）。

十七日 能申合せ（大広間）

十九日 貫首、ニューヨークへ出向（二十五日、ニューヨーク別院落慶一周年記念法要 於同院）。

白虎堂祭祀（山内薬樹王院）

二十日 菊まつり開闢法要

二十一日 一隅托鉢会（於宮城藤田寺）

立正佼成会一行八十名来山（執事長挨拶）。

二十三日 讚衡蔵委員会

二十四日 衣関桜友会主催「脳いきいき教室」講師管財部光聴 於岩手県指定文化財法泉院小前沢坊庫裡。

能申合せ(大広間)

二十五日 管財部章興、矢巾町へ出張

(二十七、特別教育自衛消防隊員講習 於岩手県消防学校。

二十六日 文化庁建造物課下間久美子調査官来山(経蔵・旧覆堂視察 管財澄照・光聴対応)。

二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)



二十九日 平泉通訳ガイドの会研修のため来山。

三十日 讚衡蔵委員会(讚衡蔵)。

貫首、松島へ出向(瑞巖寺へ挨拶)。

県観光経済交流課主催「中国・広州市旅行エージェンツ招聘事業」視察十二名来山。

貫首、インタビュー(各報道機関 広間)。

三十一日 貫首、一山巡拝

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児行列、常の如し。

讚衡蔵第四回館蔵品展「中尊寺と骨寺村」絵図と古文書からみる寺領」開催(十一月二十日)。

郷土芸能奉演(蓬谷窟毘沙門神楽)

九州市民大学一行四十名来山(総務対応)。

能申合せ(能舞台)

二日 菊供養会(本堂)

平泉町長来山(貫首応接)。

県観光経済交流課主催 シンガポール旅行エージェンツ視察来山(総務対応)

お経を読む会(貫首 本堂) 郷土芸能奉演(一関市野々神楽、胆沢行山流都鳥鹿踊)

貫首、東京へ(八日)。

三日 町勢功労者表彰式(参務秀圓 於役場)。

能面「般若」奉納(栗原市、菅原法房夫婦 本堂)。

謡・仕舞(能舞台 喜桜会奉納) 中尊寺能「紅葉狩」

郷土芸能奉演(衣川川西剣舞)

四日 栃木県延命寺稲富師一行十五名来山(参務光中挨拶 本堂)。

六日 観光協会HP委員会(総務部 澄円 於役場)。

JTB東日本国内商品事業部小和

瀬氏来山(総務部快俊(応接))。

讚衡藏委員會(讚衡藏)。

国土交通省運輸局長佐伯洋氏来山(総務対応)。

八日 岩手大菅野文夫氏来山(十一月二十五日シンポジウムの件 総務

仁秀(応接)。

九日 埼玉県本庄仏教会吉田師他九

名来山(貫首挨拶 本堂)。

十日 如法写経十種供養会(本堂)

十一日 平泉中学校統合三十周年記念式典(管財澄照)。

念式典(管財澄照)。

十二日 菊まつり表彰式(大広間)

十三日 職員研修旅行(十六日、台湾

秀園・澄元・快俊同行 一行十七名)。

貫首、最勝寺へ(二十二日)。

十四日 消防署査察(管財部章典 山内

各所)。

おたざクラ他奉納植樹

(栃木県 阿部税様)。

十八日 カンボジア商業大臣・仙台

市長他十名来山(管財澄照案

内)。

十九日 平泉ライオンズクラブ四十

周年記念式典(参務光中・邦世於平泉レスト)。

二十一日 故小堀節子様(三千院御門主小堀光詮御令室)通夜(貫首・執事長

参列 於生源寺)。

九州国立博物館松川博一氏来山(管財対応)。

二十三日 中国浙江省寧波市文物考古研究所

長林士民氏・岩手大教授菅野

文夫氏来山(公文研成寛案内)。

天台会御逮夜(結果勤 本堂)。

二十四日 天台会厳修(御影供 本堂)。

平泉商工会・永年勤続優良従

業員表彰式(執事長 日武蔵坊)。

貫首、最勝寺へ(二十八日)。

二十五日 最勝寺晋山式(地藏院・真珠院・

大長寿院・積善院・内乘院参席)。

天台陸奥仏教青年会研修会

(二十六日、一島正真先生・光明

錫杖法要の修得(大広間)。

二十六日 第二十三回平泉町民号(二十

七日、管財部光聰 最勝寺・富岡八幡宮・鎌倉鶴岡八幡宮方面)。

二十七日 一関菊花会菊花展表彰式

(管財澄照・章典 於一関文化C)。

福家俊明園城寺長吏(現下)上

任五十年を祝う会(貫首於琵琶湖旦)。

二十八日 総務部澄円、町観光キャラ

バン出張(三十日、名古屋大

阪方面)。

二十九日 立正佼成会盛岡・花巻支部

合同参拝団一行三十名来山

(貫首挨拶)。

三十日 町景観形成審議会(執事長

於役場)。

御奉納者 御芳名

平成十七年十二月～平成十八年十一月

一、紺紙金字大般若経一巻 奥州市江刺区 高村哲郎様

(寺報ぐらびあ参照)

一、能面「翁」 大津市 佐々木幸子様

(本年五月四日の古美式三番「開口」にて披露)

一、能面「般若」(面打入江美法師原刻)

栗原市 菅原法房夫様

(寺報ぐらびあ参照)

(旬)平泉観光写真社様

念法眞教総本山金剛寺様

日光交通安全協会様

景光寺 河野純香様

旧制浦和高校有志様

大聖院様

遍照寺様

和堂先生を忍ぶ会 佐藤芙蓉様

日光山輪王寺光輪会様

日光山輪王寺様

浄土宗岩手教区様

向島 暖様

最勝寺様

前貫首・千田孝信様

立正佼成会釜石教会様

栃木教区延命寺様

本庄市佛教会様

宥勝寺様

阿部 税様

五十万円

五万円

三万円

三万円

五万円

三万円

五万円

五万円

五万円

五万円

十二万円

百万円

三百万円

十万円

五万円

三万円

三万円

三万円

三万円

一関信用金庫平泉支店様

三万円

十和田市

慧光エコー代表 村上勝行様

三万円

立正佼成会盛岡教会様

三万円

大仙市

ベル美容室 高橋紀美世様

季毎御供物

立正佼成会花巻教会様

三万円

二戸市

米沢励様

季毎御供物

足利市 阿部税様 「おおたザクラ」他桜樹二本

一関市

豊隆軌道千葉幸八様

四万円
献酒

栗原市 奥福寺檀徒有志様

本堂注連縄

川嶋印刷株式会社様

十万円

衣川区 千葉卓治様

御供用餅米 五斗

(株)ケーテック平泉工事事務所
代表 芦萱敬一様

十六万円
献酒

江刺区 佐賀秀一様

節分会用大豆 五升

一関医師会附属
一関看護専門学校様

三万円

佐藤哲雄様

三万円

(株)精茶百年本舗様

三万円
衡年茶千五百個

山平様

三万円

炬ばた一八 渋谷正幸様

三万円

一関信用金庫 平泉支店様

三万円

金龍徳様

三万円

金成工務店様

五万五千元

岸 久幸様

三万円

志津川町 山口 昇様

五万五千元

仙台市 池田恵美子様

季毎御供物

沼田とも子様

季毎御供物

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成十八年一月〜十一月

富良野市 南砂利工業様

三万五千元

野村隆様

季毎御供物

青森県 笠原山不動院代表
平賀町 小笠原喜世様

四十九万九千五百円
御供物・献酒

弘前市 齋藤直武様

季毎御供物

青森県 南部町 工藤銀四郎様

季毎御供物

小島ヒデ子様

水戸市 藤枝恵枝子様

桐生市 藤原 聡様

さいたま市 小川春吉様

北山英一様

新宿区 宇井彩翔様

中野区 中村武司様

豊島区 天台宗正法院様

和泉市 辻林正博様

御供米

季毎御供物

三万円

三万円

五万円

三万円

三万円

三万円

六万円

赤堂稻荷鳥居建立寄進 御芳名

平成十八年一月～十一月

平泉町 男山酒店様

一基

高砂部屋 朝赤龍関とご一緒に

〔二月三日〕

「大節分会」 歳男 歳女

お申込み承ります

中尊寺の節分会には、歳男・歳女そして大相撲関取を迎え、近隣からも大勢の人が参集し、おかげさまで毎年境内がとても賑やかです。

ことに、中尊寺伝承の『魔滅大師』（まめだいし）は、七難を払う護符であり、「雨過天晴」苦難を乗り越切る心意気を示すものと好評です。

節分の護摩祈祷を申し込んで元気をいただき、魔滅大師を各家の玄関・戸口に貼って吉祥の印とされますようご案内申し上げます。

・厄年（数え）男 二十五歳・四十二歳（大厄）・四十九歳・六十二歳

女 十九歳・三十三歳（大厄）・三十七歳

・還暦（数え）六十一歳（昭和二十二年生まれ）

・当たり年 亥年生まれ

詳細は、中尊寺事務局 法務部 までご連絡ください。

☎〇一九一―四六一―二二二一